

野分

夏目漱石



しらいどうや
白井道也は文学者である。

八年前大学を卒業してから田舎の中学を二三箇所流して歩いた末、去年の春飄然と東京へ戻つて来た。流すとは門附に用いる言葉で飄然とは徂徠に拘わらぬ意味とも取れる。道也の進退をかく形容するの適否は作者といえども受合わぬ。纏れたる糸の片端も眼を着すればただ一筋の末とあらわるるに過ぎぬ。ただ一筋の出処の裏には十重二十重の因縁が絡んでゐるかも知れぬ。鴻雁の北に去りて乙鳥の南に来るさえ、鳥の身になつては相当の弁解があるはずじや。

野分
始めて赴任したのは越後のどこかであつた。越後は石油の名

所である。学校の在る町を四五町隔てて大きな石油会社があつた。学校のある町の繁栄は三分二以上この会社の御蔭で維持されている。町のものに取つては幾個の中学校よりもこの石油会社の方が遙かにありがたい。会社の役員は金のある点において紳士である。中学の教師は貧乏なところが下等に見える。この下等な教師と金のある紳士が衝突すれば勝敗は誰が眼にも明かである。道也はある時の演説会で、金力と品性と云う題目のもとに、両者の必ずしも一致せざる理由を説明して、暗に会社の役員らの暴慢と、青年子弟の何らの定見もなくしていたずらにこうはくばんのうしゆぎ黄白万能主義を信奉するの弊とを戒めた。

役員らは生意気な奴だと云つた。町の新聞は無能の教師が高慢な不平を吐くと評した。彼の同僚すら余計な事をして学校の位地を危うくするのは愚だと思つた。校長は町と会社との関係

を説いて、漫に平地に風波を起すのは得策でないと説諭した。
道也の最後に望を属していた生徒すらも、父兄の意見を聞いて、
身のほどを知らぬ馬鹿教師と云い出した。道也は飄然として越
後を去った。

次に渡ったのは九州である。九州を中断してその北部から工
業を除けば九州は白紙となる。炭礦の煙りを浴びて、黒い呼吸
をせぬ者は人間の資格はない。垢光りのする背広の上へ蒼い顔
を出して、世の中がこうの、社会がああの、未来の国民がなん
のかのと白銅一個にさえ換算の出来ぬ不生産的な言説を弄する
ものに存在の権利のあるうはずがない。権利のないものに存在
を許すのは実業家の御慈悲である。無駄口を叩く学者や、蓄音
機の代理をする教師が露命をつなぐ月々幾片の紙幣は、どこか
ら湧いてくる。手の掌をぽんと叩けば、自から降る幾億の富の、

塵の塵の末を舐めさして、生かして置くのが学者である、文士である、さては教師である。

金の力で生きておりながら、金を誹るのは、生んで貰った親に悪体をつくと同じ事である。その金を作ってくれる実業家を軽んずるなら食わずに死んで見るがいい。死ねるか、死に切れずに降参をするか、試めして見ようと云つて抛り出された時、道也はまた飄然と九州を去つた。

第三に出現したのは中国辺の田舎である。ここの氣風はさほどに猛烈な現金主義ではなかった。ただ土着のものがむやみに幅を利かして、他県のを外国人と呼ぶ。外国人と呼ぶだけならそれまでであるが、いろいろに手を廻わしてこの外国人を征服しようとする。宴会があれば宴会でひやかす。演説があれば演説であてこする。それから新聞で厭味を並べる。生徒にか

らかわせる。そうしてそれが何のためでもない。ただ他県のも
のが自分と同化せぬのが氣に懸るからである。同化は社会の要
素に違ない。仏蘭西フランスのタルドと云う学者は社会は模倣なりとさ
え云うくらいだ。同化は大切かも知れぬ。その大切さ加減は
道也といえども心得ている。心得ているところではない、高等
な教育を受けて、広義な社会觀を有している彼は、凡俗以上に
同化の功德くどくを認めている。ただ高いものに同化するか低いもの
に同化するかが問題である。この問題を解釈しないでいたずら
に同化するのは世のためにならぬ。自分から云えばいちぶん一分が立た
ぬ。

ある時旧藩主が学校を參觀に来た。旧藩主は殿様で華族様で
ある。所のものから云えば神様である。この神様が道也の教室
へ這入はいつて来た時、道也は別に意にも留めず授業を継続してい

た。神様の方では無論挨拶あいさつもしなかつた。これから事が六むずかしくなつた。教場は神聖である。教師が教壇に立つて業を授けるのは侍さむらいが物の具ぐに身を固めて戦場に臨むようなものである。いくら華族でも旧藩主でも、授業を中絶させる権利はないとは道也の主張であつた。この主張のために道也はまた飄然ひようぜんとして任地を去つた。去る時に土地のものは彼をもく目して頑愚がんぐだと評し合つたそうである。頑愚と云われたる道也はこの嘲罵ちようばを背に受けながら飄然として去つた。

三みたび飄然と中学を去つた道也は飄然と東京へ戻つたなり再び動く景色けしきがない。東京は日本で一番世地せちがら辛い所である。田舎になげういるほどの俸給を受けてさえ楽には暮せない。まして教職を抛なげうつて両手たもとを袂へ入れたままで遣り切きるのは、立ちながらみい、らとなる工夫くふうと評するよりほかに賞めほようのない方法である。

道也には妻さいがある。妻と名がつく以上は養うべき義務は附随してくる。自みづからみいらとなるのを甘んじて妻を干ひばし乾にする訳わけには行かぬ。干乾にならぬよほど前から妻君はすでに不平である。

始めて越後えちごを去る時には妻君に一部始終いちぶしじゆうを話した。その時妻君はごもつともでござんすと云つて、甲斐かい甲斐がいしく荷物てこしらえの手拵てを始めた。九州を去る時にもその顛末てんまつを云つて聞かせた。今度はまたですかと云つたぎり何にも口を開かなかつた。中国を出る時の妻君の言葉は、あなたのように頑固がんこではどこへいらしても落ちつけつありませんわと云う訓戒的あいさつの挨拶あいさつに変化していた。七年の間に三たび漂泊とのおして、三たび漂泊するうちに妻君はしだいと自分の傍を遠退とのおくようになった。

妻君が自分の傍を遠退くのは漂泊のためであらうか、俸禄ほうろくを棄す

てゐるためであらうか。何度漂泊しても、漂泊するたびに月給が上がつたらどうだろう。妻君は依然として「あなたのように……」と不服がましい言葉を洩もらしたろうか。博士にでもなつて、大学教授に転任してもやはり「あなたのように……」が繰り返されるであらうか。妻君の了簡りようけんは聞いて見なければ分らぬ。

博士になり、教授になり、空むなしき名を空しく世間おつとに謳うたわるるがため、その反響が妻君の胸に轟とどろいて、急に夫の待遇を変えなうらばこの細君は夫の知己ちぎとは云えぬ。世の中が夫を遇する朝夕ちようせきの模様で、夫の価値を朝夕に変える細君は、夫を評価する上において、世間並せけんなみの一人である。嫁とつがぬ前、名を知らぬ前、の己おのれと異なるところがない。従つて夫から見ればあかの他人である。夫を知る点において嫁ぐ前と嫁ぐ後のちとに変わりがなければ、少なくともこの点において細君らしいところがないのである。

世界はこの細君らしからぬ細君をもつて充滿している。道也は自分の妻さいをやはりこの同類と心得ているだろうか。至る所に容いれられぬ上に、至る所に起居を共にする細君さえ自分を解してくれないのだと悟つたら、定めて心細いだろう。

世の中はかかる細君をもつて充滿していると云つた。かかる細君をもつて充滿しておりながら、皆円満にくらしている。順境にある者が細君の心事をここまで解剖する必要がある。皮膚病に罹かればこそ皮膚の研究が必要になる。病氣も無いのに汚ないものを顕微鏡けんびきょうで眺ながめるのは、事なきに苦しんで肥柄杓こえびしやくを振り廻すと一般である。ただこの順境が一転して逆落さかおとしに運命の淵ふちへころがり込む時、いかな夫婦の間にも氣まずい事が起る。親子の羈絆きずなもぽつりと切れる。美くしいのは血の上を薄く蔽おほう皮の事であつたと氣がつく。道也はどこまで氣がついたか知ら

ぬ。

道也の三たび去つたのは、好んで自から窮地に陥るためではない。おちい罪もない妻に苦勞を掛けるためではなおさらない。世間が己れおのを容れぬから仕方がないのである。世が容れぬならなぜこちらから世に容れられようとはせぬ？ 世に容れられようとする刹那せつなに道也は奇麗きれいに消滅してしまうからである。道也は人格において流俗りゅうぞくより高いと自信している。流俗より高ければ高いほど、低いものの手を引いて、高い方へ導いてやるのが責任である。高いと知りながらも低きにつくのは、自から多年の教育を受けながら、この教育の結果がもたらした財宝を床下ゆかしたに埋むうずるようなものである。自分の人格を他に及ぼさぬ以上は、せつかくに築き上げた人格は、築きあげぬ昔と同じく無功力で、築き上げた労力だけを徒費した訳になる。英語を教え、歴史を教

え、ある時は倫理さえ教えたのは、人格の修養に附随して蓄え^{たくわ}られた、芸を教えたのである。単にこの芸を目的にして学問をしたならば、教場で書物を開いてさえいれば済む。書物を開いて飯を食って満足しているのは綱渡りが綱を渡って飯を食い、皿廻しが皿を廻わして飯を食うのと理論において異なるところはない。学問は綱渡りや皿廻しとは違う。芸を覚えるのは末の事である。人間が出来上るのが目的である。大小の区別のつく、^{けいちよう}軽重の等差を知る、^{こうお}好悪の判然する、善悪の分界を呑み込んだ、賢愚、真偽、正邪の批判を^{あや}謬まらざる大丈夫が出来上がるのが目的である。

道也是这样考えている。だから芸を^う售つて口を糊^こするのを恥辱とせぬと同時に、学問の根底たる立脚地を離るるのを深く陋劣^{ろうれつ}と心得た。彼が至る所に容れられぬのは、学問の本体に根拠地

を構えての上の去就きよしゆうであるから、彼自身は内に顧かえりみて疚やましいところもなければ、意気地ちようばがないとも思いつかぬ。頑愚がんぐなどと云う嘲罵てのひらは、掌てのひらへ載せて、夏の日の南軒なんけんに、虫眼鏡むしめがねで検査しても了解が出来ん。

三度みたび教師となつて三度追ひ出された彼は、追ひ出されるたびに博士よりも偉大な手柄てがらを立てたつもりでいる。博士はえらからう、しかしたかが芸で取る称号である。富豪が製艦費を献納して従五位じゆごいをちようだいするのと大した変りはない。道也が追ひ出されたのは道也の人物が高いからである。正しき人は神の造れるすべてのうちにて最も尊きものなりとは西の国の詩人の言葉だ。道を守るものは神よりも貴たつとしとは道也が追わるること

に心のうちで繰り返す文句である。ただし妻君はかつてこの文句を道也の口から聞いた事がない。聞いても分かるまい。

わからねばこそ餓え死にもせぬ先から、夫に対して不平なのである。不平な妻をさい気の毒と思わぬほどの道也ではない。ただ妻の歡心を得るために吾わが行く道を曲げぬだけが普通の夫と違ちがうのである。世は単に人と呼ぶ。娶めとれば夫である。交まじわれば友である。手を引けば兄、引かるれば弟である。社会に立てば先覚者にもなる。校舎に入れば教師に違いない。さるを単に人と呼ぶ。人と呼んで事足るほどの世間なら単純である。妻君は常にこの単純な世界に住んでいる。妻君の世界には夫としての道也のほかには学者としての道也もない、志士としての道也もない。道を守り俗に抗する道也はなおさらない。夫が行く先き先きで評判が悪くなるのは、夫の才が足らぬからで、到いたる所に職を辞するのは、自から求むる醉興すいきようにほかならんとまで考えている。

酔興を三たび重ねて、東京へ出て来た道也は、もう田舎^{いなか}へは行かぬと言ひ出した。教師ももうやらぬと妻君に打ち明けた。学校に愛想をつかした彼は、愛想をつかした社会状態を矯正^{きようせい}するには筆の力によらねばならぬと悟つたのである。今まではいずこの果^{はて}で、どんな職業をしようとも、己^{おの}れさえ真直であれば曲がつたものは苧^{おがら}殻のように向うで折れべきものと心得ていた。盛名はわが望むところではない。威望もわが欲するところではない。ただわが人格の力で、未来の国民をかたちづくる青年に、向上の眼^{まなこ}を開かしむるため、取捨^{しゆしやふんべつ}分別の好例を自家身上に示せば足るとのみ思い込んで、思い込んだ通りを六年余り実行して、見事に失敗したのである。渡る世間に鬼はないと云うから、同情は正しき所、高き所、物の理窟^{りくつ}のよく分かる所に聚^{あつ}まると早合点して、この年月^{としつき}を今度こそ、今度こそ、と経験の足らぬ吾身^{わがみ}に、

待ち受けたのは生涯しょうがいの誤りである。世はわが思うほどに高尚なものではない、鑑識かんしのあるものでもない。同情とは強きもの、富めるものにのみ随したがう影にほかならぬ。

ここまで進んでおらぬ世を買い被かぶつて、一足飛いっそくとびに田舎へ行つたのは、地ならしをせぬ地面の上へ丈夫な家を建てようとあせるようなものだ。建てかけるが早いか、風と云い雨と云う曲者くせものが来て壊こわしてしまう。地ならしをするか、雨風あめかぜを退治たいじるかせぬうちは、落ちついてこの世に住めぬ。落ちついて住めぬ世を住めるようにしてやるのが天下の士の仕事である。

金かねも勢いきおいもないものが天下の士に恥じぬ事業を成すには筆の力に頼らねばならぬ。舌たすけの援かを藉らねばならぬ。脳味噌のうみそを圧搾あつさくして利り他たの智慧ちえを絞しぼらねばならぬ。脳味噌は涸かれる、舌は爛ただれる、筆は何本でも折れる、それでも世の中が云う事を聞かなければ

それまでである。

しかし天下の士といえども食わずには働けない。よし自分だけは食わんで済むとしても、妻は食わずに辛抱しんぼうする氣遣きづかいはない。豊かに妻を養わぬ夫は、妻の眼から見れば大罪人である。今年の春、田舎から出て来て、芝琴平町の安宿へ着いた時、道也と妻君の間にはこんな会話が起つた。

「教師をおやめなさるつて、これから何をなさるおつもりですか」

「別にこれと云うつもりもないがね、まあ、そのうち、どうかなるだろう」

「その内うちどうかなるだろうつて、それじゃまるで雲を攫つかむような話しじゃありませんか」

「そうさな。あんまり判然はんぜんとしちやいない」

「そう呑氣^{のんき}じゃ困りますわ。あなたは男だからそれでようござんしょうが、ちつとは私の身にもなつて見て下さらなくっちゃあ……」

「だからさ、もう田舎へは行かない、教師にもならない事にきめたんだよ」

「きめるのは御勝手ですけども、きめたつて月給が取れなけりや仕方がないじゃありませんか」

「月給がとれなくつても金がとれれば、よかろう」

「金がとれれば……そりやようござんすとも」

「そんなら、いいさ」

「いいさつて、御金がとれるんですか、あなた」

「そうさ、まあ取れるだろうと思うのさ」

「どうして？」

「そこは今考え中だ。そう着、ちやく 早々計画が立つものか」そうそう

「だから心配になるんですわ。いくら東京にいるときめたつて、きめただけの思案しあんじゃ仕方がないじゃありませんか」

「どうも御前おまえはむやみに心配性でいけない」

「心配もしますわ、どこへいらしても折合おりあいがわるくつちや、おやめになるんですもの。私が心配性なら、あなたはよつぽどかんしゃくも癪癪持ちですわ」

「そうかも知れない。しかしおれの癪癪は……まあ、いいや。どうか東京で食えるようにするから」

「御兄おあにさんの所へいらしつて御頼みなすつたら、どうでしょう」

「うん、それも好いがね。兄はいつたい人の世話なんかする男じゃないよ」

「あら、そう何でも一人できめて御おしまいになるから悪るいん

ですわ。昨日きのうもあんなに親切にいろいろ言つて下さつたじゃありませんか」

「昨日か。昨日はいろいろ世話を焼くような事を言つた。言つたがね……」

「言つてもいけないんですか」

「いけないかないよ。言うのは結構だが……あんまりあて当にならないからな」

「なぜ？」

「なぜって、その内だんだんわかるさ」

「じゃ御友達の方にでも願つて、あしたからでも運動をなすつたらいいでしょう」

「友達つて別に友達なんかありやしない。同級生はみんな散つてしまつた」

「だって毎年年始状を御寄こしになる足立あだちさんなんか東京で立派にしていらつしやるじゃありませんか」

「足立か、うん、大学教授だね」

「そう、あなたのように高くばかり構えていらつしやるから人に嫌きらわれるんですよ。大学教授だねって、大学の先生になりや結構じゃありませんか」

「そうかね。じゃ足立の所へでも行って頼んで見ようよ。しかし金さえ取れば必ず足立の所へ行く必要はなからう」

「あら、まだあんな事を云っていらつしやる。あなたはよつぽど強情ね」

「うん、おれはよつぽど強情だよ」

午に逼る秋の日は、頂く帽を透して頭蓋骨のなかさえ朗かならしめたかの感がある。公園のロハ台はそのロハ台たるの故をもつてことごとくロハ的に占領されてしまった。高柳君は、どこぞ空いた所はあるまいかと、さつきからちようど三度日比谷を巡回した。三度巡回して一脚の腰掛も思うように我を迎えないのを発見した時、重そうな足を正門のかたへ向けた。すると反対の方から同年輩の青年が早足に這入つて来て、やあと声を掛けた。

「やあ」と高柳君も同じような挨拶をした。

「どこへ行つたんだい」と青年が聞く。

「今ぐるぐる巡つて、休もうと思つたが、どこも空いていない。駄目だ、ただで掛けられる所はみんな人が先へかけている。な

かなか^{ぬけめ}拔目はないもんだな」

「天氣がいいせいだよ。なるほど随分人が出ているね。——お

い、あの孟宗^{もうそうやぶ}藪を回って噴水の方へ行く人を見たまえ」

「どれ。あの女か。君の知ってる人かね」

「知るものか」

「それじゃ何で見る必要があるのだい」

「あの着物の色さ」

「何だか立派なものを着ているじゃないか」

「あの色を竹藪の傍へ持つて行くと非常にあざやかに見える。

あれは、こう云う透明な秋の日に照らして見ないと引き立たないんだ」

「そうかな」

「そうかなって、君そう感じないか」

「なぜ？ いやかい」

「厭いやじゃない——厭いやじゃないが、始終御馳走ごちそうにばかりなるから」

「ハハハ遠慮か。まあ来たまえ」と青年は否応いやおうなしに高柳君を

公園の真中の西洋料理屋へ引つ張り込んで、眺望ちようぼうのいい二階へ陣を取る。

注文の来る間、高柳君は蒼あおい顔へ両手で突つつかい棒ぼうをして、

さもつかれたと云う風に往来を見ている。青年は独ひとりで「ふん

だいぶ広いな」「なかなか繁昌はんじやうすると見える」「なんだ、妙な所へ

姿見の広告などを出して」などと半分口のうちに云うかと思つ

たら、やがて洋袴ズボンの隠袋かくしへ手を入れて「や、しまった。煙草たばこを

買ってくるのを忘れた」と大きな声を出した。

「煙草なら、ここにあるよ」と高柳君は「敷島」の袋を白い卓布たくふの上へ抛ほうり出す。

ところへ下女が御誂おあつらえを持つてくる。煙草に火を点つける間まはなかつた。

「これは樽麦酒たるビールだね。おい君樽麦酒の祝杯を一つ挙げようじゃないか」と青年は琥珀色こはくいろの底から湧わき上がる泡あわをぐいと飲む。

「何の祝杯を挙げるのだい」と高柳君は一口飲みながら青年に聞いた。

「卒業祝いさ」

「今頃卒業祝いか」と高柳君は手のついた洋盃コップを下へおろしてしまった。

「卒業は生涯しょうがいにたった一度しかないんだから、いつまで祝つてもいいさ」

「たった一度しかないんだから祝わないでもいいくらいだ」

「僕とまるで反対だね。——姉さん、このフライは何だい。え？」

鮭か。ここん所^{ところ}へ君、このオレンジの露をかけて見たまえ」と青年は人指指^{ひとさしゆび}と親指の間からちゅうと黄色い汁を鮭の衣^{ころも}の上へ落す。庭の面^{おもて}にはらはらと降る時雨^{しぐれ}のごとく、すぐ油の中へ吸い込まれてしまった。

「なるほどそうして食うものか。僕は装飾についてるのかと思つた」

姿見の札幌麦酒^{さつぽろビール}の広告の本^{もと}に、大きくなつて構えていた二人の男が、この時急に大きな破^われるような声を出して笑い始めた。高柳君はオレンジをつまんだまま、厭な顔をして二人を見る。二人はいつこう構わない。

「いや行くよ。いつでも行くよ。エへへへ。今夜行こう。あんまり気が早い。ハハハハハ」

「エへへへ。いえね、実はね、今夜あたり君を誘つて繰り出

そうと思つていたんだ。え？　ハハハハ。なにそれほどでもない。ハハハハ。そら例のが、あれでしょう。だから、どうにもこうにもやり切れないのさ。エヘヘヘ、アハハハハハハ」

土鍋どなべの底のような赭あかい顔が広告の姿見に写つて崩くずれたり、かたまつたり、伸びたり縮んだり、傍若無人ぼうじやくぶじんに動揺している。高柳君は一種異様な厭な眼つきを転じて、相手の青年を見た。

「商人だよ」と青年が小声に云う。

「実業家かな」と高柳君も小声に答えながら、とうとうオレンジを絞しぼるのをやめてしまった。

土鍋の底は、やがて勘定を払つて、ついでに下女にからかつて、二階を買い切つたような大きな声を出して、そうして出て行つた。

「おい中野君」

「むむ？」と青年は鳥の肉を口いっぱい頬張ほおばっている。

「あの連中れんじゅうは世の中を何と思ってるだろう」

「何とも思うものかね。ただああやって暮らしているのさ」

「羨うらやましいな。どうかして——どうもいかな」

「あんなものが羨しくつちや大変だ。そんな考だから卒業祝に同意しないんだろう。さあもう一杯景気よく飲んだ」

「あの人が羨ましいのじゃないが、ああ云う風に余裕があるような身分が羨ましい。いくら卒業したつてこう奔命ほんめいに疲れちや、少しも卒業のありがた味はない」

「そうかなあ、僕なんぞ嬉うれしくつてたまらないがなあ。我々の生命はこれからだぜ。今からそんな心細い事を云つちやあしよ
うがない」

「我々の生命はこれからだのに、これから先が覚束おぼつかないから厭いや

になつてしまふのさ」

「なぜ？ 何もそう悲観する必要はないじゃないか、大にやるおおさ。僕もやる気だ、いつしよにやろう。大に西洋料理でも食つて——そらビステキが来た。これでおしまいだよ。君ビステキなまやきの生焼は消化がいいつて云うぜ。こいつはどうかな」と中野君は洋刀ナイフを揮つて厚切りあつぎの一片いっぺんを中央まんなかから切断した。

「なあるほど、赤い。赤いよ君、見たまえ。血が出るよ」

高柳君は何にも答えずにむしやむしや赤いビステキを食い始めた。いくら赤くてもけつして消化がよきそうには思えなかつた。

人にわが不平を訴えんとするとき、わが不平が徹底せぬうち、先方ちゆうとはんばから中途半把いしやな慰藉こころを与えらるるのは快よくないものだ。わが不平が通じたのか、通じないのか、本当に気の毒がるのか、

御世辞おせじに氣の毒がるのか分らない。高柳君はビステキの赤さ加減ながを眺めながら、相手はなぜこう感情が粗大そだいだろうと思つた。もう少し切り込みたいと云う矢先やさきへ持つて来て、ざああと水を懸かけるのが中野君の例である。不親切な人、冷淡な人ならば始めからそれ相應の用意をしてかかるから、いくら冷たくても驚ろく氣遣きづかいはない。中野君がかような人であつたなら、出鼻をはたかれてもさほどに口惜くやしくはなかつたろう。しかし高柳君の眼に映ずる中野輝一なかのきいちは美しい、賢こい、よく人情を解して事理を弁わきまえた秀才である。この秀才が折々この癖を出すのは解かいしにくい。

彼らは同じ高等学校の、同じ寄宿舎の、同じ窓に机を並べて生活して、同じ文科に同じ教授の講義を聴いて、同じ年のこの夏に同じく学校を卒業したのである。同じ年に卒業したものは

両手の指を二三度屈するほどいる。しかしこの二人ぐらい親しいものはなかった。

高柳君は口数をきかぬ、人交りひとまじわをせぬ、厭世家えんせいかの皮肉屋と云われた男である。中野君は鷹揚おうような、円満な、趣味に富んだ秀才である。この兩人ふたりが卒然まじわりと交を訂ていしてから、傍目はためにも不審と思われるくらい昵懇じつこんな間柄あいだがらとなった。運命は大島の表おおしまと秩父ちちぶの裏とを縫い合せる。

天下に親しきものがただ一人ひとりあつて、ただこの一人よりほかに親しきものを見出し得ぬとき、この一人は親でもある、兄弟でもある。さては愛人である。高柳君は単なる朋友ほうゆうをもつて中野君を目もくしてはおらぬ。その中野君がわが不平を残りにく聞きいてくれぬのは残念である。途中で夕立に逢つて思う所へ行かずに引き返したようなものである。残りなく聞きいてくれぬ上に、

呑気な慰藉をかぶせられるのはなおさら残念だ。膿を出してくれと頼んだ腫物を、いい加減の真綿で、撫で廻わされたつてむず痒いばかりである。

しかしこう思うのは高柳君の無理である。御雛様に芸者の立て引きがないと云つて攻撃するのは御雛様の恋を解せぬもの言草である。中野君は富裕な名門に生れて、暖かい家庭に育つたほか、浮世の雨風は、炬燵へあたって、椽側の硝子戸越に眺めたばかりである。友禅の模様はわかる、金屏の冴えも解せる、銀燭の耀きもまばゆく思う。生きた女の美しさはなおさらに眼に映る。親の恩、兄弟の情、朋友の信、これらを知らぬほどの木強漢では無論ない。ただ彼の住む半球には今までいつでも日が照つていた。日の照つている半球に住んでいるものが、片足をとんと地に突いて、この足の下に真暗な半球があると気がつ

くのは地理学を習った時ばかりである。たまには歩いていて、気がつかぬとも限らぬ。しかしさぞ暗い事だろうと身に沁^しみてぞつとする事はあるまい。高柳君はこの暗い所に淋しく住んでいる人間である。中野君とはただ大地を踏まえる足の裏が向き合っているというほかに何らの交渉もない。縫い合わされた大島の表と秩父の裏とは覚束^{おぼつか}なき針の目を忍んで繋^{つな}ぐ、細い糸の御蔭^{おかげ}である。この細いものを、するすると抜けば鹿児島県と埼玉県の間には依然として何百里の山河^{さんがよこた}が横わっている。齒を病^やんだ事のないものに、齒の痛みを持って行くよりも、早く齒医者に馳^かけつけるのが近道だ。そう痛がらんでもいいさと云われる病人は、けっして慰藉を受けたとは思うまい。

「君などは悲観する必要がないから結構だ」と、ビステキを半分で断念した高柳君は敷島をふかしながら、相手の顔を眺めた。

相手は口をもがもがさせながら、右の手を首と共に左右に振つたのは、高柳君に同意を表しないのと見える。

「僕が悲観する必要がある？ 悲観する必要があるとすると、つまりおめでたい人間と云う意味になるね」

高柳君は覚えず、薄い唇を動かしかけたが、微かな漣は頬ま^{かす}で広がらぬ先に消えた。相手はなお言葉をつづける。

「僕だつて三年も大学にいて多少の哲学書や文学書を読んでるじゃないか。こう見えても世の中が、どれほど悲観すべきものであるかぐらいは知ってるつもりだ」

「書物の上でだろう」と高柳君は高い山から谷底を見下ろしたように云う。

「書物の上——書物の上では無論だが、実際だつて、これなかなか苦痛もあり煩悶^{はんもん}もあるんだよ」

「だって、生活には困らないし、時間は充分あるし、勉強はしたいだけ出来るし、述作は思う通りにやれるし。僕に較くらべると君は実に幸福だ」と高柳君今度はさも羨うらやましそうに嘆息する。

「ところが裏面はなかなかそんな気楽なんじゃないさ。これでもいろいろ心配があつて、いやになるのだよ」と中野君は強しいて心配の所有権を主張している。

「そうかなあ」と相手は、なかなか信じない。

「そう君まで茶かしちや、いよいよつまらなくなる。実は今日あたり、君の所へでも出掛けて、大に同情おおいしてもらおうかと思つていたところさ」

「訳わけをきかせなくつちや同情も出来ないね」

「訳はだんだん話すよ。あんまり、くさくさするから、こうやつて散歩に来たくらいなものさ。ちつとは察するがいい」

高柳君は今度は公然とにやにやと笑った。ちつとは察しるつもりでも、察しようがないのである。

「そうして、君はまたなんで今頃公園なんか散歩しているんだね」と中野君は正面から高柳君の顔を見たが、

「や、君の顔は妙だ。日の射^さしている右側の方は大変血色がいいが、影になつてゐる方は非常に色沢^{いろつや}が悪い。奇妙だな。鼻を境^{むじゅん}に矛盾^{むじゅん}が睨^{にら}めこをしている。悲劇と喜劇の仮面^{めん}を半々につぎ合せたようだ」と息もつがず、述べ立てた。

この無心の評を聞いた、高柳君は心の秘密を顔の上で読まれたように、はつと思うと、右の手で額^{あじ}の方から額のあたりまで、ぐるりと撫^なで廻^{まわ}わした。こうして顔の上の矛盾をかき混^まぜるつもりなのかも知れない。

「いくら天氣がよくつても、散歩なんかする暇^{ひま}はない。今日は

新橋の先まで遺失品を探^さがしに行つてその帰りがけにちよつと
ついでだから、ここで休んで行こうと思つて来たのさ」と顔を
攪^かき廻した手を顎^{あご}の下へかつて依然として浮かぬ様子をする。
悲劇の面^{めん}と喜劇の面をまぜ返えしたから通例の顔になるはずで
あるのに、妙に濁つたものが出来上つてしまった。

「遺失品で、何を落したんだい」

「^{きのう}昨日電車の中で草稿^{そうごう}を失つて——」

「草稿？ そりや大変だ。僕は書き上げた原稿が雑誌へ出るま
では心配でたまらない。実際草稿なんてものは、吾^{われわれ}々に取つて、
命より大切なものだからね」

「なに、そんな大切な草稿でも書ける暇があるようだといひん
だけれども——駄目だ」と自分を輕蔑^{けいべつ}したような口調^{くちよう}で云う。

「じゃ何の草稿だい」

「地理教授法の訳だ。^{やく} あしたまでに届けるはずにしてあるのだから、今なくなつちや原稿料も貰えず、またやり直さなくつちやならず、実に厭^{いや}になつちまう」

「それで、探^さがしに行つても出て来^こないのかい」

「来ない」

「どうしたんだろう」

「おおかた車掌が、うちへ持つて行つて、は、た、き、でも拵^{こしら}えたんだろう」

「まさか、しかし出なくつちや困るね」

「困るなあ自分の不注意と我慢するが、その遺失品係りの厭^{いや}な奴^{やつ}だ事つて——実に不親切で、形式的で——まるで版行^{はんこう}におしたような事をぺらぺらと一通り述べたが以上、何を聞いても知りません知りませんで持ち切っている。あいつは廿世紀の日本

人を代表している模範的人物だ。あすこの社長もきつとあんな奴に違ちがない」

「ひどく癪しゃくに障さわったものだね。しかし世の中はその遺失品係りのようなばかりじゃないからいいじゃないか」

「もう少し人間らしいのがいるかい」

「皮肉な事を云う」

「なに世の中が皮肉なのさ。今の世のなかは冷酷きようしんかいの競進きようしんかい会かい見たようなものだ」と云いながら呑みかけの「敷島」を二階てすりの欄干かどぐちから、下へ抛なげる途端とたんに、ありがとうと云う声こゑがして、ぬつと門口かどぐちを出た二人連ふたりづれの中折帽の上へ、うまい具合に燃殻もえがらが乗のりかつた。男は帽子から煙を吐いて得意になつて行く。

「おい、ひどい事をするぜ」と中野君が云う。

「なに過あやまちだ。——ありや、さっきの実業家だ。構ほううもんか抛ほうつ

て置け」

「なるほどさっきの男だ。何で今までぐずぐずしていたんだらう。下で球でも突いていたのか知らん」

「どうせ遺失品係りの同類だから何でもするだろう」

「そら気がついた——帽子を取つてはたいている」

「ハハハハ滑稽だ」と高柳君は愉快そうに笑った。

「随分人が悪いなあ」と中野君が云う。

「なるほど善くないね。偶然とは申しながら、あんな事で仇を

打つのは下等だ。こんな真似をして嬉しがるようでは文学士の

価値もめちやめちやだ」と高柳君は瞬時にしてまた元の浮かぬ

顔にかえる。

「そうさ」と中野君は非難するような賛成するような返事をする。

「しかし文学士は名前だけで、その実は筆耕ひつこうだからな。文学士にもなつて、地理教授法の翻訳の下働きしたばたらをやつてるようじゃ、心細い訳わけだ。それでも僕が卒業したら、卒業したらつて待つてくれた親もあるんだからな。考えると気の毒なものだ。この様子じゃいつまで待つてくれたつて仕方がない」

「まだ卒業したばかりだから、そう急に有名にはなれないさ。そのうち立派な作物さくぶつを出して、大に本領おおいを発揮する時に天下は我々のものとなるんだよ」

「いつの事やら」

「そう急せいたつて、いけない。追々新陳代謝してくるんだから、何でも気を永くして尻すを据すえてかからなくっちゃ、駄目だ。なに、世間じゃ追々我々の真価を認めて来るんだからね。僕なんぞでも、こうやつて始終しじゅう書いていると少しは人の口に乗るから

ね」

「君はいいさ。自分の好きな事を書く余裕があるんだから。僕なんか書きたい事はいくらでもあるんだけれども落ちついて述作なぞをする暇はとてもない。実に残念でたまらない。保護者でもあつて、気楽に勉強が出来ると名作も出して見せるがな。せめて、何でもいいから、月々きまつて六十円ばかり取れる口があるといいのだけれども、卒業前から自活はしていたのだが、卒業してもやつぱりこんなに困難するだろうとは思わなかった」

「そう困難じゃ仕方がない。僕のうちの財産が僕の自由になると、保護者になつてやるんだがな」

「どうか願います。——実に厭^{いや}になつてしまふ。君、今考える」と田舎の中学の教師の口だつて、容易にあるもんじやないな」

「そうだろうな」

「僕の友人の哲学科を出たものなんか、卒業してから三年になるが、まだ遊^{あす}んでるぜ」

「そうかな」

「それを考えると、子供の時なんか、訳もわからずに悪い事をしたもんだね。もつとも今とその頃とは時勢が違うから、教師の口も今ほど払^{ふって}底でなかったかも知れないが」

「何をしたんだい」

「僕の国の中学校に白井道也^{しらいどうや}と云う英語の教師がいたんだがね」

「道也た妙な名だね。釜^{かま}の銘^{めい}にありそうじゃないか」

「道也^{どうや}と読むんだか、何だか知らないが、僕らは道也、道也と呼んだものだ。その道也先生がね——やつぱり君、文学士だぜ。その先生をとうとうみんなして追い出してしまった」

「どうして」

「どうしてつて、ただいじめて追い出しちまったのさ。なに良い先生なんだよ。人物や何かは、子供だからまるでわからなかったが、どうも悪い人じゃなかったらしい……」

「それで、なぜ追い出したんだい」

「それがさ、中学校の教師なんて、あれでなかなか悪い奴がいるもんだぜ。僕らあ煽動せんどうされたんだね、つまり。今でも覚えているが、夜よる十五六人で隊を組んで道也先生の家うちの前へ行つてワーって呐喊とっかんして二つ三つ石を投げ込んで来るんだ」

「乱暴だね。何だつて、そんな馬鹿な真似まねをするんだい」

「なぜだかわからない。ただ面白いからやるのさ。おそらく吾々の仲間でなぜやるんだか知つてたものは誰もあるまい」

「気楽だね」

「実に気楽さ。知つてるのは僕らを煽動せんどうした教師ばかりだろう。

何でも生意氣なまいきだからやれつて云うのさ」

「ひどい奴だな。そんな奴が教師にいいのかい」

「いるとも。相手が子供だから、どうしても云う事を聞くからかも知れないが、いるよ」

「それで道也先生どうしたい」

「辞職しちまつた」

「かわいそう可哀想に」

「実に気の毒な事をしたもんだ。定めし転任先をさがす間活計かつけいに困つたろうと思つてね。今度逢つたら大に謝罪の意を表するつもりだ」

「今どこにいるんだい」

「どこにいるか知らない」

「じゃいつ逢うか知れないじゃないか」

「しかしいつ逢うかわからない。ことによると教師の口がなくなつて死んでしまったかも知れないね。——何でも先生辭職する前に教場へ出て来て云つた事がある」

「何て」

「諸君、吾々は教師のために生きべきものではない。道のため
に生きべきものである。道は尊たつといものである。この理窟りくつがわ
らないうちは、まだ一人前になつたのではない。諸君も精出し
てわかるようにおなり」

「へえ」

「僕らは不相変あいかわらず教場内でワーつと笑つたあね。生意氣だ、生意
氣だつて笑つたあね。——どっちが生意氣か分りやしない」

「随分田舎の学校などにや妙な事があるものだね」

「なに東京だつて、あるんだよ。学校ばかりじゃない。世の中

はみんなこれなんだ。つまらない」

「時にだいぶ長話しをした。どうだ君。これから品川の妙花園みょうかえんまで行かないか」

「何しに」

「花を見にさ」

「これから帰って地理教授法を訳さなくっちゃならない」

「一日いちにちぐらい遊んだってよかろう。ああ云う美くしい所へ行くと、好い心持ちになつて、翻訳もはかが行くぜ」

「そうかな。君は遊びに行くのかい」

「遊あそびかたがたさ。あすこへ行つて、ちよつと写生して来て、材料にしようと思つてゐるんだがね」

「何の材料に」

「出来たら見せるよ。小説をかいてゐるんだ。そのうちの一章

に女が花園はなぞののなかに立つて、小さな赤い花を余念よねんなく見詰みづめて
いると、その赤い花がだんだん薄くなつてしまいに真白になつ
てしまふと云うところを書いて見たいと思うんだがね」

「空想小説かい」

「空想的で神秘的で、それで遠い昔しが何だかなつかしいよう
な気持のするものが書きたい。うまく感じが出ればいいが。ま
あ出来たら読んでくれたまえ」

「妙花園なんぞ、そんな参考にやならないよ。それよりかうち
へ帰つてホルマン・ハントの画えでも見る方がいい。ああ、僕も
書きたい事があるんだがな。どうしても時がない」

「君は全体自然がきらいだから、いけない」

「自然なんて、どうでもいいじゃないか。この痛切な二十世紀
にそんな気楽な事が云つていられるものか。僕のは書けば、そ

んな夢見たようなものじゃないんだからな。奇麗きれいでなくつても、

痛くつても、苦しくつても、僕の内面の消息にどこか、触れていればそれで満足するんだ。詩的でも詩的でなくつても、そんな事は構からわない。たとい飛び立つほど痛くつても、自分で自分の身体からだを切つて見て、なるほど痛いなと云うところを充分書いて、人に知らせてやりたい。呑気のんきなものや気楽なものはどうてい夢にも想像し得られぬ奥の方にこんな事実がある、人間の本体はここにあるのを知らないかと、世の道楽ものに教えて、おやそうか、おれは、まさか、こんなものとは思つていなかったが、云われて見るとなるほど一言いちごんもない、恐れ入ったと頭を下げさせるのが僕の願なんだ。君とはだいぶ方角が違う」

「しかしそんな文学は何だか心持ちがわるい。——そりや御随意だが、どうだい妙花園みょうかえんに行く気はないかい」

「妙花園へ行くひまがあれば一頁ページでも僕の主張をかくがなあ。

何だか考えると身体がむずむずするようだ。実際こんなに吞氣のんきにして、生焼なまやきのビステッキなどを食っちゃいられないんだ」

「ハハハハまたあせる。いいじゃないか、さつきの商人見たような連中れんじゅうもいるんだから」

「あんなのがいるから、こっちはなお仕事がしたくなる。せめて、あの連中の十分ぶ一の金と時があれば、書いて見せるがな」

「じゃ、どうしても妙花園は不賛成かね」

「遅くなるもの。君は冬服を着ているが、僕はいまだに夏服だから帰りに寒くなつて風でも引くといけない」

「ハハハハ妙な逃げ路を発見したね。もう冬服の時節だあね。着換えればいい事を。君は万事無精ぶしやうだよ」

「無精で着換ええないんじゃない。ないから着換ええないんだ。こ

の夏服だつて、まだ一文も払つていやしない」

「そうなのか」と中野君は氣の毒な顔をした。

ひるめし
午飯の客は皆去り尽して、二人が椅子いすを離れた頃はところどころの卓布たくふの上に麵麩屑パンくずが淋しく散らばっていた。公園の中は最前よりも一層賑にぎやかである。ロハ台は依然として、どこの何某なにがしか知らぬ男と知らぬ女で占領されている。秋の日は赫かつとして夏服の背中を通す。

三

野分

ひのきとびら
檜の扉に銀のような瓦かわらを載せた門を這入はいると、御影みかげの敷石に水を打つて、斜ななめに十歩ばかり歩あゆませる。敷石の尽きた所に擦すり硝子ガラスの開き戸が左右から寂然じやくねんと鎖とじざされて、秋の更ふくるに任す

がごとく邸内は物静かである。

磨き上げた、みが 枳まさの柱むらに象牙ぞうげの臍へそをちよつと押すと、しばらくし

て奥の方から足音が近づいてくる。がちやと鍵かぎをひねる。玄関

の扉は左右に開かれて、下は鏡のようなたきとなる。右の方

に周囲まわり一尺余しやくよの朱泥しゆでいまがいの鉢はちがあつて、鉢のなかには棕櫚竹しゆろちく

が二三本靡なびくべき風も受けずに、ひそやかに控えている。正面

には高さ四尺きんぴようの金屏さんじように、三条の小鍛冶こかじが、異形いぎようのものを相槌あいづちに、

霊夢れいむに叶かなう、御門みかどの太刀たちを丁ちようと打ち、丁と打っている。

取次に出たのは十八九のしとやかな下女である。白井道也しらいどうやと

云いう名刺を受取ったまま、あの若旦那様で？ と聞く。道也先

生は首を傾かたむけてちよつと考えた。若旦那にも大旦那にも中野と

云う人に逢うのは今が始めてである。ことによるとまるで逢え

ないで帰るかも計はかられん。若旦那か大旦那かは逢つて始めてわ

かるのである。あるいは分らないで生涯しょうがいそれぎりになるかも知れない。今まで訪問に出懸でかけて、年寄か、小供か、跛ちんぱか、眼つかちか、要領を得る前に門前から追かえい還された事は何遍もある。追い還されさえしなければ大旦那か若旦那は問うところでない。しかし聞かれた以上はどっちか片づけなければならん。どうでもいい事を、どうでもよくないように決断しろと逼せまらるる事は賢者けんじゃが愚物ぐぶつに対して払う租税である。

「大学を御卒業になつた方ほうの……」とまで云つたが、ことによると、おやじも大学を卒業しているかも知れんと心づいたから「あの文学をおやりになる」と訂正した。下女は何とも云わずに御辞儀おじぎをして立つて行く。白足袋しろたびの裏だけが目立ってよごれに見える。道也先生の頭の上には丸く鉄を鑄い抜ぬいた、かな灯籠どうろうがぶら下がっている。波に千鳥をすかして、すかした所に紙が

張つてある。このなかへ、どうしたら灯ひがつけられるのかと、先生は仰向あおむいて長い鎖くさりを眺ながめながら考えた。

下女がまた出てくる。どうぞこちらへと云う。道也先生は親指の凹くぼんで、前緒まえおのゆるんだ下駄を立派な沓脱くつめぎへ残して、ひよろ長い糸瓜へちまのようなからだを下女の後ろから運んで行く。

応接間は西洋式に出来ている。丸い卓テーブルには、薔薇ばらの花を模様ようざに崩くずした五六輪を、淡い色で織り出したテーブル掛かけを、雑作ぞうさもなく引き被かぶせて、末は同じ色合の絨毯じゅうたんと、続つづくがごとく、切れたるがごとく、波を描えがいて床ゆかの上に落ちてゐる。暖炉だんろは塞ふさいだままの一尺前に、二枚折の小屏風を穴隠しに立ててある。窓掛は緞子どんすの海老茶色えびちやいろだから少々全体の裝飾上調和を破るようだが、そんな事は道也先生の眼には入いらない。先生は生れてからいまだかつてこんな奇麗きれいな室へやへ這入はいった事はないのである。

先生は仰いで壁間の額を見た。京の舞子が友禅の振袖に鼓を調べている。今打って、鼓から、白い指が弾き返されたばかりの姿が、小指の先までよくあらわれている。しかし、そんな事に氣のつく道也先生ではない。先生はただ氣品のない画を掛けたものだと思つたばかりである。向の隅にヌーボー式の書棚があつて、美しい洋書の一部が、窓掛の隙間から洩れて射す光線に、金文字の甲羅を干している。なかなか立派である。しかし道也先生これには毫も辟易しなかつた。

ところへ中野君が出てくる。紬の綿入に縮緬の兵子帯をぐるぐる巻きつけて、金縁の眼鏡越しに、道也先生をまぼしそうに見て、「や、御待たせ申しまして」と椅子へ腰をおろす。

道也先生は、あやしげな、銘仙の上を蔽うに黒木綿の紋付をもつてして、嘉平次平の下へ両手を入れたまま、

「どうも御邪魔をします」と挨拶あいさつをする。泰然たいぜんたるものだ。

中野君は挨拶が済んでからも、依然としてまぼしそうにしていたが、やがて思い切った調子で

「あなたが、白井道也とおっしゃるんで」と大なる好奇心おおいをもつて聞いた。聞かんでも名刺を見ればわかるはずだ。それをかように聞くのは世馴よなれぬ文学士だからである。

「はい」と道也先生は落ちついてゐる。中野君のあては外はずれた。

中野君は名刺を見た時はつと思つて、頭のなかは追い出された中学校の教師だけになつてゐる。可哀想かわいそうだと云う念頭に尾羽おはう

ち枯らした姿を目前に見て、あなたが、あの中学校で生徒からいじめられた白井さんですかと聞き糺ただしたくてならない。いくら気の毒でも白井違いで気の毒がつたのでは役に立たない。気の毒がるためには、聞き糺すためには「あなたが白井道也とおつ

しやるんで」と切り出さなくつてはならなかつた。しかしせつかくの切り出しようにも泰然たる「はい」のために無駄死むだじにをしてしまった。初心しよしんなる文学士は二の句をつぐ元氣も作略さりやくもないのである。人に同情を寄せたいと思うとき、向むこうが泰然の具足で身を固めていては芝居にはならん。器用なものはこの泰然の一角いっかくを針で突き透とおしても思おもひを遂とげる。中野君は好人物ながらそれほど人に取り扱い得るほど世の中を知らない。

「実は今日御邪魔に上がったのは、少々御願があつて参つたのですが」と今度は道也先生の方から打つて出る。御願は同情の好敵手である。御願を持たない人には同情する張り合がない。

「はあ、何でも出来ます事なら」と中野君は快く承知した。

「実は今度江湖雜誌こうこざっしで現代青年の煩悶はんもんに対する解決と云う題で諸先生方の御高説を発表する計画がありまして、それで普通の大

家ばかりでは面白くないと云うので、なるべく新しい方もそれぞれ訪問する訳になりましたので——そこで実はちよつと往つて来てくれと頼まれて来たのですが、御差支がなければ、御話を筆記して参りたいと思います」

道也先生は静かに懐ふところから手帳と鉛筆を取り出した。取り出したものの別に筆記したい様子もなければ強しいて話させたい景色けしきも見えない。彼はかかる愚ぐな問題を、かかる青年の口から解決して貰いたいとは考えていない。

「なるほど」と青年は、耀かがやく眼を挙あげて、道也先生を見たが、先生は宵越よいごしの麦酒ビールのごとく気の抜けた顔をしているので、今度は「さよう」と長く引つ張つて下を向いてしまった。

「どうでしょう、何か御説はありますまいか」と催促を義理なくめにする。ありませんと云つたら、すぐ帰る気かも知れない。

「そうですね。あつたつて、僕のようなものの云う事は雑誌へ載^のせる価値はありませんよ」

「いえ結構です」

「全体どこから、聞いていらしたんです。あまり突然じや纏^{まと}つた話の出来るはずがないですから」

「御名前は社主が折々雑誌の上で拝見するそうで」

「いえ、どうしまして」と中野君は横を向いた。

「何でもよいですから、少し御話し下さい」

「そうですね」と青年は窓の外を見て躊躇^{ちゅうちよ}している。

「せつかく来たものですから」

「じゃ何か話しましょう」

「はあ、どうぞ」と道也先生鉛筆を取り上げた。

「いったい煩悶と云う言葉は近頃だいぶはやるようだが、大抵

は当座のもので、いわゆる三日坊主みっかぼうずのものが多し。そんな種類の煩悶は世の中が始まってから、世の中がなくなるまで続くので、ちつとも問題にはならないでしょう」

「ふん」と道也先生は下を向いたなり、鉛筆を動かしている。紙の上を滑すべらす音が耳立って聞える。

「しかし多くの青年が一度は必ず陥おちいる、また必ず陥るべく自然から要求せられている深刻な煩悶が一つある。……」

鉛筆の音がする。

「それは何だと云うと——恋である……」

道也先生はぴたりと筆記をやめて、妙な顔をして、相手を見た。中野君は、今さら気がついたようにちよつとしよげ返ったが、すぐ気を取り直して、あとをつづけた。

「ただ恋と云うと妙に御聞きになるかも知れない。また近頃は

あまり恋愛呼ばりをするのを人が遠慮するようであるが、この種の煩悶はんもん おおいは大なる事実であつて、事実の前にはいかなるものも頭を下げねばならぬ訳だからどうする事も出来ないのである」

道也先生はまた顔をあげた。しかし彼の長い蒼白あおしろい相貌そうぼうの

一微塵いちみじんだも動いておらんから、彼の心のうちは無論わからない。

「我々が生涯しょうがいを通じて受ける煩悶はんもんのうちで、もつとも痛切なもつ

とも深刻な、またもつとも劇烈な煩悶は恋よりほかにないだろうと思うのです。それですね、こう云う強大な威力のあるものだから、我々が一度ひとたびこの煩悶の炎火えんかのうちに入ると非常な変形をうけるのです」

「変形？　ですか」

「ええ形を変ずるのです。今まではただふわふわ浮いていた。世の中と自分の関係がよくわからないで、のんびんぐらりに

暮らしていたのが、急に自分が明瞭めいりょうになるんです」

「自分が明瞭とは？」

「自分の存在がです。自分が生きているような心持ちが確然と出てくるのです。だから恋は一方から云えば煩悶はんもんに相違さかないが、しかしこの煩悶を経過しないと自分の存在を生涯さいと悟る事が出来ないのです。この淨罪界に足を入れたものでなければ決して天国へは登のぼれまいと思うのです。ただ樂天だつてしようがない。恋の苦くるみを嘗なめて人生の意義を確かめた上の樂天でなくつちや、うそです。それだから恋の煩悶はけつして他の方法によつて解決されない。恋を解決するものは恋よりほかにないです。恋は吾人ごじんをして煩悶せしめて、また吾人をして解脱げだつせしむるのである。……」

「そのくらいなところで」と道也先生は三度目に顔を挙あげた。

「まだ少しあるんですが……」

うけたまわ

「承るのはいいですが、だいぶ多人数の意見を載せるつもりですから、かえつてあとから削除するさくじよと失礼になりますから」

「そうですか、それじゃそのくらいにして置きましょう。何だかこんな話をするのは始めてですから、さぞ筆記しにくかったですでしょう」

「いいえ」と道也先生は手帳を懷ふところへ入れた。

青年は筆記者が自分の説を聴いて、感心の余り少しは賛辞でも呈するかと思つたが、相手は例のごとく泰然としてたたいいえと云つたのみである。

「いやこれは御邪魔をしました」と客は立ちかける。

「まあいいでしょう」と中野君はとめた。せめて自分の説を少々でも批評して行つて貰いたいのである。それでなくても、せん

だつて日比谷で聞いた高柳君の事をちよつと好奇心から、あたつて見たいのである。一言いちごんにして云えば中野君はひまなのである。「いえ、せつかくですが少々急ぎますから」と客はもう椅子いすを離れて、一步テーブルを退しりぞいた。いかにひまな中野君も「それでは」とついに降参して御辞儀おじぎをする。玄関まで送つて出た時思ひ切つて

「あなたは、もしや高柳周作たかなぎしゅうさくと云う男を御存じじゃないですか」と念晴ねんばらしのため聞いて見る。

「高柳？ どうも知らんようです」と沓脱くつぬぎから片足をタタキへおろして、高い背を半分後ろへ振ねじ向けた。

「ことし大学を卒業した……」

「それじゃ知らん訳だ」と両足ともタタキの上へ運んだ。

中野君はまだ何か云おうとした時、敷石をがらがらと車の軌きし

る音がして梶棒^{かじぼう}は硝子^{ガラス}の扉^{とびら}の前にとまつた。道也先生が扉を開く途端^{とたん}に車上の人はひらり厚い雪駄^{せった}を御影^{みかげ}の上に落した。五色の雲がわが眼を掠^{かす}めて過ぎた心持ちで往来へ出る。

時計はもう四時過ぎである。深い碧^{みど}りの上へ薄いセピアを流した空のなかに、はつきりせぬ鳶^{とび}が一羽舞っている。雁^{かり}はまだ渡つて来ぬ。向^{むこう}から袴^{はかま}の股立ちを取った小供が唱歌^{うた}を謡いながら愉快^{ふくろう}そうにあるいて来た。肩に担^{かつ}いだ笹^{ささ}の枝には草の穂で作った梟^{ふくろう}が踊りながらぶら下がって行く。おおかた雑子^{ぞうし}ヶ谷^やへでも行つたのだらう。軒の深い菓物屋^{くだものや}の奥の方に柿ばかりがあかく見える。夕暮に近づく^{やくおうじまえ}と何となくうそ寒い。

薬王寺前^{やくおうじまえ}に来たのは、帽子^{ぼうし}の底の下から往来^{ゆきぎ}の人の顔がしかと見分けのつかぬ頃である。三十三所^{じよほ}と彫^ほつてある石標^{せきひょう}を右に見て、紺屋^{こんや}の横町を半丁ほど西へ這入^{はい}るとわが家の門口^{かどぐち}へ出る、

家のなかいえは暗い。

「おや御帰り」と細君が台所で云う。台所も玄関も大した相違のないほど小さな家である。

「下女はどつかへ行つたのか」と二畳の玄関から、六畳の座敷へ通る。

「ちよつと、柳町まで使に行きました」と細君はまた台所へ引き返す。

道也先生は正面の床とこの片隅に寄せてあつた、洋灯ランプを取つて、椽側えんがわへ出て、手ずから掃除そうじを始めた。何か原稿用紙のようなもので、油壺あぶらつぼを拭きふ、ほやを拭き、最後に心しんの黒い所を好い加減になすくつて、丸めた紙は庭へ棄すてた。庭は暗くなつて様子が頓とんとわからない。

机の前へ坐つた先生は燐寸マッチを擦すつて、しゅつと云う間まに火をラ

ンプに移した。室はたちまち明かになる。道也先生のために云
えばむしろ明かるくならぬ方が増しである。床はあるが、言訳
ばかりで、現に幅も何も懸つておらん。その代り累々と書物や
ら、原稿紙やら、手帳やらが積んである。机は白木の三宝を大
きくしたくらいな単簡なもので、インキ壺と粗末な筆硯のほか
には何物をも載せておらぬ。装飾は道也先生にとつて不必要で
あるのか、または必要でもこれに耽る余裕がないのかは疑問で
ある。ただ道也先生がこの一点の温気なき陋室に、晏如として
筆硯を呵するの勇氣あるは、外部より見て争うべからざる事実
である。ことによると先生は装飾以外のあるものを目的にして、
生活しているのかも知れない。ただこの争うべからざる事実を
確めれば、確かめるほど細君は不愉快である。女は装飾をもつ
て生れ、装飾をもつて死ぬ。多数の女はわが運命を支配する恋

さえも裝飾視して憚^{はば}からぬものだ。恋が裝飾ならば恋の本尊たる愛人は無論裝飾品である。否^{いな}、自己自身すら裝飾品をもつて甘んずるのみならず、裝飾品をもつて自己を^{もく}目してくれぬ人を評して馬鹿と云う。しかし多数の女はしかく人世を^{かん}観ずるにもかかわらず、しかく^{てんめん}観ずるとはけつして思わない。ただ自己の周囲を^{てんめん}纏綿する事物や人間がこの裝飾用の目的に^{かな}叶わぬを^{かん}発見するとき、何となく不愉快を受ける。不愉快を受けると云うのに周囲の事物人間が依然として旧態をあらためぬ時、わが眼に映ずる不愉快を左右前後に反射して、それでも改めぬかと云う。ついにはこれでもか、これでもかと念入りの不愉快を反射する。道也の細君がここまで進歩しているかは疑問である。しかし普通一般の女性であるからには裝飾気なきこの空氣のうちに^{せいそく}生息する結果として、自然この方向に進行するのが順当であらう。

現に進行しつつあるかも知れぬ。

道也先生はやがて懷ふところから例の筆記帳を出して、原稿紙の上へ写し始めた。袴はかまを着けたままである。かしこまったままである。袴を着けたまま、かしこまったまま、中野輝一なかのきいちの恋愛論を筆記している。恋とこの室へや、恋とこの道也とはとうてい調和しない。道也は何と思つて浄書しているかしらん。人は様々である、世も様々である。様々の世に、様々の人が動くのもまた自然の理である。ただ大きく動くものが勝ち、深く動くものが勝たねばならぬ。道也は、あの金縁きんぶちの眼鏡めがねを掛けた恋愛論よりも、小さくかつ浅いと自覚して、かく慎重に筆記を写し直しているのであらうか。床とこの後ろうしで蟬こおろぎが鳴いている。

細君が襖ふすまをすうと開けた。道也は振り向きもしない。「まあ」と云つたなり細君の顔は隠れた。

下女は帰ったようである。煮豆^{にまめ}が切れたから、てつか味噌^{みそ}を買って来たと云っている。豆腐^{とうふ}が五厘高くなつたと云っている。裏の専念寺で夕の御務め^{ゆうべ おつと}をかあんかあんやっている。

細君の顔がまた襖の後ろから出た。

「あなた」

道也先生は、いつの間にやら、筆記帳を閉じて、今度はまた別の紙へ、何か熱心に認^{したた}めている。

「あなた」と妻君は二度呼んだ。

「何だい」

「御飯です」

「そうか、今行くよ」

道也先生はちよつと細君と顔を合せたぎり、すぐ机へ向つた。細君の顔もすぐ消えた。台所の方でくすくす笑う声がする。道

也先生はこの一節をかき終るまでは飯も食いたくないのだろう。
やがて句切りのよい所へ来たと見えて、ちよつと筆を擱おいて、
傍そばへ積んだ草稿をはぐつて見て「二百三十一頁ページ」と独語した。
著述でもしていると見える。

立つて次の間へ這入はいる。小さな長火鉢ながひばちに平鍋ひらなべがかかつて、白
い豆腐が煙りを吐はいて、ぷるぷる顫ふるえている。

「湯豆腐かい」

「はあ、何にもなくて、御氣の毒ですが……」

「何、なんでもいい。食つてさえいれば何でも構かまわない」と、膳ぜん
にして重箱じゅうぎょうをかねたるごとき四角なものの前へ坐つて箸はしを執とる。

「あら、まだ袴はかまを御脱ぎなさらないの、随分ね」と細君は飯を
盛つた茶碗を出す。

「忙いそがしいものだから、つい忘れた」

「求めて、忙がしい思おもをしていらつしやるのだから、……」と云ったぎり、細君は、湯豆腐の鍋なべと鉄瓶てつびんとを懸かけ換かえる。

「そう見えるかい」と道也先生は存外平気である。

「だって、楽で御金の取れる口は断っておしまいなすつて、忙がしくつて、一文にもならない事ばかりなさるんですもの、誰だつて酔興すいきようと思いますわ」

「思われてもしようがない。これがおれの主義なんだから」

「あなたは主義だからそれでいいでしょうさ。しかし私わたくしは……」

「御前は主義が嫌きらいと云うのかね」

「嫌すきも好もないんですけれども、せめて——人並には——なん

ば私だつて……」

「食えさえすればいいじゃないか、贅沢ぜいたくを云いや誰だつて際限はない」

「どうせ、そうでしょう。私なんざどんなになつても御構いなすつちや下さらないのでしょう」

「このてつか味噌は非常に辛いな。どこで買つて来たのだ」

「どこですか」

道也先生は頭をあげて向の壁を見た。鼠色の寒い色の上に大きな細君の影が写っている。その影と妻君とは同じように無意義に道也の眼に映じた。

影の隣りに糸織いとおりかとも思われる、女の晴衣はれぎが衣紋竹えもんだけにつるし

てかけてある。細君のものにしては少し派出はで過ぎるが、これは

多少景気のいい時、田舎いなかで買つてやつたものだと今だに記憶し

ている。あの時分は今とはだいぶ考えも違つていた。己おのれと同

じような思想やら、感情やら持つているものは珍めづらしくあるま

いと信じていた。したがって文筆の力で自分から卒先そっせんして世間

を警醒^{けいせい}しようと言ふ氣にもならなかつた。

今はまるで反対だ。世は名門を謳歌^{おうか}する、世は富豪を謳歌する、世は博士、学士までも謳歌する。しかし公正な人格に逢うて、位地を無にし、金錢を無にし、もしくはその学力、才芸を無にして、人格そのものを尊敬する事を解しておらん。人間の根本義たる人格に批判の標準を置かずして、その上皮^{うわかわ}たる附屬物をもつてすべてを律しようとする。この附屬物と、公正なる人格と戦うとき世間は必ず、この附屬物に雷同^{らいどう}して他の人格を蹂躪^{じゅうりふ}せんと試みる。天下一人の公正なる人格を失うとき、天下一段の光明を失う。公正なる人格は百の華族、百の紳商^{しんしょう}、百の博士をもつてするも償^{つぐな}いがたきほど貴きものである。われはこの人格を維持せんがために生れたるのほか、人世において何らの意義をも認め得ぬ。寒^{かん}に衣^いし、餓^{うえ}に食^{しょく}するはこの人格を維持

するの一番法に過ぎぬ。筆を呵かし硯すずりを磨まするのもまたこの人格を他の面上に貫徹するの方策に過ぎぬ。——これが今の道也の信念である。この信念を抱いだいて世に処する道也は細君の御機嫌ばかり取つてはおれぬ。

壁に掛けてあつた小袖こそでを眺めていた道也はしばらくして、夕飯ゆうめしを済すましながら、

「どこぞへ行つたのかい」と聞く。

「ええ」と細君は二字の返事を与えた。道也は黙つて、茶を飲んでゐる。末枯うらがるる秋の時節だけにすこぶる閑静な問答である。

「そう、べんべんと真田さなだの方を引つ張つとく訳わけにも行きませず、

家主の方もどうかしなければならず、今月の末になると米薪こめまきの払はらいでまた心配しなくつちやありませんから、算段さんだんに出掛でかけたんです」と今度は細君の方から切り出した。

「そうか、質屋へでも行つたのかい」

「質に入れるようなものは、もうありやしませんわ」と細君は恨めし^{うら}そうに夫の顔を見る。

「じゃ、どこへ行つたんだい」

「どこつて、別に行く所ありませんから、御兄^{おにい}さんの所へ行きました」

「兄^{とこ}の所？ 駄目^{だめ}だよ。兄^{とこ}の所なんぞへ行つたつて、何になるものか」

「そう、あなたは、何でも始から、けなしておしまいなさるか、よくないんです。いくら教育が違ふからつて、気性^{きしやう}が合わないからつて、血を分けた兄弟じゃありませんか」

「兄弟は兄弟さ。兄弟でないとは云わん」

「だからさ、膝^{ひざ}とも談合と云うじゃありませんか。こんな時に

は、ちつと相談にいらつしやるがいいじゃありませんか」

「おれは、行かんよ」

「それが瘦やせがまん我慢ですよ。あなたはそれが癖なんですよ。損じや

あ、ありませんか、好んで人に嫌きらわれて……」

道也先生は空然くうぜんとして壁に動く細君の影を見ている。

「それで才覚が出来たのかい」

「あなたは何でも一足飛いっそくとびね」

「なにが」

「だって、才覚が出来る前にはそれぞれ魂胆こんたんもあれば工面くめんもあ

るじゃありませんか」

「そうか、それじゃ最初から聞き直そう。で、御前が兄のうち

へ行つたんだね。おれに内所ないしょで」

「内所だって、あなたのためじゃありませんか」

「いいよ、ためでいいよ。それから」

「で御兄さんおあにいに、御目に懸かつていろいろ今までの御無沙汰ごぶさたの御詫おわび

やら、何やらして、それから一部始終いちぶしじゆうの御話をしたんです」

「それから」

「すると御兄さんおあにいが、そりや御前には大變氣の毒だつて大變私わたくしに同情して下さつて……」

「御前に同情した。ふうん。——ちよつとその炭取を取れ。炭をつがないと火種ひだねが切れる」

「で、そりや早く整理しなくつちや駄目だ。全体なぜ今まで抛ほうつて置いたんだつておつしやるんです」

「旨うまい事を云わあ」

「まだ、あなたは御兄さんおあにいを疑つていらつしやるのね。罰がありますよ」

「それで、金でも貸したのかい」

「ほらまた一足飛いっそくとびをなさる」

道也先生は少々おかしくなったと見えて、にやりと下を向きながら、黒く積んだ炭を吹き出した。

「まあどのくらいあれば、これまでの穴が奇麗きれいに埋うまるのかと御聞きになるから、——よつぽど言い悪にくかつたんですけれども——とうとう思い切つてね……」でちよつと留めた。道也はしきりに吹いている。

「ねえ、あなた。とうとう思い切つてね——あなた。聞いていらつしやらないの」

「聞いてるよ」と赫かつき気で赤くなつた顔をあげた。

「思い切つて百円ばかりと云つたの」

「そうか。兄は驚ろいたろう」

「そうしたらね。ふうんて考えて、百円と云う金は、なかなか容易に都合がつく訳のものじゃない……」

「兄の云いそうな事だ」

「まあ聞いていらつしやい。まだ、あとが有るんです。——しかし、ほかの事とは違うから、是非なければ困ると云うならおれが保証人になって、人から借りてやつてもいいって仰しやるんです」

「あやしいものだ」

「まあさ、しまいまで御聞きなさい。——それで、ともかくも本人に逢つて篤とくと了簡りようけんを聞いた上にしようと言うところまでに漕こぎつけて来たのです」

細君は大功名をしたように頬骨ほおぼねの高い顔を持ち上げて、夫おつとを覗のぞき込んだ。細君の眼つきが云う。夫は意気地いっきじなしである。終

日終夜、机と首つ引をして、兀々と出精しながら、妻と自分を安らかに養うほどの働きもない。

「そうか」と道也は云ったぎり、この手腕に対して、別段に感謝の意を表しようともせぬ。

「そうかじや困りますわ。私がここまで拵えたのだから、あとは、あなたが、どうとも為さらくつちやあ。あなたの楯のとりにようでせつかくの私の苦心も何の役にも立たなくなりますわ」「いいさ、そう心配するな。もう一カ月もすれば百や貳百の金は手に這入る見込があるから」と道也先生は何の苦もなく云つて退けた。

江湖雑誌の編輯で二十円、英和字典の編纂で十五円、これが道也のきまつた収入である。但しこのほかに仕事はいくらでもする。新聞にかく、雑誌にかく。かく事においては毎日毎夜筆

を休ませた事はないくらいである。しかし金にはならない。たまさか二円、三円の報酬が彼の懐ふところに落つる時、彼はかえつて不思議に思うのみである。

この物質的に何らの機能もない述作的労力の裡うちには彼の生命がある。彼の気魄きはくが滴々てきてきの墨汁ぼくじゅうと化して、一字一画に満腔まんこうの精神が飛動している。この断篇が読者の眼に映じた時、瞳裏とうりに一道の電流を呼び起して、全身の骨肉が刹那せつなに震えふるえかしと念じて、道也は筆を執とる。吾輩は道を載のす。道を遮さへぎるものは神といえども許さずと誓つて紙に向う。誠は指頭しとうより迸ほとばしつて、尖る毛穎もうえいの端たんに紙を焼く熱気あるがごとき心地にて句を綴つづる。白紙が人格と化して、淋漓りんりとして飛騰ひとうする文章があるとすれば道也の文章はまさにこれである。されども世は華族、紳商、博士、学士の世である。附属物が本体を踏み潰つぶす世である。道也の文章は

出るたびに黙殺せられている。妻君は金にならぬ文章を道楽文章と云う。道楽文章を作るものを意気地なしと云う。

道也の言葉を聞いた妻君は、火箸ひばしを灰のなかに刺したまま、
「今でも、そんな御金が這入はいる見込があるんですか」と不思議
そうに尋ねた。

「今は昔より下落したと云うのかい。ハハハハハ」と道也先生
は大きな声を出して笑った。妻君は毒氣どっきを抜かれて口をあける。
「どうりや一勉強ひとべんきょうやろうか」と道也は立ち上がる。その夜彼は
彼の著述人格論を二百五十頁までかいた。寝たのは二時過であ
る。

「どこへ行く」と中野君が高柳君をつらまえた。所は動物園の前である。太い桜の幹が黒ずんだ色のなかから、銀のような光りを秋の日に射返して、梢を離れる病葉は風なき折々行人の肩にかかる。足元には、ここかしこに枝を辞したる古い奴ががさついている。

色は様々である。鮮血を日に曝して、七日の間日ごとにその変化を葉裏に印して、注意なく一枚のなかに畳み込めたら、こんな色になるだろうと高柳君はさつきから眺めていた。血を連想した時高柳君は腋の下から何か冷たいものが襯衣に伝わるような気分がした。ごほんと取り締りのない咳を一つする。

形も様々である。火にあぶったかき餅の状は千差万別であるが、我も我もとみんな反り返る。桜の落葉もがさがさに反り返つて、反り返ったまま吹く風に誘われて行く。水気のないものに

は未練も執着もない。ひようひよう飄々としてわが行末を覚束ない風に任せ
て平気なのは、死んだ後の祭りに、から騒ぎにはしやぐ了簡りようけんか
も知れぬ。風にめぐる落葉と攫さらわれて行くかな屑くずとは一種の
氣狂きちがいである。ただ死したるものの氣狂である。高柳君は死と氣
狂とを自然界に点綴てんてつした時、瘠やせた両肩を聳そびやかして、またご
ほんと云ううつろな咳せきを一つした。

高柳君はこの瞬間に中野君からつらまえられたのである。ふ
と氣がついて見ると世は太平である。空は朗らかである。美し
い着物をきた人が続々行く。相手は薄羅紗うすらしやの外套がいとうに恰好かつこうのいい
姿を包んで、顚あこの下に真珠の留針とめばりを輝かしている。——高柳君
は相手の姿を見守ったなり黙っていた。

「どこへ行く」と青年は再び問うた。

「今図書館へ行つた帰りだ」と相手はようやく答えた。

「また地理学教授法じゃないか。ハハハハ。何だか不景気な顔をしているね。どうかしたかい」

「近頃は喜劇の面をどこかへ遺失してしまつた」

「また新橋の先まで探がしに行つて、拳突を喰つたんじやないか。つまらない」

「新橋どころか、世界中探がしてあるいても落ちていそうもない。もう、御やめだ」

「何を」

「何でも御やめだ」

「万事御やめか。当分御やめがよかろう。万事御やめにして僕といつしよに來たまえ」

「どこへ」

「今日はそこに慈善音楽会があるんで、切符を二枚買わされた

んだが、ほかに誰も行き手が^いないから、ちようどいい。君行き
たまえ」

「いら^なない切符などを^て買うのかい。もつた^ないない事をするんだ
な」

「なに義理だから仕方がない。おやじが買ったんだが、おやじ
は西洋音楽なんかわからないからね」

「それじゃ余った方を送つてやればいいのに」

「実は君の所へ送ろうと思つたんだが……」

「いいえ。あすこへさ」

「あすことは。——うん。あすこか。何、ありや、いいんだ。自
分でも買ったんだ」

高柳君は何とも返事をしないで、相手を真正面から見ている。
中野君は少々恐縮の微笑を洩^もらして、右の手に握つたままの、

山羊やぎの手袋で外套がいとうの胸をぴしやぴしや敲たたき始めた。

「穿はめもしない手袋を握にぎつてあるいてるのは何のためだい」

「なに、今ちよつと隠袋ポケットから出したんだ」と云いながら中野君は、すぐ手袋をかくしの裏うちに収めた。高柳君の癩癧かんしやくはこれで少々治さまったようである。

ところへ後ろからエーイと云う掛声ひづめがして蹄ひづめの音が風を動かしてくる。兩人ふたりは足早みちばたに道傍へ立ち退のいた。黒塗くろぬりのランドーの蓋おおいを、秋の日の暖かきに、払い退けた、中には絹帽シルクハットが一つ、美しい紅くれないいの日傘ひがさが一つ見えながら、兩人の前を通り過ぎる。

「ああ云う連中が行くのかい」と高柳君が頤あごで馬車の後ろ影を指さす。

「あれは徳川侯爵だよ」と中野君は教えた。

「よく、知つてゐるね。君はあの人の家来かい」

「家来じゃない」と中野君は真面目に弁解した。高柳君は腹のなかでまたちよつと愉快を覚えた。

「どうだい行こうじゃないか。時間がおくれるよ」

「おくれると逢えないと云うのかね」

中野君は、すこし赤くなつた。怒つたのか、弱点をつかれたためか、恥ずかしかつたのか、わかるのは高柳君だけである。

「とにかく行こう。君はなんでも人の集まる所やなにかを嫌つてばかりいるから、一人坊つちになつてしまふんだよ」

打つものは打たれる。参るのは今度こそ高柳君の番である。一人坊つちと云う言葉を聞いた彼は、耳がしいんと鳴つて、非常に淋しい氣持がした。

「いやかい。いやなら仕方がない。僕は失敬する」

相手は同情の笑を湛えながら半歩踵をめぐらしかけた。高柳

君はまた打たれた。

「いこう」と単簡たんかんに降参する。彼が音楽会へ臨むのは生れてから、これが始めてである。

玄関にかかった時は受付が右へ左りへの案内で忙殺ぼうさつされて、接待掛りの胸につけた、青いリボンを見失うほど込み合っていた。突き当りを右へ折れるのが上等で、左りへ曲がるのが並等である。下等はないそうだ。中野君は無論上等である。高柳君を顧みながら、こつちだよと、さも物馴ものなれたさまに云う。今日に限って、特別に下等席を設けて貰って、そこへ自分だけ這入はいって聴きいて見たいと一人坊っちの青年は、中野君のあとをつきながら階段を上ぼりつつ考えた。己おのれの右を上のぼる人も、左りを上る人も、またあとからぞろぞろついて来るものも、皆異種類の動物で、わざと自分を包囲して、のっぴきさせず二階の大広間へ

押し上げた上、あとから、慰み半分に手を拍うつて笑う策略さくりやくのよう
に思われた。後ろを振り向くと、下から緑みどりの滴したたる束髪そくはつの
脳のうてん巔が見える。コスメチックで奇麗きれいな一直線を七分三分の割合
に鍊ねり出した頭蓋骨ずがいこつが見える。これらの頭が十も二十も重なり
合つて、もう高柳周作は一步でも退く事はならぬとせり上がつ
てくる。

楽堂の入口を這はい入ると、霞かすみに酔うた人のようにぼうつとした。
空を隠す茂みのなかを通り抜けて頂いただきに攀よじ登った時、思いも寄ら
ぬ、眼の下に百里の眺めながが展開する時の感じはこれである。演
奏台は遙はるかの谷底にある。近づくためには、登り詰めた頂から、
規則正しく排列された人間の間を一直線に縫うがごとくに下り
て、自然と逼せまる播鉢すりばちの底に近寄らねばならぬ。播鉢すりばちの底は半円
形を劃して空に向つて広がる内側面には人間の堀へいが段々に横輪

をえがいている。七八段を下りた高柳君は念のために振り返つて播鉢の側面を天井まで見上げた時、目がちらちらしてちよつと留つた。excuse me と云つて、大きな異人が、高柳君を蔽おほいかぶせるようにして、一段下へ通り抜けた。駝鳥だちょうの白い毛が鼻の先にふらついて、品のいい香りがぶんとする。あとから、脳巔のうてんの禿はげた大男が絹帽シルクハットを大事そうに抱えて身を横にして女につきながら、二人を擦すり抜ける。

「おい、あすこに椅子が二つ空あいている」と物馴ものなれた中野君は階段を横へ切れる。並んでいる人は席を立て二人を通す。自分だけであつたら、誰も席を立てくれるものはあるまいと高柳君は思つた。

「大変な人だね」と椅子に腰をおろしながら中野君は満場を見廻みまわす。やがて相手の服装に気がついた時、急に小声になつて、

「おい、帽子をとらなくっちゃ、いけないよ」と云う。

高柳君は卒然として帽子を取つて、左右をちよつと見た。三四人の眼が自分の頭の上に注がれていたのを発見した時、やつぱり包囲攻撃だなと思つた。なるほど帽子を被つていたものはこの広い演奏場に自分一人である。

「外套は着てもいいのか」と中野君に聞いて見る。

「外套は構わないんだ。しかしあつ過ぎるから脱ごうか」と中野君はちよつと立ち上がつて、外套の襟を三寸ばかり颯と返したら、左の袖がするりと抜けた、右の袖を抜くとき、領のあたりをつまんだと思つたら、裏を表てに、外套ははや畳まれて、椅子の背中を早くも隠した。下は仕立ておろしのフロックに、近頃流行る白いスリッパが胴衣の胸開を沿うて細い筋を奇麗にあらわしている。高柳君はなるほどいい手際だと羨ましく眺めてい

た。中野君はどう云ものか容易に坐らない。片手を椅子の背に凭たせて、立ちながら後ろから、左右へかけて眺めている。多くの人の視線は彼の上に落ちた。中野君は平気である。高柳君はこの平気をまた羨ましく感じた。

しばらくすると、中野君は千以上陳列せられたる顔のなかで、ようやくあるものを物色し得たごとく、豊かなる双頬に愛嬌の渦を浮かして、軽く何人にか会釈した。高柳君は振り向かざるを得ない。友の挨拶はどの辺に落ちたのだらうと、こそばゆくも首を振じ向けて、斜めに三段ばかり上を見ると、たちまち目につかった。黒い髪のだだ中に黄の勝った大きなリボンの蝶を颯とひらめかして、細くうねる頸筋を今真直に立て直す女の姿が目につかった。紅いは眼の縁を薄く染めて、潤った眼睫の奥から、人の世を夢の底に吸い込むような光りを中野君の方に注いでい

る。高柳君はすわやと思つた。

わが穿く袴は小倉である。羽織は染めが剥げて、濁つた色の上に垢が容赦なく日光を反射する。湯には五日前に這入つたぎりだ。襯衣を洗わざる事は久しい。音楽会と自分とはとうてい両立するものでない。わが友と自分とは？——やはり両立しない。友のハイカラ姿とこの魔力ある眼の所有者とは、千里を隔てても無線の電気がかかるべく作られている。この一堂の裡に綺羅の香りを嗅ぎ、和楽の温かみを吸うて、落ち合うからは、二人の魂は無論の事、溶けて流れて、かき鳴らす箏の線の細きうちにも、めぐり合わねばならぬ。演奏会は数千の人を集めて、数千の人はことごとく双手を挙げながらこの二人を歓迎している。同じ数千の人はことごとく五指を弾いて、われ一人を排斥している。高柳君はこんな所へ来なければよかつたと思つた。

友はそんな事を知りようがない。

「もう時間だ、始まるよ」と活版に刷った曲目を見ながら云う。
「そうか」と高柳君は器械的に眼を活版の上に落した。

一、バイオリン、セロ、ピアノ合奏とある。高柳君はセロの何物たるを知らぬ。二、ソナタ……ベートーベン作とある。名前だけは心得ている。三、アダジヨ……パアージュアル作とある。これも知らぬ。四、と読みかけた時拍手の音が急に梁を動かし起つた。演奏者はすでに台上に現われている。

やがて三部合奏曲は始まった。満場は化石したかのごとく静かである。右手の窓の外に、高い樅の木が半分見えて後ろは秋の空の国に入る。左手の碧りの窓掛けを洩れて、澄み切った秋の日が斜めに白い壁を明らかに照らす。

曲は静かなる自然と、静かなる人間のうちに、快よく進行す

る。中野は絢爛たる空氣の振動を鼓膜に聞いた。声にも色があると嬉しく感じている。高柳は樅の枝を離るる鳶の舞う様を眺めている。鳶が音楽に調子を合せて飛んでいる妙だなと思つた。拍手がまた盛に起る。高柳君ははつと気がついた。自分はやはり異種類の動物のなかに一人坊つちでおつたのである。隣りを見ると中野君は一生懸命に敲いている。高い高い鳶の空から、己れをこの窮屈な谷底に呼び返したものの一人は、われを無理矢理にここへ連れ込んだ友達である。

演奏は第二に移る。千余人の呼吸は一度にやむ。高柳君の心はまた豊かになつた。窓の外を見ると鳶はもう舞つておらぬ。眼を移して天井を見る。周圍一尺もあらうと思われる梁の六角形に削られたのが三本ほど、樂堂を豎に貫ぬいている、後ろはどこまで通つているか、頭を回らさないから分らぬ。所々に模

様に崩くずした草花が、長い蔓つると共に六角を絡からんでいる。仰向あおむいて見ていると広い御寺のなかへでも這入はいった心持になる。そうして黄色い声や青い声が、梁を纏まとう唐草からくさのように、纏れ合もつつて、天井から降ふってくる。高柳君は無む人にんの境きように一人坊たたずつちで佇たたずんでいる。

三度目の拍手が、断わりもなくまた起る。隣りの友達は一
倍ばいけたたましい敲たたき方をする。無人の境におった一人坊たたずつちが
急に、霰あられのごとき拍手のなかに包囲はいされた一人坊たたずつちとなる。
包囲まぎわはなかなか已やまぬ。演奏者が鬨たっを排はいしてわが室しつに入らんと
する間際まぎわになおなお烈はげしくなった。ヴァイオリンを温ぬかに右の
腋えき下かに護まもりたる演奏者は、ぐるりと戸側とぎわに体たいを回めぐらして、薄紅葉うすもみじ
を点じたる裾模すそもよう様を台上に動うごかして来る。狂うばかりに咲き乱
れたる白菊の花束を、飄ひるがえる袖そでの影に受けとって、なよやかなる

上軀^{じょうく}を聴衆の前に、少しかがめたる時、高柳は感じた。――

この女の楽を聴^きいたのは、聴かされたのではない。聴かきぬと云うを、ひそかに忍び寄りて、偷^{ぬす}み聴いたのである。

演奏は喝采^{かつさい}のどよめきの静まらぬうちにまた始まる。聴衆は

とつさの際にことごとく死んでしまう。高柳君はまた自由になつ

た。何だか広い原にただ一人立つて、遥^{はる}かの向うから熟柿^{じゅくし}のよ

うな色の暖かい太陽が、のつと上^{のぼ}つてくる心持ちがする。小供

のうちはこんな感じがよくあつた。今はなぜこう窮屈^{きうくつ}になつた

ろう。右を見ても左を見ても人は我を擯^{ひん}斥^{せき}しているように見え

る。たった一人の友達さえ肝心^{かんじん}のところが無残^{むざん}の手をぱちぱち

敲^{たた}く。たよる所がなければ親の所へ逃げ帰れと云う話もある。

その親があれば始からこんなにはならなかつたらう。七つの時
おやじは、どこかへ行つたなり帰つて来ない。友達はそれから

自分と遊ばなくなつた。母に聞くと、おとつさんは今に帰る今に帰ると云つた。母は帰らぬ父を、帰ると云つてだましたのである。その母は今でもいる。住み古^{ふる}した家を引き払つて、生れた町から三里の山奥に一人佗^わびしく暮らしている。卒業をすれば立派になつて、東京へでも引き取るのが子の義務である。逃げて帰れば親子共餓^うえて死ななければならん。——たちまち拍手の声が一面に湧^わき返る。

「今のは面白かつた。今までのうち一番よく出来た。非常に感じをよく出す人だ。——どうだい君」と中野君が聞く。

「うん」

「君面白くないか」

「そうさな」

「そうさなじや困つたな。——おいあすこの西洋人の隣りにい

る、細かい友禪ゆうぜんの着物こまを着ている女があるだろう。――あんな模様が近頃流行はやるんだ。派出はでだろう」

「そうかなあ」

「君はカラー・センスのない男だね。ああ云う派出な着物は、集会の時や何かにはごくいいのだね。遠くから見て、見醒めみざがしない。うつくしくつていい」

「君のあれも、同じようなのを着ているね」

「え、そうかしら、何、ありや、いい加減かげんに着ているんだろう」

「いい加減に着ていれば弁解になるのかい」

中野君はちよつと会話をやめた。左の方に鼻眼鏡はなめがねをかけて揉上もみあげを容赦ようしやなく、耳の上で剃り落した男が帳面を出してしきりに何か書いている。

「ありや、音楽の批評でもする男かな」と今度は高柳君が聞い

た。

「どれ、——あの男か、あの黒服を着た。なあに、あれはね。画工えかきだよ。いつでも来る男だがね、来るたんびに写生帖を持って来て、人の顔を写している」

「断わりなしにか」

「まあ、そうだろう」

「泥棒だね。顔泥棒だ」

中野君は小さい声でくくと笑った。休憩時間は十分ぶんである。

廊下へ出るもの、喫煙に行くもの、用を足たして帰るもの、が高

柳君の眼に写る。女は小供の時見た、豊国とよくにの田舎源氏いなかげんじを一枚一

枚はぐって行く時の心持である。男は芳年よしとしの書いた討ち入り当

夜の義士が動いてるようだ。ただ自分が彼らの眼にどう写るであらうかと思うと、早く帰りたくなる。自分の左右前後は活動

している。うつくしく活動している。しかし衣食のために活動しているのではない。娯楽のために活動している。胡蝶こちょうの花に戯たわむるがごとく、浮藻うきもの漣さざなみに靡なびくがごとく、実用以上の活動を示している。この堂に入るものは実用以上に余裕のある人でなくてはならぬ。

自分の活動は食うか食わぬかの活動である。和煦わくの作用ではない肅殺しゅくさつの運行である。儼げんたる天命に制せられて、無条件に生を享うけたる罪業ざいごうを償つぐなわんがために働らくのである。頭から云えば胡蝶のごとく、かく翩へん々たる公衆のいずれを捕とらえ来きたつて比較されても、少しも恥はづかしいとは思わぬ。云いたき事、云うて人が点頭うなずく事、云うて人が尊たつとぶ事はないから云わぬのではない。生活の競争にすべての時間を捧ささげて、云うべき機会を与えてくれぬからである。吾われが云いたくて云われぬ事は、世が聞きたく

でも聞かれぬ事は、天がわが手を縛^{ばく}するからである。人がわが口を箝^{かん}するからである。巨万の富をわれに与えて、一錢も使うなかれと命ぜられたる時は富なき昔^{むか}しの心安きに帰る能^{あた}わずして、命^{めい}を下せる人を逆^{さか}しまに誼^{のろ}わんとす。われは呪^{のろ}い死にに死なねばならぬか。——たちまち咽喉^{のど}が塞^{ふさ}がつて、ごほんごほん^と咳^せき入る。袂^{たもと}からハンケチを出して痰^{たん}を取る。買った時の白いのが、妙な茶色^{きんぐさ}に変^かっている。顔を挙^あげると、肩^{かん}から観^{かん}世^ぜよりのように細^{きんぐさ}い金鎖^{きんぐさ}りを懸^かけて、朱に黄^{まじ}を交^{まじ}えた厚板^{あひざつ}の帯^{おび}の間に時計を隠した女が、列のはずれに立つて、中野君に挨拶^{あいさつ}している。

「よう、いらつしやいました」と可愛^{ふたえまふた}らしい二重^{ふたえまふた}瞼^{まぶた}を細^こめに云う。

「いや、だいぶ盛会^{せいけい}ですね。冬田^{ふゆだ}さんは非常^{ひじょう}な出来^{でき}でしたな」と

中野君は半身を、女の方へ向けながら云う。

「ええ、大喜びで……」と云い捨てて下りて行く。

「あの女を知ってるかい」

「知るものかね」と高柳君は拳突けんつくを喰くわす。

相手は驚おどろろいて黙もくつてしまった。途端とたんに休憩後の演奏は始ま

る。「四葉よつばの苜蓿花うまごやし」とか云うものである。曲の続く間は高柳君

はうつらうつらと聴きいている。ぱちぱちと手が鳴ると熱病の人

が夢から醒さめたように我に帰る。この過程を二三度繰り返して、

最後の幻覚から喚よび醒よまされた時は、タンホイゼルのマーチで

銅鑼どらを敲たたき大喇叭おおらつぱを吹くところであつた。

やがて、千余人の影は一度に動き出した。二人の青年は揉もま

れながらに門を出た。

日はようやく暮れかかる。図書館の横手に聳そびえる松の林が緑

りの色を微かに残して、しだいに黒い影に變つて行く。

「寒くなつたね」

高柳君の答は力の抜けた咳せき二つであつた。

「君さつきから、咳をするね。妙な咳だぜ。医者にでも見て貰つたら、どうだい」

「何、大丈夫だ」と云いながら高柳君は尖とがつた肩を二三度ゆすぶつた。松林を横切つて、博物館の前に出る。大きな銀杏いちょうに墨汁ぼくじゅうを点てんじたような滴てきてき々の烏からすが乱れている。暮れて行く空に輝くは無数の落葉である。今は風さえ出た。

「君二三日前に白井道也しらいどうやと云う人が来たぜ」

「道也先生？」

「だろうと思うのさ。余り沢山ある名じゃないから」

「聞いて見たかい」

「聞こうと思つたが、何だかきまりが悪うかつたからやめた」

「なぜ」

「だって、あなたは中学校で生徒から追い出された事はありませんかとも聞けまいじゃないか」

「追い出されましたかと聞かなくつてもいいさ」

「しかし容易に聞きにくい男だよ。ありや、困る人だ。用事よりほかに云わない人だ」

「そんなになつたかも知れない。元来何の用で君の所へなんぞ来たのだい」

「なあに、江湖雑誌こうこざしの記者だつて、僕の所へ談話の筆記に来たのさ」

「君の談話をかい。——世の中も妙な事になるものだ。やつぱり金が勝つんだね」

「なぜ」

「なぜって。——可哀想に、そんなに零落したかなあ。——君

道也先生、どんな、服装なりをしていた」

「そうさ、あんまり立派じゃないね」

「立派でなくつても、まあどのくらいな服装をしていた」

「そうさ。どのくらいとも云い悪いが、そうさ、まあ君ぐらい

なところだろう」

「え、このくらいか、この羽織ぐらいなところか」

「羽織はもう少し色が好いいよ」

「袴はかまは」

「袴もめんは木綿じゃないが、その代りもつと皺しわ苦茶だ」

「要するに僕と伯仲はくちゅうの間か」

「要するに君と伯仲の間だ」

「そうかなあ。——君、背せいの高い、ひよろ長い人だぜ」

「背の高い、顔の細長い人だ」

「じゃ道也先生に違ない。——世の中は随分無慈悲むじひなものだなあ。——君番地を知ってるだろう」

「番地は聞かなかった」

「聞かなかった？」

「うん。しかし江湖雜誌こうこざっしで聞けばすぐわかるさ。何でもほかの雑誌や新聞にも関係しているかも知れないよ。どこかで白井道也と云う名を見たようだ」

音楽会の帰りの馬車や車は最前さいぜんから絡繹らくえきとして二人を後ろから追い越して夕暮を吾家わがやへ急ぐ。勇ましく馳かけて来た二挺ちようの人力じんりきがまた追い越すのかと思つたら、大仏を横に見て、西洋軒のなかに掛声ながら引き込んだ。黄昏たそがれの白き靄もやのなかに、逼せまり来る

暮色を弾き返すほどの目覚しき衣は由ある女に相違ない。中野君はぴたりと留まった。

「僕はこれで失敬する。少し待ち合せている人があるから」

「西洋軒で会食すると云う約束か」

「うんまあ、そうさ。じゃ失敬」と中野君は向へ歩き出す。高

柳君は往來の真中へたつた一人残された。

淋しい世の中を池の端へ下る。その時一人坊つちの周作はこ

う思つた。「恋をする時間があれば、この自分の苦痛をかいて、

一篇の創作を天下に伝える事が出来るだろうに」

見上げたら西洋軒の二階に奇麗な花瓦斯がついていた。

ミルクホールに這入る。上下を擦り硝子にして中一枚を透き通しにした腰障子に近く据えた一脚の椅子に腰をおろす。焼麴麴を嚙つて、牛乳を飲む。懷中には二十円五十銭ある。ただ今地理学教授法の原稿を四十一頁渡して金に換えて来たばかりである。一頁五十銭の割合になる。一頁五十銭を超ゆべからず、一カ月五十頁を超ゆべからずと申し渡されてある。

これで今月はどうか、どうか食える。ほかからくれる十円近くの金は故里の母に送らなければならない。故里はもう落鮎の時節である。ことによると崩れかかった藁屋根に初霜が降ったかも知れない。鶏が菊の根方を暴らしている事だろう。母は丈夫かしら。

向うの机を占領している学生が二人、西洋菓子を食べながら、団子坂の菊人形の収入について大に論じている。左に蜜柑

をむきながら、その汁しるを牛乳の中へたらしめている書生がある。
ひとふさしほ
一房絞しぼつては、文芸倶楽部の芸者の写真を一枚はぐり、一房絞しぼつては一枚はぐる。芸者の絵が尽きた時、彼はコップの中を匙さじで攪かき廻して妙な顔をしている。酸さんで牛乳が固まったので驚ろいているのだらう。

高柳君はそこに重ねてある新聞の下から雑誌を引きずり出して、あれこれと見る。目的の江湖雜誌こうこざつしは朝日新聞の下に折れていた。折れてはいるがまだ新らしい。四五日前に出たばかりのである。折れた所は六号活字で何だか色鉛筆の赤い圈点けんてんが一面についている。僕の恋愛観と云う表題の下に中野春台なかのしゅんたいとある。春台は無論輝一きいちの号である。高柳君は食い欠いた焼麵やきパンを皿の上へ置いたなり「僕の恋愛観」を見ていたがやがて、にやりと笑った。恋愛観の結末に同じく色鉛筆で色情狂!!! と書いてあ

る。高柳君は頁をはぐつた。六号活字はだいぶ長い。もつともいろいろの人の名前が出ている。一番始めには現代青年の煩悶はんもんに対する諸家の解決とある。高柳君は急に読んで見る気になつた。——第一は静心せいしんの工夫くふうを積みめと云う注意だ。積みめとはどう積みむのかちつともわからない。第二は運動をして冷水摩擦れいすいまさつをやれと云う。簡単なものである。第三は読書もせず、世間も知らぬ青年が煩悶はんもんする法がないと論じている。無いと云つても有れば仕方がない。第四は休暇ごとに必ず旅行せよと勧告している。しかし旅費の出処は明記してない。——高柳君はあとを読むのが厭いやになつた。颯さつと引つくりかえして、第一頁をあける。「解脱げだつと拘泥こうでい……憂世子ゆうせいし」と云うのがある。標題が面白いのでちよつと目を通す。

「身体からだの局部がどこぞ悪いと気にかかる。何をしていても、そ

れがコ、ダ、ワ、つて来る。ところが非常に健康な人は行住坐臥ぎょうじゆうざがともにわが身体かんしよの存在を忘れてゐる。一点の局部ゆただにわが注意を集注すべき患所がないから、かく安々と胖ふたかなのである。瘠やせて蒼あおい顔をしている人に、君は胃が悪いだろうと尋ねて見た事がある。するとその男が答えて、胃は少しも故障がない、その証拠には僕はこの年になるが、いまだに胃がどこにあるか知らないと云うた。その時は笑つて済んだが、後あとで考えて見ると大に悟さとつた言葉である。この人は全く胃が健康だから胃に拘泥こうでいする必要がない、必要がないから胃がどこにあつても構わないのに見える。自在飲じざいいん、自在食じざいしょく、いっこう平氣である。この男は胃において悟さとを開いたものである。……」

高柳君はこれは少し妙だよと口のなかで云つた。胃の悟りは妙だと云つた。

「胃について道い得べき事は、惣身そうしんについても道い得べき事である。惣身について道い得べき事は、精神についても道い得べき事である。ただ精神生活においては得失の両面において等しく拘泥こうでいを免まぬかれぬところが、身体からだより煩わづらいになる。

「一能いちのうの士しは一能に拘泥こうでいし、一芸いちげいの人は一芸に拘泥おのして己れを苦しめている。芸能は氣の持ちようではすぐ忘れる事も出来る。わが欠点に至つては容易に解脱げだつは出来ぬ。

「百円や二百円もする帯をしめて女が音楽会へ行くとこの帯が妙に氣になつて音楽が耳に入らぬ事がある。これは帯に拘泥こうでいするからである。しかしこれは自慢の例じゃ。得意の方は前云う通り祟たたりを避け易やすい。しかし不面目ふめんぼくの側はなかなか強情たに祟たたる。昔しさる所で一人の客に紹介された時、御互に椅子の上で礼をして双方共頭かしらを下げた。下げながら、向うの足を見るとその男

の靴足袋くつたびの片々かたかたが破れて親指の爪が出ている。こちらが頭を下
げると同時に彼は満足な足をあげて、破れ足袋やたびの上に加えた。
この人は足袋の穴に拘泥していたのである。……」
おれも拘泥している。おれのからだは穴だらけだと高柳君は
思いながら先へ進む。

「拘泥は苦痛である。避けなければならぬ。苦痛そのものは避け
がたい世であろう。しかし拘泥の苦痛は一日で済む苦痛を五日いっか、
七日なぬかに延長する苦痛である。いらざる苦痛である。避けなけれ
ばならぬ。

「自己が拘泥するのは他人が自己に注意を集注すると思うから
で、つまりは他人が拘泥するからである。……」

高柳君は音楽会の事を思いだした。

「したがって拘泥を解脱するには二つの方法がある。他人がい

くら拘泥しても自分は拘泥せぬのが一つの解脱法である。人が目を峙そばだてても、耳を聳そびやかしても、冷評しても罵詈ののりしても自分だけは拘泥せずにさつさと事を運んで行く。大久保彦左衛門はたらいたらいとじとじようようで登城した事がある。……」

高柳君は彦左衛門が羨ましくなつた。

「立派な衣装を馬士まごに着せると馬士はすぐ拘泥してしまう。華族や大名はこの点において解脱の方を得ている。華族や大名に馬士の腹掛はらがけをかけさすと、すぐ拘泥してしまう。釈迦しやかや孔子こうしはこの点において解脱を心得ている。物質界に重おもきを置かぬものは物質界に拘泥する必要がないからである。……」

高柳君は冷めさかかった牛乳をぐつと飲んで、ううと云つた。

「第二の解脱法は常人じやうじんの解脱法である。常人の解脱法は拘泥を免まぬかるるのではない、拘泥せねばならぬような苦しい地位に身

を置くのを避けるのである。人の視聴を惹くの結果、われより苦痛が反射せぬようにと始めから用心するのである。したがって始めより流俗に媚びて一世に附和する心底がなければ成功せぬ。江戸風な町人はこの解脱法を心得ている。芸妓通客はこの解脱法を心得ている。西洋のいわゆる紳士はもつともよくこの解脱法を心得たものである。……」

芸者と紳士がいつしよになつてゐるのは、面白いと、青年はまた焼麴の一片を、横合から半円形に食い欠いた。親指についた牛酪をそのまま袴の膝へなすりつけた。

「芸妓、紳士、通人から耶蘇孔子釈迦を見れば全然たる狂人である。耶蘇、孔子、釈迦から芸妓、紳士、通人を見れば依然として拘泥している。拘泥のうちに拘泥を脱し得たりと得意なるものは彼らである。両者の解脱は根本義において一致すべから

ざるものである。……」

高柳君は今まで解脱の二字においてかつて考えた事はなかった。ただ文界に立つて、ある物になりたい、なりたいたがなれない、なれんのではない、金がない、時がない、世間が寄つてたかつて己おのれを苦しめる、残念だ無念だとばかり思つていた。あとを讀む氣になる。

「解脱は便法べんぽうに過ぎぬ。下くだれる世に立つて、わが真を貫徹し、わが善を標榜ひょうぼうし、わが美を提唱するの際、拖泥帶水の弊へいをまぬがれ、勇猛精進ゆうもうしやうじんの志を固くして、現代下根げこんの衆生しゆじやうより受くる迫害の苦痛を委却いきやくするための便法である。この便法を証得し得ざる時、英靈しゆんじの俊児、またついに鬼窟裏きくつりに墮在だざいして彼のいわゆる芸妓紳士通人と得失を較こするの愚ぐを演じて憚はばからず。国家のため悲しむべき事である。

「解脱は便法である。この方便門ほうべんもんを通じて出頭しゅつとうし来る行為、動作、言説の是非は解脱の関するところではない。したがって吾人は解脱を修得する前に正鵠せいこくにあたれる趣味を養成せねばならぬ。下劣なる趣味を拘泥なく一代に塗抹とまつするは学人の恥辱である。彼らが貴重なる十年二十年を挙あげて故紙堆裏こしたいりに兀々こつこつたるは、衣食のためではない、名聞みょうもんのためではない、ないし爵禄財宝しやくろくざいほうのためではない。微かなる墨痕ぼつこんのうちに、光明の一炬きよを点じ得て、点じ得たる道火どうかを解脱の方便門より担にない出して暗黒世界を遍照へんじょうせんがためである。

「このゆえに真に自家証得底じかしようとくていの見解けんげあるもののために、拘泥けんの煩はんを払はつて、でき得る限り彼らをして第一種の解脱に近づかしむるを道德と云う。道德とは有道ゆうどうの士をして道を行わしめんがために、吾人がこれに対して与うる自由の異名いみょうである。この大

道徳を解せざるものを俗人と云う。

「天下の多数は俗人である。わが位ちやくに着するがためにこの大道徳くだを解し得ぬ。わが富に着するがためにこの大道徳を解し得ぬ。下れるものは、わが酒とわが女に着するがためにこの大道徳を解し得ぬ。

「光明は趣味の先駆である。趣味は社会の油である。油なき社会は成立せぬ。汚けがれたる油に廻転する社会は墮落だらくする。かの紳士、通人、芸妓の徒とは、汚れたる油の上を滑すべつて墓に入るものである。華族こうはくと云い貴顕きけんと云い豪商と云うものは門閥もんぼつの油、権勢けんせいの油、黄白こうはくの油をもつて一世さかを逆しまに廻転せんと欲するものである。

「真正しんせいの油は彼らの知るところではない。彼らは生れてより以来この油について何らの工夫くふうも費やしておらん。何らの工夫を

費やさぬものが、この大徳を解せぬのは許す。光明の学徒を
圧迫せんとするに至つては、俗人の域を超越して罪人の群むれに入
る。

「三味線しやみせんを習うにも五六年はかかる。巧拙こうせつを聴き分くるさえ一
カ月の修業では出来ぬ。趣味の修養が三味しやみの稽古けいこより易やすいと思
うのは間違つてゐる。茶の湯を学ぶ彼らはいらざる儀式に貴重
な時間を費やして、一々に師匠の云う通りになる。趣味は茶の
湯より六むずかしいものじゃ。茶坊主に頭を下げる謙徳けんとくがあるな
らば、趣味の本家ほんけたる学者の考はなおさら傾聴せねばならぬ。
「趣味は人間に大切なものである。樂器を壊こぼつものは社会から
音楽を奪う点において罪人である。書物を焼くものは社会から
學問を奪う点において罪人である。趣味を崩くずすものは社会その
ものを覆くつえす点において刑法の罪人よりもはなはだしき罪人で

ある。音楽はなくとも吾人は生きている、学問がなくても吾人は生きてゐる。趣味がなくても生きておられるかも知れぬ。しかし趣味は生活の全体に渉る社会の根本要素である。これなくして生きんとするは野に入つて虎と共に生きんとすると一般である。

「ここに一人いちにんがある。この一人が単に自己の思うようにならぬと云う原因のもとに、多勢たぜいが朝に晩に、この一人を突つき廻わして、幾年の後のちこの一人の人格を墮落せしめて、下劣なる趣味に誘い去りたる時、彼らは殺人より重い罪を犯したのである。人を殺せば殺される。殺されたものは社会から消えて行く。後患こうかんは遺さのこない。趣味の墮落したものは依然として現存する。現存する以上は墮落した趣味を伝染せねばやまぬ。彼はペストである。ペストを製造したものはもちろん罪人である。

「趣味の世界にペストを製造して罰せられんのは人殺しをして罰せられんのも同様である。位地の高いものはもつともこの罪を犯し^{おか}やすい。彼らは彼らの社会的地位からして、他に働きかける便宜^{べんぎ}の多い場所に立っている。他に働きかける便宜^{べんぎ}を有して、働きかける道を弁^わえぬものは危険である。

「彼らは趣味において専門の学徒に及ばぬ。しかも学徒以上他に働きかけるの能力を有している。能力は権利ではない。彼らのあるものはこの区別さえ心得ておらん。彼らの趣味を教育すべくこの世に出現せる文学者を捕えてすらこれを逆^{さか}しまに吾意のごとくせんとする。彼らは単に大道德を忘れたるのみならず、大不道德を犯して恬然^{てんぜん}として社会に横行しつつあるのである。

「彼らの意のごとくなる学徒があれば、自己の天職を自覚せざる学徒である。彼らを教育する事の出来ぬ学徒があれば腰の抜

けたる学徒である。学徒は光明を体せん事を要す。光明より流れ出する趣味を現実せん事を要す。しかしてこれを現実せんがために、拘泥こうでいせざらん事を要す。拘泥せざらんがために解脱げだつを要す」

高柳君は雑誌を開いたまま、茫然ぼうぜんとして眼を挙げた。正面の柱にかかっている、八角時計がぼうんと一時を打つ。柱の下の椅子いすにぽつ然ねんと腰を掛けていた小女郎こじょうろうが時計の音と共に立ち上がった。丸テーブルの上には安い京焼きょうやきの花活はないきに、浅ましく水仙を突きさして、葉の先が黄ばんでいるのを、いつまでもそのままに水をやらぬ気と見える。小女郎は水仙の花にちよつと手を触れて、花活はないきのそばにある新聞をとり上げた。読むかと思つたら四つに畳んで傍かたわらに置いた。この女は用もないのに立ち上がったのである。退屈のあまり、ぼうんを聞いて器械的に立ち上がった

たのである。羨ましい女だと高柳君はすぐ思う。

菊人形の収入についての議論は片づいたと見えて、二人の学生は煙草たばこをふかして往来を見ている。

「おや、富田とみたが通る」と一人が云う。

「どこに」と一人が聞く。富田君は三寸ばかり開いていた硝子戸ガラスドの間をちらと通り抜けたのである。

「あれは、よく食う奴やつじゃな」

「食う、食う」と答えたところによるとよほど食うと見える。

「人間は食う割わりに肥ふとらんものだな。あいつはあんなに食う癖に
いっこう肥こえん」

「書物は沢山読むが、ちつとも、えろうならんのがおると同じ
事じゃ」

「そうよ。御互に勉強はなるべくせん方がいいの」

「ハハハハ。そんなつもりで云ったんじゃない」

「僕はそう云うつもりにしたのさ」

「富田は肥ふとらんがなかなか敏捷びんしょうだ。やはり沢山食うだけの事はある」

「敏捷な事があるものか」

「いや、この間四丁目を通ったら、後ろから出し抜けに呼ぶものがあるから、振り反ると富田だ。頭を半分刈かったままで、大きな敷布のようなものを肩から纏まとうている」

「元来どうしたのか」

「床屋から飛び出して来たのだ」

「どうして」

「髪を刈っておったら、僕の影が鏡に写ったものだから、すぐ馳かけ出したんだそうだ」

「ハハハハそいつは驚ろいた」

「おれも驚ろいた。そうして尚志会しょうしかいの寄附金を無理に取つて、

また床屋へ引き返したぜ」

「ハハハハなるほど敏捷びんしょうなものだ。それじゃ御互になるべく食う事にしよう。敏捷にせんと、卒業してから困るからな」

「そうよ。文学士のように二十円くらいで下宿に屏息へいそくしていては人間と生れた甲斐かいはないからな」

高柳君は勘定をして立ち上った。ありがとうと云う下女の声に、文芸倶楽部の上につつ伏していた書生が、赤い眼をとろつかせて、睨にらめるように高柳君を見た。牛の乳のなかの酸に中毒でもしたのだろう。

「私は高柳周作と申すもので……」と丁寧^{たかなぎしゅうさく}に頭を下げた。高柳

君が丁寧に頭を下げた事は今まで何度もある。しかしこの時のように快よく頭を下げた事はない。教授の家を訪問しても、翻訳を頼まれる人に面会しても、その他の先輩に対しても皆丁寧に頭をさげる。せんだつて中野のおやじに紹介された時などはいよいよもつて丁寧に頭をさげた。しかし頭を下げるうちにいつでも圧迫を感じている。位地、年輩、服装、住居^{へいげい}が睥睨^{へいげい}して、頭を下げぬか、下げぬかと催促^{おもむき}されてやむを得ず頓首^{とんしゅ}するのである。道也^{どうや}先生^{おんせい}に対しては全く趣^{おもむき}が違^{ちが}う。先生の服装は中野君の説明したごとく、自分と伯仲^{はくちゆう}の間にある。先生の書斎は座敷をかねる点において自分の室^{へや}と同様である。先生の机は白木なるの点において、丸裸なるの点において、またもつとも無趣味

に四角張つたる点において自分の机と同様である。先生の顔は蒼い点において瘠やせた点において自分と同様である。すべてこれらの諸点において、先生と弟ていたりがたく兄けいたりがたき間柄あいだがらにありながら、しかも丁寧ていねいに頭を下げるのは、逼せまられて仕方なしに下げるのではない。仕方あるにもかかわらず、こつちの好意をもつて下げるのである。同類に対する愛憐あいれんの念より生ずる真正の御辞儀おじぎである。世間に対する御辞儀はこの野郎がと心中に思いながらも、公然には反比例に丁寧きわを極めたる虚偽きよぎの御辞儀でありますと断わりたいくらいに思つて、高柳君は頭を下げた。道也先生はそれと覺さとつたかどうか知らぬ。

「ああ、そうですか、私わたしが白井道也で……」とつくろつた景色もなく云う。高柳君にはこの挨拶振あいさつぶりが氣に入つた。兩人はしばらくの間黙つて控えている。道也は相手の来意がわからぬか

ら、先方の切り出すのを待つのが当然と考える。高柳君は昔しの關係を残りなく打ち開^あけて、一刻も早く同類相憐^{あいあわれ}むの間柄になりたい。しかしあまり突然であるから、ちよつと言ひ出しかねる。のみならず、一昔^{ひとむか}し前の事とは申しながら、自分達がいじめて追ひ出した先生が、そのためにかく零落^{れいらく}したのではあるまいかと思うと、何となく氣がひけて云い切れない。高柳君はこんなところになるとすこぶる勇氣に乏^{とぼ}しい。謝罪かたがた尋ねはしたが、いよいよと云う段になると少々怖^{こわ}くて罪滅^{つみほろぼ}しが出來かねる。心にいろいろな冒頭を作つて見たが、どれもこれもきまりがわるい。

「だんだん寒くなりますね」と道也先生は、こつちの了簡^{りようけん}を知らないから、超然たる時候の挨拶をする。

「ええ、だいぶ寒くなつたようで……」

高柳君の脳中の冒頭はこれでまるで打ち壊されてしまった。いつその事自白はこの次にしようという気になる。しかし何だか話して行きたい気がする。

「先生御忙おいそがしいですか……」

「ええ、なかなか忙がしいんで弱ります。貧乏閑ひまなしで」

高柳君はやり損そくなつたと思う。再び出直さねばならん。

「少し御話を承うけたまわりたいと思つて上がったんですが……」

「はあ、何か雑誌へでも御載おのせになるんですか」

あてはまたはずれる。おれの態度がどうしても向むこうには酌くみ取れないと見えると青年は心中少しく残念に思つた。

「いえ、そうじゃないので——ただ——ただつちや失礼ですが。

——御邪魔ならまた上がつてもよろしゅうございますが……」

「いえ邪魔じゃありません。談話と云うからちよつと聞いて見

たのです。——わたしのうちへ話なんか聞きにくるものはありませんよ」

「いいえ」と青年は妙な言葉をもつて先生の辞ことばを否定した。

「あなたは何の学問をなさるですか」

「文学の方を——今年大学を出たばかりです」

「はあそうですか。ではこれから何かおやりになるんですね」

「やれば、やりたいのですが、暇ひまがなくて……」

「暇はないですね。わたしなども暇がなくて困っています。しかし暇はかえつてない方がいいかも知れない。何ですね。暇のあるものはだいたいいるようだが、余り誰も何もやっていないようじゃありませんか」

「それは人に依よりはしませんか」と高柳君はおれが暇さえあればと云うところを暗あんにほのめかした。

「人にも依るでしょう。しかし今の金持ちと云うものは……」
と道也は句を半分で切つて、机の上を見た。机の上には二寸ほどの厚さの原稿がのつている。障子には洗濯した足袋たびの影がさす。

「金持ちは駄目です。金がなくつて困つてるものが……」

「金がなくつて困つてるものは、困りなりにやればいいのです」
と道也先生困つてゐる癖に太平な事を云う。高柳君は少々不満である。

「しかし衣食のために勢力をとられてしまつて……」

「それでいいのですよ。勢力をとられてしまつたら、ほかに何にもしないので構わないのです」

青年は咄然あぜんとして、道也を見た。道也は孔子様のように真面目まじめである。馬鹿にされてるんじゃないと高柳君は思う。高

柳君は大抵の事を馬鹿にされたように聞き取る男である。

「先生ならいいかも知れません」とつるつると口を滑^{すべ}らして、はつと言い過ぎたと下を向いた。道也は何とも思わない。

「わたしは無論いい。あなただつて好いですよ」と相手までも平氣に捲^まき込もうとする。

「なぜですか」と二三歩逃げて、振り向きながら佇^{たたず}む狐のように探^{さぐ}りを入れた。

「だつて、あなたは文学をやつたと云われたじゃありませんか。そうですか」

「ええやりました」と力を入れる。すべて他の点に関しては断乎^{だんこ}たる返事をする資格のない高柳君は自己の本領においては何人^{なんびと}の前に出てもひるまぬつもりである。

「それならいい訳だ。それならそれでいい訳だ」と道也先生は

繰り返して云った。高柳君には何の事か少しも分らない。また、なぜですと突き込むのも、何だか伏兵ふくへいに罹かかる気持がして厭いやである。ちよつと手のつけようがないので、黙つて相手の顔を見た。顔を見ているうちに、先方でどうか解決してくれるだろうと、暗あんに催促の意を籠こめて見たのである。

「分りましたか」と道也先生が云う。顔を見たのはやつぱり何の役にも立たなかつた。

「どうも」と折れざるを得ない。

「だつてそうじゃありませんか。——文学はほかの学問とは違うのです」と道也先生は凜然りんぜんと云い放つた。

「はあ」と高柳君は覚えず応答をした。

「ほかの学問はですね。その学問や、その学問の研究を阻害そがいするものが敵である。たとえば貧ひんとか、多忙とか、圧迫とか、不

幸とか、ひさん悲酸な事情とか、不和とか、けんか喧嘩とかですね。これが
あると学問が出来ない。だからなるべくこれを避けて時と心の
余裕を得ようとする。文学者も今まではやはりそう云うりようけん了簡で
いたのです。そう云う了簡どころではない。あらゆる学問のう
ちで、文学者が一番のんき呑気な閑日月かんじつげつがなくてはならんように思わ
れていた。おかしいのは当人自身までがその気でいた。しかし
それは間違です。文学は人生そのものである。苦痛にあれ、困
窮きゆうしゆうにあれ、窮愁きゆうしゆうにあれ、凡そ人生の行路にあたるものはすなわ
ち文学で、それらをな嘗め得たものが文学者である。文学者と云
うのは原稿紙を前に置いて、熟語字典を参考して、首をひねつ
ているような閑人ひまじんじゃありません。円熟して深厚な趣味を体し
て、人間の万事を臆面おくめんなく取り捌さばいたり、感得したりする普通
以上の吾々を指さすのであります。その取り捌き方や感得し具合

を紙に写したのが文学書になるのです、だから書物は読まないでも実際その事にあたれば立派な文学者です。したがってほかの学問がでし得る限り研究を妨害する事物を避けて、しだいに人世に遠かるに引き易^かえて文学者は進んでこの障害のなかに飛び込むのであります」

「なるほど」と高柳君は妙な顔をして云った。

「あなたは、そうは考えませんか」

そう考えるにも、考えぬにも生れて始めて聞いた説である。批評的の返事が出るときは大抵用意のある場合に限る。不意撃^{ふいうち}に應ずる事が出来れば不意撃ではない。

「ふうん」と云って高柳君は首を低^たれた。文学は自己の本領である。自己の本領について、他人が答弁さえ出来ぬほどの説を吐^はくならばその本領はあまり鞏固^{きようこ}なものではない。道也先生さ

え、こんな見すばらしい家に住んで、こんな、きたならしい着物をきているならば、おれは当然二十円五十銭の月給で沢山だと思つた。何だか急に広い世界へ引き出されたような感じがする。

「先生はだいぶ御忙おいそがしいようですが……」

「ええ。進んで忙しい中へ飛び込んで、人から見ると酔興すいきような苦勞をします。ハハハハ」と笑う。これなら苦勞が苦勞にたたない。

「失礼ながら今はどんな事をやつておいでで……」

「今ですか、ええいろいろな事をやりますよ。飯を食う方と本領の方と両方やろうとするからなかなか骨が折れます。近頃は頼まれてよく方々へ談話の筆記に行きますがね」

「随分御面倒でしょう」

「面倒と云いや、面倒ですがね。そう面倒と云うよりむしろ馬鹿ばか氣げています。まあいい加減に書いては来ますか」

「なかなか面白い事を云うのがおりましよう」と暗あんに中野春台なかのしゅんたいの事を釣り出そうとする。

「面白いの何のつて、この間はうま、うまの講釈を聞かされました」

「うま、うまですか？」

「ええ、あの小供こどもが食物たべものの事をうまうまと云いましょう。あれの

来歴ですね。その人の説によると小供が舌が回り出してから一番早く出る発音がうまうまだそうです。それでその時分は何を見てもうまうま、何を見なくつてもうまうまだからつまりは何なににもつけなくてもいいのだそうだが、そこが小供に取つて一番大切なものは食物だから、とうとう食物の方で、うまうまを専

有してしまつたのだそうです。そこで大人もその癖がのこつて、美味なものをうまいと云うようになった。だから人生の煩悶は要するに元へ還つてうまいまの二字に帰着すると云うのです。何だか寄席へでも行つたようじゃないですか」

「馬鹿にしていますね」

「ええ、大抵は馬鹿にされに行くんですよ」

「しかしそんなつまらない事を云うつて失敬ですね」

「なに、失敬だつていいでさあ、どうせ、分らないんだから。そうかと思うとね。非常に真面目だけれどもなかなか突飛なのがあつてね。この間は猛烈な恋愛論を聞かされました。もつとも若い人ですがね」

「中野じゃありませんか」

「君、知つてますか。ありや熱心なものだつた」

「私の同級生です」

「ああ、そうですね。中野春台とか云う人ですね。よつぽど暇があるんでしょう。あんな事を真面目に考えているくらいだから」

「金持ちです」

「うん立派な家うちにいますね。君はあの男と親密なのですか」

「ええ、もとはごく親密でした。しかしどうもいかんです。近頃は——何だか——未来の細君か何か出来たんで、あんまり交際してくれないのです」

「いいでしょう。交際しなくつても。損にもなりそうもない。ハハハハハ」

「何だかしかし、こう、一人坊ひとりぼつちのような気がして淋しくつていけません」

「一人坊っちで、いいでさあ」と道也先生またいいでさあを担かつぎ出した。高柳君はもう「先生ならいいでしょう」と突き込む勇気が出なかった。

「昔から何かしようと思えば大概は一人坊っちになるものです。そんな一人の友達をたよりにするようじゃ何も出来ません。これによると親類とも仲違なかつたがになる事が出来て来ます。妻にまで馬鹿にされる事があります。しまいには下女までからかいます」

「私はそんなになつたら、不愉快で生きていられないだろうと思います」

「それじゃ、文学者にはなれないです」

高柳君はだまって下を向いた。

「わたしも、あなたぐらいの時には、ここまでとは考えていなかった。しかし世の中の事実は実際ここまでやって来るんです。

うそじゃない。苦しんだのは耶蘇ヤソや孔子こうしばかりで、吾々文学者はその苦しんだ耶蘇や孔子を筆の先でほめて、自分だけは吞氣のんきに暮して行けばいいのだなどと考えてるのは偽文学者にせぶんがくしやですよ。そんなものは耶蘇や孔子をほめる権利はないのです」

高柳君は今こそ苦しいが、もう少し立てば喬木きようぼくにうつる時節があるだろうと、苦しいうちに絹糸ほどな細い望みを繋つないでいた。その絹糸が半分ばかり切れて、暗い谷から上へ出るたよりは、生きているうちは容易に來そうに思われなくなつた。

「高柳さん」

「はい」

「世の中は苦しいものですよ」

「苦しいです」

「知ってますか」と道也先生は淋さびし氣げに笑つた。

「知ってるつもりですけど、いつまでもこう苦しくつちや……」

「やり切れませんか。あなたは御両親が御在りか」

「母だけ田舎いなかにいます」

「おつかさんだけ？」

「ええ」

「御母さんだけでもあれば結構だ」

「なかなか結構でないです。——早くどうかしてやらないと、もう年を取っていますから。私が卒業したら、どうか出来るだろうと思ってたのですが……」

「さよう、近頃のように卒業生が殖ふえちや、ちよつと、口を得うるのが困難ですね。——どうです、田舎の学校へ行く気はないですか」

「時々は田舎へ行こうとも思うんですが……」

「またいやになるかね。——そうさ、あまり勧められもしない。私も田舎の学校はだいぶ経験があるが」

「先生は……」と言いかけたが、また昔の事を云い出しにくくなつた。

「ええ？」と道也は何も知らぬ気である。

「先生は——あの——江湖雜誌こうこざっしを御編輯ごへんしゅうになると云う事ですが、本当にそうなんで」

「ええ、この間から引き受けてやっています」

「今月の論説に解脱げだつと拘泥こうでいと云うのがありましたが、あの憂世子ゆうせいしと云うのは……」

「あれは、わたしです。読みましたか」

「ええ、大変面白く拝見しました。そう申しちゃ失礼ですが、あれは私の云いたい事を五六段高くして、表出したひょうしゅつようなもの

で、利益を享^うけた上に痛快に感じました」

「それはありがたい。それじゃ君は僕の知己^{ゆいし}ですね。恐らく天下^{てんか}唯一^{ゆいいつ}の知己かも知れない。ハハハハ」

「そんな事はないでしょう」と高柳君はやや真面目^{まじめ}に云った。

「そうですか、それじゃなお結構だ。しかし今まで僕の文章を見てほめてくれたものは一人もない。君だけですよ」

「これから皆んな賞^ほめるつもりです」

「ハハハハそう云う人がせめて百人もいてくれると、わたしも本望^{ほんもう}だが——随分頓珍漢^{とんちんかん}な事がありますよ。この間なんか妙な男が尋ねて来てね。……」

「何ですか」

「なあに商人ですがね。どこから聞いて来たか、わたしに、あなたは雑誌をやっておいでだそうだが文章を御書きなさるだろ

うと云うのです」

「へえ」

「書く事は書くともあ云ったんです。するとねその男がどうぞ一つ、眼薬の広告をかいてもらいたいと云うんです」

「馬鹿な奴やつですね」

「その代り雑誌へ眼薬の広告を出すから是非一つ願いたいって——何でも点明水てんめいすいとか云う名ですがね……」

「妙な名をつけて——。御書きになつたんですか」

「いえ、とうとう断りましたがね。それでまだおかしい事があるのですよ。その薬屋で売出しの日に大きな風船を揚げるんだと云うのです」

「御祝いのためですか」

「いえ、やはり広告のために。ところが風船は声も出さずに高

い空を飛んでいるのだから、仰向あおむけば誰にでも見えるが、仰向かせなくつちやいけないでしょう」

「へえ、なるほど」

「それでわたしにその、仰向かせの役をやってくれって云うのです」

「どうするのです」

「何、往來をあるいていても、電車へ乗っていてもいいから、風船を見たら、おや風船だ風船だ、何でもありや点明水の広告に違いないって何遍も何遍も云うのだそうです」

「ハハハ随分思い切って人を馬鹿にした依頼ですね」

「おかしくもあり馬鹿馬鹿しくもあるが、何もそれだけの事をするにはわたしでなくてもよからう。車引でも雇えば訳ないじゃないかと聞いて見たのです。するとその男がね。いえ、車引な

んぞばかりでは信用がなくつていけません。やつぱり髭ひげでも生はやしてもつともらしい顔をした人に頼まないと、人がだまされませんからと云うのです」

「実に失敬な奴ですね。全体何物なにものでしょう」

「何物つてやはり普通の人間ですよ。世の中をだますために人を雇いに來たのです。呑氣のんきなものさハハハハ」

「どうも驚ろいちまう。私わたしなら撲なぐつてやる」

「そんなのを撲つた日にや片かたつ端はしから撲らなくつちやあならな
い。君そう怒るが、今の世の中はそんな男ばかりで出來てるん
ですよ」

高柳君はまさかと思つた。障子にさした足袋たびの影はいつしか
消えて、開あけ放はなつた一枚の間から、靴刷毛くつはけの端はじが見える。椽えんは
泥だらけである。手ての平ひらほどな庭の隅に一株の菊が、清らかに

先生の貧^{ひん}を照らしている。自然をどうでもいいと思っている高柳君もこの菊だけは美しくいと感じた。杉垣^{すぎがき}の遥^{はる}か向^{むこう}に大きな柿の木が見えて、空のなかへ五分珠^{ごぶだま}の珊瑚^{さんご}をかためて嵌^はめ込んだように奇麗に赤く映る。鳴子^{なるこ}の音がして鳥^{からす}がぱつと飛んだ。

「閑静な御住居^{おすまい}ですね」

「ええ。蛸寺^{たこでら}の和尚^{おしょう}が鳥を追っているんです。毎日がらんがらん云わして、鳥ばかり追っている。ああ云う生涯^{しょうがい}も閑静でいいな」

「大変たくさん柿が生^なっていますね」

「渋柿ですよ。あの和尚は何が惜しくて、ああ渋柿の番ばかりするのか。——君妙な咳^{せき}を時々するが、身体^{からだ}は丈夫ですか。だいぶ瘠^やせてるようじゃありませんか。そう瘠せてちやいかん。身体が資本だから」

「しかし先生だつて随分瘡せていらつしやるじゃありませんか」
「わたし？ わたしは瘡せている。瘡せてはいるが大丈夫」

七

白き蝶ちようの、白き花に、

小き蝶ちさの、小き花に、

みだるるよ、みだるるよ。

長き憂うれいは、長き髪に、

暗き憂は、暗き髪に、

みだるるよ、みだるるよ。

いたずらに、吹くは野分のわきの、

いたずらに、住むか浮世に、

白き蝶も、黒き髪も、

みだるるよ、みだるるよ。

と女はうたい了る。おわ銀腕ぎんわんに珠たまを盛りて、白魚しらうおの指うごに揺かしたらば、こんな声こゝろがでようと、男は聴ききとれていた。

「うまく、唱うたえました。もう少し稽古けいこして音量が充分に出ると大きな場所で聴いても、立派に聴けるに違いない。今度演奏会のためしにやつて見ませんか」

「厭いやだわ、ためしだなんて」

「それじゃ本式に」

「本式にやなおできませんわ」

「それじゃ、つまりおやめと云う訳わけですか」

「だつてたくさん人のいる前なんかで、——恥ずかしくつて、声なんか出やしませんわ」

「その新体詩はいいでしょう」

「ええ、わたし大好き」

「あなたが、そうやって、唱つてるところを写真に一つ取りましようか」

「写真に？」

「ええ、厭ですか」

「厭じゃないわ。だけれども、取つて人に御見せなさるでしょう」

「見せてわるければ、わたし一人で見ています」

女は何にも云わずに眼を横に向けた。こぼれ梅を一枚の半襟はんえりの表に掃き集めた真中まんなかに、明星みょうじょうと見まがうほどの留針とめばりが的てき礫れきと耀かがやいて、男の眼を射る。

女の振り向いた方には三尺の台を二段に仕切つて、下には長

方形の交趾こうちの鉢はちに細き蘭らんが揺ゆるがんとして、香かうの煙りのたなびくを待っている。上段にはメロスの愛神ヴィーナスの模像を、ほの暗き室へやの隅に夢かとはかり据すえてある。女の眼は端はしなくもこの裸体像の上に落ちた。

「あの像は」と聞く。

「無論模造です。本物は巴理パリのルーヴルにあるそうです。しかし模造でもみごとですね。腰から上の少し曲ったところと両足の方向とが非常に釣合がよく取れている。——これが全身完全だと非常なものです。惜しい事に手が欠けてます」

「本物も欠けてるんですか」

「ええ、本物が欠けてるから模造もかけてるんです」

「何の像でしょう」

「ヴィーナス。愛の神です」と男はことさらに愛と云う字を強

く云つた。

「ヴィーナス！」

深い眼^{まつげ}睫の奥から、ヴィーナスは溶^とけるばかりに見詰められている。冷^{ひや}やかなる石^{せつこう}膏の暖まるほど、丸^{まる}き乳^{ちくび}首の、呼吸につれて、かすかに動くかと疑^{あや}しまるるほど、女は瞳^{ひとみ}を凝^こらしている。女自身も艶^{えん}なるヴィーナスである。

「そう」と女はやがて、かすかな声で云う。

「あんまり見ているとヴィーナスが動き出しますよ」

「これで愛の神でしょうか」と女はようやく頭^{かしら}を回^{めぐ}らした。

あなたの方が愛の神らしいと云おうとしたが、女と顔を見合した時、男は急に躊躇^{ちゆうちゆう}した。云えば女の表情が崩^{くず}れる。この、訝^{いぶか}るがごとく、訴^いうるがごとく、深い眼のうちに我を頼^{たの}るがごとき女の表情を一瞬たりとも、我から働^うきかけて打^うち壊^{こわ}すのは、

メロスのヴィーナスの腕かいなを折ると同じく大なる罪科ざいかである。

「気高けだか過ぎて……」と男の我を援たすけぬをもどかしがつて女は首を傾けながら、我からと顔の上なる姿を変えた。男はしまったと思う。

「そう、すこし堅過ぎます。愛と云う感じがあまり現われていない」

「何だか冷めたいような心持がしますわ」

「その通りだ。冷めたいと云うのが適評だ。何だか妙だと思っていたが、どうも、いい言葉が出て来なかつたんです。冷めたい——冷めたい、と云うのが一番いい」

「なぜこんなに、拵こしらえたんでしょう」

「やつぱりフ※¹ジアス式だから嚴格なんでしょう」

「あなたは、こう云うのが御好き」

女は石像をさえ、自分と比較して愛人の心を窺^{うかが}つて見る。ヴィーナスを愛するものは、自分を愛してはくれまいと云う掛念^{けねん}がある。女はヴィーナスの、神である事を忘れている。

「好きつて、いいじゃありませんか、古今^{ここん}の傑作ですよ」

女の批判は直覺的である。男の好尚^{こうしょう}は半ば伝説的である。なまじいに美学などを聴いた因果^{いんが}で、男はすぐ女に同意するだけの勇気を失っている。学問は己^{おの}れを欺^{あざむ}くとは心づかぬと見える。自から学問に欺かれながら、欺かれぬ女の判断を、いたずらに誤まれりとのみ見る。

「古今の傑作ですよ」と再び繰り返したのは、半ば女の趣味を教育するためであつた。

「そう」と女は云つたばかりである。石火^{せつか}を交^{まじ}えざる刹那^{せつな}に、

はつと受けた印象は、学者の一言のために打ち消されるものではない。

「元来ヴィーナスは、どう云うものか僕にはいやな聯想がある」
「どんな聯想なの」と女はおとなしく聞きつつ、双の手を立ちながら膝ひざの上に重ねる。手頸てくびからさきが二寸ほど白く見えて、あとは、しなやかなる衣きぬのうちに隠れる。衣は薄紅うすくれなひに銀の雨を濃く淡く、所まだらに降らしたような縞柄しまがらである。

上になった手の甲の、五つに岐わかれた先の、しだいに細まりてかつ丸く、つやある爪おほに蔽おほわれたのが好い感じである。指は細く長く、すらりとした姿を崩くずさぬほどに、柔らかな肉を持たねばならぬ。この調える姿ととのが五本ごとに異ならねばならぬ。異なる五本が一つにかたまって、纏まとまる調子をつくらねばならぬ。美しくしき手を持つ人は、美しくしき顔を持つ人よりも少ない。美

くしき手を持つ人には貴き飾りが必要である。

女は燦たるものを、細き肉に戴いている。

「その指輪は見馴れませんか」

「これ？」と重ねた手は解けて、右の指に耀くものをなぶる。

「この間父様に買っていたのだの」

「金剛石ですか」

「そうですね。天賞堂から取ったんですから」

「あんまり御父さんを苛めちゃいけませんよ」

「あら、そうじゃないのよ。父様の方から買って下さったのよ」

「そりや珍らしい現象ですね」

「ホホホホ本当ね。あなたその訳を知ってて」

「知るものですか、探偵じゃあるまいし」

「だから御存じないでしょうと云うのですよ」

「だから知りませんよ」

「教えて上げましょうか」

「ええ教えて下さい」

「教えて上げるから笑っちゃいけませんよ」

「笑やしません。この通り真面目まじめでさあ」

「この間ね、池上いけがみに競馬があつたでしょう。あの時父様があす

こへいらしてね。そうして……」

「そうして、どうしたんです。——拾つて来たんですか」

「あら、いやだ。あなたは失敬ね」

「だって、待つててもあとをおつしやらないですもの」

「今云うところなのよ。そうして賭かけをなすつたんですつて」

「こいつは驚ろいた。あなたの御父さんもやるんですか」

「いえ、やらないんだけど、試ためしにやって見たんだつて」

「やつぱりやつたんじやありませんか」

「やつた事はやつたの。それで御金を五百円ばかり御取りになつたんだつて」

「へえ。それで買つて頂いたのですか」

「まあ、そうよ」

「ちよつと拝見」と手を出す。男は耀くものを軽く抑えた。

指輪は魔物である。沙翁さおうは指輪を種に幾多の波瀾はらんを描いた。

若い男と若い女を目に見えぬ空裏くうりに繋ぐものは恋である。恋をそのまま手にとらすものは指輪である。

三重みえにうねる細き金の波の、環わと合あうて膨ふくれ上るただ中を穿うがちて、動くなよと、安らかに据すえたる宝石の、眩まばゆさは天あめが下したを

射れど、毀こぼたねば波の中より奪うばいがたき運命は、君ありての妾われ、妾故われゆえにの君である。男は白き指もろ共に指輪を見詰めている。

「こんな指輪だったのか知らん」と男が云う。女は寄り添うて同じ長椅子^{ソファ}を二人の間に分つ^{わか}。

「昔^なしさる好事家^{こうずか}がヴィーナスの銅像を掘り出して、吾^わが庭の眺^{なが}めにと橄欖^{かんらん}の香^かの濃く吹くあたりに据^すえたそうです」

「それは御話^{ごわ}? 突然なのね」

「それから或^{ある}日テニスをしていたら……」

「あら、ちつとも分らないわ。誰がテニスをするの。銅像を掘り出した人なの?」

「銅像を掘り出したのは人足^{にんそく}で、テニスをしたのは銅像を掘り出さした主人の方です」

「どっちだつて同じじゃありませんか」

「主人と人足と同じじゃ少し困る」

「いいえさ、やつぱり掘り出した人がテニスをしたんでしょ」

「そう強情を御張りになるなら、それでよろしい。——では掘り出した人がテニスをする……」

「強情じゃない事よ。じゃ銅像を掘り出さした方がテニスほうをするの、ね。いいでしょう」

「どっちでも同じでさあ」

「あら、あなた、御怒りおおこなすつたの。だから掘り出さした方だつて、あやまつているじゃありませんか」

「ハハハハあやまらなくつてもいいです。それでテニスをしているとね。指輪が邪魔になつて、ラケットが思うように使えないんです。そこで、それはずしてね、どこかへ置こうと思つたが小さいものだから置きなくすといけない。——大事な指輪ですよ。結納ゆいのうの指輪なんです」

「誰と結婚をなさるの？」

「誰とつて、そいつは少し——やつぱりさる令嬢とです」

「あら、お話しになつてもいいじゃないですか」

「隠す訳じゃないが……」

「じゃ話してちょうだい。ね、いいでしょう。相手はどなたなの？」

「そいつは弱りましたね。実は忘れちまつた」

「それじゃ、ずるいわ」

「だって、メリメの本を貸しちまつてちよつと調べられないですもの」

「どうせ、御貸しになつたんでしょうよ。ようございます」

「困つたな。せつかくのところで名前を忘れたもんだから進行する事が出来なくなつた。——じゃ今日は御やめにして今度その令嬢の名を調べてから御話をしましょう」

「いやだわ。せつかくのところでよしたり、なんかして」

「だって名前を知らないんですもの」

「だからその先を話してちょうだいな」

「名前はなくつてもいいのですか」

「ええ」

「そうか、そんなら早くすればよかった。——それでいろいろ考えた末、ようやく考えついて、ヴィーナスの小指へちよつとはめたんです」

「うまいところへ気がついたのね。詩的じゃありませんか」

「ところがテニスが済んでから、すっかりそれを忘れてしまつて、しかも例の令嬢を連れに田舎^{いなか}へ旅行してから気がついたのです。しかしいまさらどうもする事が出来ないから、それなりにして、未来の細君にはちよつとしたでき合^{あい}の指環^{ゆびわ}を買つて結納^{ゆいのう}

にしたのです」

「厭^{いや}な方ね。不人情だわ」

「だって忘れたんだから仕方がない」

「忘れるなんて、不人情だわ」

「僕なら忘れないんだが、異人^{いじん}だから忘れちまつたんです」

「ホホホ異人だつて」

「そこで結納^{とどこお}も滞りなく済んでから、うちへ帰つていよいよ結

婚の晩に——」でわざと句を切る。

「結婚の晩にどうしたの」

「結婚の晩にね。庭のヴィーナスがどたりどたりと玄関を上がつ

て……」

「おおいやだ」

「どたりどたりと二階を上がつて」

「怖こわいわ」

「寢室の戸をあけて」

「氣味がわるいわ」

「氣味がわるければ、そこいらで、やめて置きましょう」

「だけれど、しまいにどうなるの」

「だから、どたり、どたりと寢室の戸をあけて」

「そこは、よしてちょうだい。ただしまいにどうなるの」

「では間を抜きましよう。——あした見たら男は冷つめたくなつ

て死んでたそうです。ヴィーナスに抱きつかれたところだけ紫

色に變つてたと云います」

「おお、厭いやだ」と眉まゆをあつめる。艶えんなる人の眉をあつめたるは

愛嬌あいぎょうに醋すをかけたようなものである。甘き恋に酔えい過ぎたる男

は折々のこの酸味さんみに舌を打つ。

濃くひける新月の寄り合いて、互に頭を擡かしらげたる、うねりの下に、朧おぼろに見ゆる情けの波のかがやきを男はひたすらに打ち守る。

「奥さんはどうしたでしょう」女を憐むものは女である。

「奥さんは病氣になつて、病院に這はい入るのです」

「癒なおるのですか」

「そうさ。そこまでは覚えていない。どうしたつけかな」

「癒らない法はないでしょう。罪も何もないのに」

薄きにもかかわらず豊ゆたかなる下唇はぷりぷりと動いた。男は女

の不平を愚かなりとは思わず、情け深しと興がる。二人の世界は愛の世界である。愛はもつとも真面目まじめなる遊戯である。遊戯なるが故に絶体絶命の時には必ず姿を隠す。愛に戯たわむるる余裕のある人は至幸である。

愛は真面目である。真面目であるから深い。同時に愛は遊戯である。遊戯であるから浮いている。深くして浮いているものは水底の藻と青年の愛である。

「ハハハハ心配なさらんでもいいです。奥さんはきつと癒ります」と男はメリメに相談もせず受合った。

愛は迷である。また悟りである。愛は天地万有をその中に吸収して刻下に異様の生命を与える。故に迷である。愛の眼を放つとき、大千世界はことごとく黄金である。愛の心に映る宇宙は深き情けの宇宙である。故に愛は悟りである。しかして愛の空気を呼吸するものは迷とも悟とも知らぬ。ただおのずから人を引きまた人に引かるる。自然は真空を忌み愛は孤立を嫌う。

「わたし、本当に御気の毒だと思えますわ。わたしが、そんなになつたら、どうしようと思うと」と

愛は己おのれに対して深刻なる同情を有している。ただあまりに深刻なるが故に、享樂の満足ある場合に限りて、自己を貫つらぬき出でて、人の身の上にもまた普通以上の同情を寄せる事ができる。あまりに深刻なるが故に失恋の場合において、自己を貫き出でて、人の身の上にもまた普通以上の怨恨えんこんを寄せる事が出来る。愛に成功するものは必ず自己を善人と思う。愛に失敗するものもまた必ず自己を善人と思う。成敗せいばいに論なく、愛は一直線である。ただ愛の尺度をもつて万事を律する。成功せる愛は同情を乗せて走る馬車馬ばしやうまである。失敗せる愛は怨恨を乗せて走る馬車馬ばしやうまである。愛はもつともわがままなるものである。

もつともわがままなる善人が二人、美しく飾しつりたる室しつに、深刻なる遊戯を演じている。室外の天下は蕭寥しょうりょうたる秋である。天下の秋は幾多の道どうや也先生を苦しめつつある。幾多の高柳君を

淋しがらせつつある。しかして二人はあくまでも善人である。

「この間の音楽会には高柳さんとごいっしょでしたね」

「ええ、別に約束した訳わけでもないんですが、途中で逢ったものですから誘ったのです。何だか動物園の前で悲しそうに立って、

桜の落葉を眺ながめているんです。気の毒になってね」

「よく誘さそって御上おあげになったのね。御病氣じゃなくって」

「少し咳せきをしていたようです。たいした事じゃないでしょう」

「顔の色が大変御おわるかったわ」

「あの男はあんまり神経質だもんだから、自分で病氣をこしらえるんです。そうして慰めてやると、かえって皮肉を云うのです。何だか近来はますます変になるようです」

「御氣の毒ね。どうなすったんでしょう」

「どうしたって、好このんで一人坊ひとりばつちになって、世の中をみんな

敵かたきのように思うんだから、手のつけようがないです」

「失恋なの」

「そんな話もきいた事もないですがね。いつそ細君でも世話をしたらいいかも知れない」

「御世話をして上げたらいいでしょう」

「世話をするって、ああきむ気六ずかしくつちや、駄目ですよ。細

君が可哀想だかわいそう」

「でも。御持ちになつたら癒なおるでしょう」

「少しは癒るかも知れないが、元来がんらいが性分しょうぶんなんですからね。悲観する癖があるんです。悲観病に罹かかつてるんです」

「ホホホホどうして、そんな病気が出たんでしょう」

「どうしてですかね。遺伝かも知れません。それでなければ小供のうち何かあったんでしょう」

「何か御聞おききになつた事はなくつて」

「いいえ、僕ああまりそんな事を聞くのが嫌きらだから、それに、あの男はいつこう何なんにも打ち明けない男でね。あれがもつと淡泊たんぱくに思つた事を云う風だと慰めようもあるんだけれども」

「困つていらつしやるんじやなくつて」

「生活にですか、ええ、そりや困つてるんです。しかし無暗むやみに金をやろうなんていったら擲たきつけますよ」

「だつて御自分で御金がとれそうなものじゃありませんか、文学士だから」

「取れるですとも。だからもう少し待つてるといいですが、どうも性急せっかちで卒業したあくる日からして、立派な作家になつて、有名になつて、そうして楽に暮らそうつて云うのだから六むずかしい」

「御国は一体どこなの」

「国は新潟県です」

「遠い所なのね。新潟県は御米の出来る所でしょう。やっぱり御百姓なの」

「農、^{のう}なんでしょう。——ああ新潟県で思い出した。この間あなたが御出のとき行き違^{ちがひ}に出て行つた男があるでしょう」

「ええ、あの長い顔の髭^{ひげ}を生^はやした。あれはなに、わたしあの人^{ひと}の下駄^{ぎつくり}を見て吃驚^{びっくり}したわ。随分薄っぺらなのね。まるで草履^{ぞうり}よ」

「あれで泰然たるものですよ。そうしてちつとも愛嬌^{あいぎょう}のない男でね。こつちから何か話しかけても、何^{なん}にも応答^{おうた}をしない」

「それで何しに來たの」

「江湖^{こうこざつし}雜誌の記者と云うんで、談話の筆記に來たんです」

「あなたの？ 何か話しておやりになつて？」

「ええ、あの雑誌を送つて来ているからあとで見せましょう。

——それあの男について妙な話があるんです。高柳が国の中学にいた時分あの人に習つたんです——あれで文学士ですよ」

「あれで？ まあ」

「ところが高柳なんぞが、いろいろな、いたずらをして、苛め（いじめ）て追い出してしまつたんです」

「あの人を？ ひどい事をするのね」

「それで高柳は今となつて自分が生活に困難しているものだから、後悔して、さぞ先生も追い出されたために難義をしたろう、逢（あ）つたら謝罪するつて云つてましたよ」

「全く追い出されたために、あんなに零落（れいらく）したんでしょうか。そうすると気の毒ね」

「それからせんだつて江湖雜誌の記者と云う事が分つたでしよう。だから音楽会の帰りに教えてやつたんです」

「高柳さんはいらしたでしようか」

「行つたかも知れませんよ」

「追いついたんなら、本当に早く御詫おわびをなさる方がいいわね」

善人の会話はこれで一段落を告げる。

「どうです、あつちへ行つて、少しみんなと遊あそぼうじゃありませんか。いやですか」

「写真は御やめなの」

「あ、すっかり忘れていた。写真は是非取らして下さい。僕はこれでなかなか美術的な奴を取るんです。うん、商売人の取るのは下等ですよ。——写真も五六年この方かた大變進歩してね。今じゃ立派な美術です。普通の写真はだれが取つたつて同じでしょう。」

近頃のは個人個人の趣味で調子がまるで違ってくるんです。いろいろなものを抜いたり、いったいの調子を和やわらげたり、際きわどい光線の作用を全景にあらわしたり、いろいろな事をやるんです。早いものでもう景色専門家や人物専門家が出来てるんですからね」

「あなたは人物の専門家なの」

「僕？　僕は——そうさ、——あなただけの専門家になろうと思うのです」

「厭いやなかな」

ダイヤモンド
金剛石がきらりとひらめいて、薄紅の袖のゆるる中から細い腕かいたなが男の膝ひざの方に落ちて来た。軽くあたたつたのは指先ばかりである。

善人の会話は写真撮影に終る。

秋は次第に行く。虫の音はようやく細る。

筆硯に命を籠むる道也先生は、ただ人生の一大事因縁に着し

て、他を顧みるの暇なきが故に、暮るる秋の寒きを知らず、虫

の音の細るを知らず、世の人のわれにつれなきを知らず、爪の

先に垢のたまるを知らず、蛸寺の柿の落ちた事は無論知らぬ。

動くべき社会をわが力にて動かすが道也先生为天職である。高

く、偉いなる、公けなる、あるものの方に一步なりとも動かす

が道也先生の使命である。道也先生はその他を知らぬ。

高柳君はそうは行かぬ。道也先生の何事をも知らざるに反し

て、彼は何事をも知る。往来の人の眼つきも知る。肌寒く吹く

風の鋭どきも知る。かすれて渡る雁かりの数も知る。美しくき女も知る。黄金おうごんの貴たつときも知る。木屑きくずのごとく取り扱わるる吾身わがみのはなくて、浮世の苦しみの骨に食い入る夕々ゆうべゆうべを知る。下宿の菜さいの憐れにして芋いもばかりなるはもとより知る。知り過ぎたるが君の癖にして、この癖を増長せしめたるが君の病である。天下に、人間は殺しても殺し切れぬほどある。しかしこの病を癒なおしてくれるものは一人もない。この病を癒してくれぬ以上は何千万人いるも、おらぬと同様である。彼は一人坊ひとりぼつちになつた。己おのれに足りて人に待つ事なき呑氣のんきな一人坊ひとりぼつちではない。同情に餓うえ、人間に渴かつしてやるせなき一人坊ひとりぼつちである。中野君は病氣と云う、われも病氣と思う。しかし自分を一人坊ひとりぼつちの病氣にしたものは世間である。自分を一人坊ひとりぼつちの病氣にした世間は危篤きとくなる病人を眼前に控うそふえて嘯うそふいている。世間は自分を病氣に

したばかりでは満足せぬ。半死の病人を殺さねばやまぬ。高柳君は世間を呪^{のろ}わざるを得ぬ。

道也先生から見た天地は人のためにする天地である。高柳君から見た天地は己れのためにする天地である。人のためにする天地であるから、世話をしてくれ手がなくとも恨^{うらみ}とは思わぬ。己れのためにする天地であるから、己れをかまってくれぬ世を残酷と思う。

世話をするために生れた人と、世話をされに生れた人とはこれほど違う。人を指導するものと、人にたよるものとはこれほど違う。同じく一人坊うちでありながらこれほど違う。高柳君にはこの違いがわからぬ。

垢染^{あかし}みた布団^{ふとん}を冷やか^{ひや}に敷いて、五分刈^{ごぶ}りが七分ほどに延びた頭を薄ぎたない枕の上に横^{よこた}えていた高柳君はふと眼を挙^あげて

庭前^{ていぜん}の梧桐^{ごとう}を見た。高柳君は述作をして眼がつかれると必ずこの梧桐を見る。地理学教授法を訳して、くさくさすると必ずこの梧桐を見る。手紙を書いてさえ行き詰まるときつとこの梧桐を見る。見るはずである。三坪ほどの荒庭^{あれにわ}に見るべきものは一本の梧桐を除いてはほかに何にもない。

ことにこの間から、気分がわるくて、仕事をする元気がないので、あやしげな机に頬杖^{ほおづえ}を突いては朝な夕なに梧桐^{ごとう}を眺めくらして、うつらうつらとしていた。

一葉^{いちよう}落ちてと云う句は古い。悲しき秋は必ず梧桐から手を下す。ばつさりと垣にかかる裕^{あわせ}の頃は、さまでに心を動かす縁^{よすが}ともならぬと油断する翌朝^{よくあさ}またばさりと落ちる。うそ寒いからと早く繰る雨戸の外にまたばさりと音がする。葉はようやく黄ばんで来る。

青いものがしだいに衰える裏から、浮き上がるのは薄く流した脂やにの色である。脂は夜ごとを寒く明けて、濃く変つて行く。婆娑たる命は旦夕たんせきに逼るせま。

風が吹く。どこから来るか知らぬ風がすうと吹く。黄ばんだ梢こずえは動ゆぐとも見えぬ先に一葉二葉ひとふたはがはらはら落ちる。あとはようやく助かる。

脂は夜ごとの秋の霜しもにだんだん濃こくなる。脂のなかに黒い筋が立つ。箒ほうきで敲たたけば煎餅せんべいを折るような音がする。黒い筋は左右へ焼けひろがる。もう危あやうい。

風がくる。垣すきの隙から、椽えんの下から吹いてくる。危あやういものは落ちる。しきりに落ちる。危あやういと思う心さえなくなるほど梢こずえを離れる。明らさまなる月がさすと枝の数が読まれるくらい

あらわに骨が出る。

わずかに残る葉を虫が食う。渋色しぶいろの濃いなかにぼつりと穴があく。隣りにもあく、その隣りにもぼつりぼつりとあく。一面が穴だらけになる。心細いと枯れた葉が云う。心細かろうと見ている人が云う。ところへ風が吹いて来る。葉はみんな飛んでしまう。

高柳君がふと眼を挙げた時、梧桐はすべてこれらの径路けいろを通り越して、から坊主ぼうずになっていた。窓に近く斜めななに張った枝の先にただ一枚の虫食葉むしくいばがかぶりついている。

「一人坊ひとりぼつちだ」と高柳君は口のなかで云った。

高柳君は先月あたりから、妙な咳せきをする。始めは気にもしなかった。だんだん腹に答えのない咳が出る。咳だけではない。熱も出る。出るかと思うとやむ。やんだから仕事をしようかと

思うとまた出る。高柳君は首を傾けた。

医者に行つて見てもらおうかと思つたが、見てもらうと決心すれば、自分で自分を病氣だと認定した事になる。自分で自分の病氣を認定するのは、自分で自分の罪惡を認定するようなものである。自分の罪惡は判決を受けるまでは腹のなかで弁護するのが人情である。高柳君は自分の身体からだを医師の宣告にかからぬ先に弁護した。神経であると弁護した。神経と事実とは兄弟であると言う事を高柳君は知らない。

夜になると時々寝汗ねあせをかく。汗で眼がさめる事がある。真暗まっくらになかで眼がさめる。この真暗さが永久続いてくれればいいと思う。夜があけて、人の声がして、世間が存在していると云う事がわかると苦痛である。

暗いなかをなお暗くするために眼を眠ねむつて、夜着よぎのなかへ頭

をつき込んで、もうこれぎり世の中へ顔が出したくない。このまま眠りに入つて、眠りから醒めぬ間に、あの世に行つたら結構だろうと考えながら寝る。あくる日になると太陽は無慈悲にも赫突^{かくえき}として窓を照らしている。

時計を出しては一日に脈^{みやく}を何遍となく験^{けん}して見る。何遍験しても平脈^{へいみやく}ではない。早く打ち過ぎる。不規則に打ち過ぎる。どうしても尋常には打たない。痰^{たん}を吐^はくたびに眼を皿のようにして眺^{なが}める。赤いものの見えないのが、せめてもの慰安である。

痰^{たん}に血の交^{まじ}らぬのを慰安とするものは、血の交る時にはただ生きてゐるのを慰安とせねばならぬ。生きてゐるだけを慰安とする運命に近づくかも知れぬ高柳君は、生きてゐるだけを厭^{いと}う人である。人は多くの場合においてこの矛盾を冒^{おか}す。彼らは幸福に生きるのを目的とする。幸福に生きんがためには、幸福を

享受すべき生そのものの必要を認めぬ訳には行かぬ。単なる生命は彼らの目的にあらずとするも、幸福を享^うけ得る必須条件として、あらゆる苦痛のもとに維持せねばならぬ。彼らがこの矛盾を冒^{おか}して塵界^{じんかい}に流転^{るてん}するとき死なんとして死ぬ^{あた}能わず、しかも日ごとに死に引き入れらるる事を自覚する。負債を償^{つぐな}うの目的をもつて月々に負債を新たにしつつあると変りはない。これを悲酸^{ひさん}なる煩悶^{はんもん}と云う。

高柳君は床^{とこ}のなかから這^はい出した。瓦斯糸^{ガスいと}の蚊絆^{かがすり}の綿入^{めんいり}の上から黒木綿^{くろもめん}の羽織^{はori}を着る。机に向う。やっぱり翻訳をする了簡^{りようけん}である。四五日^{しごんち}そのままにして置いた机の上には、障子の破れから吹き込んだ砂が一面に軽^{かろ}くたまっている。硯^{すずり}のなかは白く見える。高柳君は面倒だと見えて、塵^{ちり}も吹かずに、上から水をさした。水入^{みずいれ}に在^ある水ではない。五六輪^{まめぎく}の豆菊^さを挿^さした硝子^{ガラス}の

小瓶こびんを花ながら傾けて、どつと硯の池に落した水である。さかに磨すり減らした古梅園こばいえんをしきりに動かすと、じやりじやり云う。

高柳君は不愉快の眉まゆをあつめた。不愉快の起る前に、不愉快を取り除く面倒をあえてせずして、不愉快の起つた時に唇くちびるを嚙かむのはかかる人の例である。彼は不愉快を忍ぶべく余り鋭敏である。しかしてあらかじめこれに備うべくあまり自棄じきである。

机上に原稿紙を展のべた彼は、一時間ほど呻吟しんぎんしてようやく二枚黒くしたが、やがて打ちやるように筆を擱おいた。窓の外には落ち損そくなつた一枚の桐きりの葉が淋しく残っている。

「一人坊ひとりぼつちだ」と高柳君は口のうちにまたまた繰り返した。

見るうちに、葉は少しく上に揺れてまた下に揺れた。いよいよ落ちる。と思う間に風ははたとやんだ。

高柳君は巻紙を出して、今度は故里ふるさとの御母おつかさんの所へ手紙を

書き始めた。「寒氣相加わり候処如何御暮し被遊候や。不相變あいかわらず

御丈夫の事と奉遥察候。ようさつたてまつりそろ私事も無事」とまでかいて、しばらく

く考えていたが、やがてこの五六行を裂いてしまった。裂いたほご反古を口へ入れてくちやくちや嚙かんでいると思つたら、ぽつと黒いものを庭へ吐き出した。

一人坊つちの葉がまた揺れる。今度は右へ左へ二三度首を振る。その振りがようやく収おさまつたと思う頃、颯さつと音がして、病葉わくらばはぼたりと落ちた。

「落ちた。落ちた」と高柳君はさも落ちたらしく云つた。

やがて三尺の押入を開あけて茶色の中折なかおれを取り出す。門口かどぐちへ出て空を仰ぐと、行く秋を重いものが上から囲んでいる。

「御婆さん、御婆さん」

はいと婆さんが雑巾ぞうきんを刺す手をやめて出て来る。

「傘^{かさ}をとつて下さい。わたしの室^{へや}の椽側^{えんがわ}にある」

降れば傘をさすまでも歩く考である。どこと云う目的^{あて}もないが、ただ歩くつもりなのである。電車の走るのは電車が走るのだから、なぜ走るのだから電車にもわかるまい。高柳君は自分があるくだけは承知している。しかしなぜあるくのだから電車のごとく無意識である。用もなく、あてもなく、またあるきたくもないものを無理にあるかせるのは残酷である。残酷があるかせるのだから敵^{かたき}は取れない。敵が取りたければ、残酷を製造した発頭人^{ほつとうにん}に向うよりほかに仕方がない。残酷を製造した発頭人は世間である。高柳君はひとり敵の中をあるいている。いくらあるいてもやつぱり一人坊^{ひとりぼ}つちである。

ぽつりぽつりと折々降ってくる。初時雨^{はつしぐれ}と云うのだろう。豆腐屋^{とうふや}の軒下に豆を絞^{しぼ}った殻が、山のように桶^{おけ}にもつてある。

山の頂が^{いただき}ぼくりと欠けて四面から煙が出る。風に連れて煙は往來^{なび}へ靡く。塩物屋^{しおものや}に鮭^{さけ}の切身が、渋^さびた赤い色を見せて、並んでいる。隣りに、しらす干^{とさぶし}が、かたまつて白く反^そり返る。鰹節屋の小僧が一生懸命に土佐節^{とさぶし}をささらで磨^{みが}いている。ぴかりぴかりと光る。奥に婚礼用の松が真青^{まつさお}に景氣を添える。葉茶屋^{はぢや}では丁稚^{でつち}が抹茶^{まっちゃ}をゆつくりゆつくり白^{うす}で挽^ひいている。番頭は往來を睨^{にら}めながら茶を飲んでゐる。——「えつ、あぶねえ」と高柳君は突き飛ばされた。

黒紋付の羽織に山高帽^{かさぶ}を被^{かぶ}つた立派な紳士が綱曳^{つなひき}で飛んで行く。車へ乗るものは勢^{いきおい}がいい。あるくものは突き飛ばされても仕方がない。「えつ、あぶねえ」と拳突^{けんつ}を喰^くわされても黙^{もく}つておらねばならん。高柳君は幽霊のようにあるいている。

青銅^{からかね}の鳥居をくぐる。敷石の上に鳩が五六羽、時雨^{しぐれ}の中を遠近^{おちこち}

している。唐人髷とうじんまげに結いつた半玉はんぎよくが洩蛇しふじやの目めをさして鳩鳩を見ている。あらい八丈はちじょうの羽織はちじょうを長く着て、素足すあしを爪皮つまかわのなかへさし込んで立つた姿を、下宿の二階窓から書生が顔を二つ出して評している。柏手かしわでを打って鈴を鳴らして御賽銭おさいせんをなげ込んだ後姿が、見ている間まにこっちへ逆戻ぎやくもどりをする。黒縮緬くろぢりめんへ三つ柏み がしわの紋もんをつけた意気な芸者がすれ違ちがうときに、高柳君の方に一瞥いちべつの秋波しゅうはを送つた。高柳君は鉛しんを背負しょつたような重い心持ちになる。

石段を三十六おりる。電車がごうつごうつと通る。岩崎いわさきの塀へいが冷酷そびに聳そびえている。あの塀へ頭をぶつけて壊こわしてやろうかと思う。時雨しぐれはいつか休やすんで電車の停留所に五六人待っている。背せの高い黒紋付が蝙蝠傘こうもりを畳んで空を仰いでいた。

「先生」と一人坊ひとりぼつちの高柳君は呼びかけた。

「やあ妙な所で逢あいましたね。散歩かね」

「ええ」と高柳君は答えた。

「天氣のわるいによく散歩するですね。——岩崎の塀を三度周るといい散歩になる。ハハハハ」

高柳君はちよつといい心持ちになった。

「先生は？」

「僕ですか、僕はなかなか散歩する暇なんかありません。不相変多忙でね。今日はちよつと上野の図書館まで調べ物に行つたです」

高柳君は道也先生に逢うと何だか元氣が出る。一人坊つちでありながら、こう平氣にしている先生が現在世のなかにあると思うと、多少は心丈夫になると見える。

「先生もう少し散歩をなさいませんか」

「そう、少しなら、してもいい。どっちの方へ。上野はもうよ

そう。今通つて来たばかりだから」

「私はどっちでもいいのです」

「じゃ坂を上^{あが}つて、本郷の方へ行きましょう。僕はあっちへ帰るんだから」

二人は電車の路に沿うてあるき出した。高柳君は一人坊つちが急に二人坊つちになつたような気がする。そう思うと空も広く見える。もう綱^{つな}曳^{ひき}から突き飛ばされる氣遣^{きづかい}はあるまいとまで思う。

「先生」

「何ですか」

「さつき、車屋から突き飛ばされました」

「そりや、あぶなかつた。怪^け我^がをしやしませんか」

「いいえ、怪我はしませんが、腹は立ちました」

「そう。しかし腹を立てても仕方がないでしょう。——しかし腹も立てようによるですな。昔し渡辺^{わたなべ}華山^{かざん}が松平侯の供^{とも}先に粗忽^{そこつ}で突き当ってひどい目に逢^あつた事がある。華山がその時の事を書いてね。——松平侯御横行——と云つてるですが。この御横行の三字が非常に面白いじゃないですか。尊^{たつと}んで御^{おん}の字をつけてるがその裏に立派な反抗心がある。気概がある。君も綱引御横行と日記にかくさ」

「松平侯つて、だれですか」

「だれだか知れやしない。それが知れるくらいなら御横行はしないですよ。その時発憤した華山はいまだに生きてるが、松平某なるものは誰も知りやしない」

「そう思うと愉快ですが、岩崎^{いさ}の塀^{へい}などを見ると頭をぶつけて、壊^{こわ}してやりたくなります」

「頭をぶつけて、壊せりや、君より先に壊してるものがあるかも知れない。そんな愚^ぐな事を云わずに正々堂々と創作なら、創作をなされば、それで君の寿命は岩崎などよりも長く伝わるのです」

「その創作をさせてくれないのです」

「誰が」

「誰がつて訳じゃないですが、出来ないのです」

「からだでも悪いですか」と道也先生横から覗^{のぞ}き込む。高柳君の頬^{ほお}は熱を帯びて、蒼^{あお}い中から、ほてっている。道也は首を傾けた。

「君坂を上がると呼^き吸^きが切れるようだが、どこか悪いじゃないですか」

強^しいて自分にさえ隠そうとする事を言いあてられると、言い

あてられるほど、明白な事実であつたかと落胆^{がつかり}する。言いあてられた高柳君は暗い穴の中へ落ちた。人は知らず、かかる冷酷なる同情を加えて憚^{はげ}からぬが多い。

「先生」と高柳君は往来に立ち留^どまつた。

「何ですか」

「私は病人に見えるでしょうか」

「ええ、まあ、——少し顔色は悪いです」

「どうしても肺病でしょうか」

「肺病？ そんな事はないです」

「いいえ、遠慮なく云つて下さい」

「肺の気^けでもあるんですか」

「遺伝です。おやじは肺病で死にました」

「それは……」と云つたが先生返答に窮した。

膀胱にはち切れるばかり水を詰めたのを針ほどの穴に洩らせば、針ほどの穴はすぐ白銅ほどになる。高柳君は道也の返答をきかぬがごとくに、しゃべつてしまう。

「先生、私の歴史を聞いて下さいますか」

「ええ、聞きますとも」

「おやじは町で郵便局の役人でした。私が七つの年に拘引されてしまいました」

道也先生は、だまつたまま、話し手といつしよにゆるく歩を運ばして行く。

「あとで聞くと官金を消費したんだそうで——その時はなんにも知りませんでした。母にきくと、おとっさんは今に帰る、今に帰ると云ってました。——しかしとうとう帰って来ません。帰らないはずです。肺病になつて、牢屋のなかで死んでしまつ

たんです。それもずつとあとで聞きました。母は家を畳んで村へ引き込みました。……」

むこう向から威勢のいい車が二挺束髪にちようそくはつの女を乗せてくる。二人はちよつとよける。話はとぎれる。

「先生」

「何ですか」

「だから私には肺病の遺伝があるんです。駄目です」

「医者に見せたですか」

「医者には——見せません。見せたって見せなくったって同じ事です」

「そりや、いけない。肺病だつて癒なおらんとは限らない」

高柳君は気味の悪い笑いを洩もらした。時雨しぐれがはらはらと降つて来る。からたち寺でらの門の扉に碧巖録提唱へきがんろくていしようと貼はりつけた紙が

際立^{きわだ}って白く見える。女学校から生徒がぞろぞろ出てくる。赤や、紫や、海老茶^{えびちや}の色が往来へちらばる。

「先生、罪惡も遺伝するものでしょうか」と女学生の間を縫いながら歩^ほを移しつつ高柳君が聞く。

「そんな事があるものですか」

「遺伝はしないでも、私は罪人の子です。切^{せつ}ないです」

「それは切ないに違いない。しかし忘れなくっちゃいけない」
警察署から手錠^{てじょう}をはめた囚人が二人、巡査に護送されて出てくる。時雨^{しぐれ}が囚人の髪にかかる。

「忘れても、すぐ思い出します」

道也先生は少し大きな声を出した。

「しかしあなたの生涯^{しょうがい}は過去にあるんですか未来にあるんですか。君はこれから花が咲く身ですよ」

「花が咲く前に枯れるんです」

「枯れる前に仕事をするんです」

高柳君はだまっている。過去を顧みれば罪である。未来を望

めば病気である。現在は麵麩パンのためにする写字である。

道也先生は高柳君の耳の傍そばへ口を持って来て云った。

「君は自分だけが一人坊ひとりぼつちだと思うかも知れないが、僕も一

人坊つちですよ。一人坊つちは崇高なものです」

高柳君にはこの言葉の意味がわからなかった。

「わかったですか」と道也先生がきく。

「崇高——なぜ……」

「それが、わからなければ、とうてい一人坊つちでは生きていられません。——君は人より高い平面にいると自信しながら、人がその平面を認めてくれないために一人坊つちなのです。」

しかし人が認めてくれるような平面ならば人も上あがつてくる平面です。芸者や車引くるまひきに理會されるような人格なら低いにきまつてます。それを芸者や車引も自分と同等なものと思ひ込んでしまふから、先方から見くびられた時腹が立つたり、煩悶はんもんするのです。もしあんなものと同等なら創作をしたつて、やつぱり同等の創作しか出来ない訳だ。同等でなければこそ、立派な人格を發揮する作物さくぶつも出来る。立派な人格を發揮する作物が出来なければ、彼らからは見くびられるのはもつともでしょう」

「芸者や車引はどうでもいいですが……」

「例はだれだつて同じ事です。同じ学校を同じに卒業した者だつて変りはありません。同じ卒業生だから似たものだろうと思うのは教育の形式が似ているのを教育の実体が似ているものと考ちがえ違ちがひした議論です。同じ大学の卒業生が同じ程度のものであつ

たら、大学の卒業生はことごとく後世に名を残すか、またはことごとく消えてしまわなくつてはならない。自分こそ後世に名を残そうと力^{りき}むならば、たとい同じ学校の卒業生にもせよ、ほかのものは残らないのだと云う事を仮定してかからなければなりませんまい。すでにその仮定があるなら自分と、ほかの人とは同様の学士であるにもかかわらずすでに大差別があると自認した訳じゃありませんか。大差別があると自任しながら他^{ひと}が自分を解してくれんと云つて煩悶するのは矛盾です」

「それで先生は後世に名を残すおつもりでやつていらつしやるんですか」

「わたしのは少し、違います。今の議論はあなたを本位にして立てた議論です。立派な作物を出して後世に伝えたいと云うのが、あなたの御希望のようだから御話しをしたのです」

「先生のが承^{うけたまわ}る事が出来るなら、教えて頂けますまいか」

「わたしは名前なんてあてにならないものはどうでもいい。ただ自分の満足^うを得るために世のために働くのです。結果は悪名になろうと、臭名^{しゅうめい}になろうと気狂^{きちがい}になろうと仕方がない。ただこう働かなくつては満足が出来ないから働くまでの事です。こう働かなくつて満足が出来ないところをもつて見ると、これが、わたしの道に相違ない。人間は道に従うよりほかにやりようのないものだ。人間は道の動物であるから、道に従うのが一番貴^{たつと}いのだらうと思つています。道に従う人は神も避けねばならないのです。岩崎の塀^{へい}なんか何でもない。ハハハハ」

剥^はげかかった山高帽^{あみだ}を阿弥陀^{かぶ}に被^{かぶ}つて毛繻子^{けじゆすば}張りの蝙蝠傘^{こうもり}をさした、一人坊^{ひとりぼ}つちの腰弁当^{ひとりぼ}の細長い顔から後光^{ごこう}がさした。高柳君ははつと思ふ。

往來のものは右へ左へ行く。往來の店は客を迎え客を送る。電車は出来るだけ人を載せて東西に走る。織るがごとき街の中に喪家の犬のごとく歩む二人は、免職になりたての属官と、墮落した青書生と見えるだろう。見えても仕方がない。道也はそれでたくさんだと思う。周作はそれではならぬと思う。二人は四丁目の角でわかれた。

九

小春の日に温め返された別荘の小天地を開いて結婚の披露をする。

愛は偏狭を嫌う、また専有をにくむ。愛したる二人の間に有り余る情を挙げて、博く衆生を潤おす。有りあまる財を抛つて

多くの資格^{ひんかく}を会^{かい}す。来らざるものは和楽^{わらく}の扇^{あふぎ}に麾^さく風^{かぜ}を厭^{いと}うて、寒き雪空^{おむむ}に赴^{おもむ}く鳧雁^{ふがん}の類^{るい}である。

円満なる愛は触^ふれるところのすべてを円満にす。二人の愛は曇り勝ちなる時雨^{しぐれ}の空さえも円満にした。——太陽の真上に照る日である。照る事は誰でも知るが、だれも手を翳^{かざ}して仰ぎ見る事のならぬくらい明^{あきら}かに照る日である。得意なるものに明かなる日の嫌なものはない。客は車を駆^かつて東西南北より来る。

杉の葉の青きを扨^{えら}んで、丸柱の太きを装^{よそお}い、頭^{かしら}の上一丈にて二本を左右より平^{たいら}に曲^まげて続^つぎ合せたるをアーチと云う。杉の葉の青きはあまりに厳^{おごそか}に過^すぐ。愛の郷に入るものは、ただおごそかなる門^{かど}を潜^{くぐ}るべからず。青きものは暖かき色^{やわら}に和^{やわ}げられねばならぬ。

裂^けけば煙^{けぶ}る蜜柑^{みかん}の味はしらず、色こそ暖かい。小春^{こはる}の色は黄

である。点々と珠を綴るたま杉の葉影に、ゆたかなる南海の風は通う。紫に明け渡る夜を待ちかねて、ぬつと出るあさひ旭日が、岡より岡を射て、万顆の黄玉は一時に耀く紀の国から、偷み来た香りとかお思われる。この下を通るものは酔わねば出る事を許されぬおきて掟である。

緑門アーチの下には新しき夫婦が立っている。すべての夫婦は新らしくなければならぬ。新しき夫婦は美しくなければならぬ。新しく美しき夫婦は幸福でなければならぬ。彼らはこの緑門の下に立つて、迎えたる賓客にわが幸福の一分いちぶを与え、送り出す朋友ほうゆうにわが幸福の一分を与えて、残る幸福に共白髪ともしらがの長き末までを耽るべく、新らしいのである、また美くしいのである。

男は黒き上着に縞しまの洋袴ズボンを穿く。折々は雪を欺く白き手拭ハンケチが黒き胸のあたりに漂う。女は紋つきである。裾すそを色どる模様の

華^{はな}やかなるなかから浮き上がるがごとく調子よくすらりと腰から上が抜け出でている。ヴィーナスは浪^{なみ}のなかから生れた。この女は裾模様のなかから生れている。

日は明かに女の頸筋^{くびすじ}に落ちて、角^{かど}だたぬ咽喉^{のど}の方はほの白き影となる。横から見るときその影が消えるがごとく薄くなつて、判然^{はつき}としたやさしき輪廓^{りんかく}に終る。その上に紫^{むらさき}のうずまくは一朶^{いちだ}の暗き髪を束^{つか}ねながらも額際^{ひたいぎわ}に浮かせたのである。金台に深紅^{しんく}の七宝^{しっぽう}を鏤^{ちりば}めたヌーボー式の簪^{かんざし}が紫の影から顔だけ出している。

愛は堅きものを忌^いむ。すべての硬性を溶化^{ようか}せねばやまぬ。女の眼に耀^{かがや}く光りは、光りそれ自^{みず}からの溶^とけた姿である。不可思議なる神境から双眸^{そうぼう}の底に漂^{ただよ}うて、視界に入る万有を恍惚^{こうこつ}の境に逍遙^{しょうよう}せしむる。迎えられたる賓客は陶然^{とうぜん}として園内に入る。

「高柳さんはいらつしやるでしうか」と女が小さな声で聞く。

「え？」と男は耳を持つてくる。園内では楽隊が越後獅子を奏している。客は半分以上集まった。夫婦はなかへ這入^{はい}つて接待をせねばならん。

「そうさね。忘れていた」と男が云う。

「もうだいぶ御客さまがいらしたから、向^むへ行かないじゃわるいでしょう」

「そうさね。もう行く方がいいだろう。しかし高柳がくると可哀想^{かわいそう}だからね」

「ここにいらつしやらないとですか」

「うん。あの男は、わたしが、ここに見えないと門まで来て引き返すよ」

「なぜ？」

「なぜって、こんな所へ来た事はないんだから——一人で一人坊^{ひとりぼ}つ

ちになる男なんだから——、ともかくもアーチを潜^{くぐ}らせてしまわないと安心が出来ない」

「いらつしやるんでしようね」

「来るよ、わざわざ行つて頼んだんだから、いやでも来ると約束すると来ずにいられない男だからきつとくるよ」

「御^{おい}厭^やなんですか」

「厭^{いや}つて、なに別に厭^{いや}な事もないんだが、つまりきまりがわるいのさ」

「ホホホ妙ですわね」

きまりのわるいのは自信がないからである。自信がないのは、人が馬鹿にするとと思うからである。中野君はただきまりが悪いからだと云う。細君はただ妙ですわねと思う。この夫婦は自分達のきまりを悪^{わる}るがる事は忘れてゐる。この夫婦の境界^{きょうがい}にある

人は、いくらきまりを悪るがる性分しょうぶんでも、きまりをわるがらずに生涯しょうがいを済ませる事が出来る。

「いらつしやるなら、ここにいて上げる方がいいでしょう」

「来る事は受け合うよ。——いいさ、奥はおやじや何かだいぶいるから」

愛は善人である。善人はその友のために自家の不都合を犠牲にするを憚はばからぬ。夫婦は高柳君のためにアーチの下に待つてゐる。高柳君は来ねばならぬ。

馬車の客、車の客の間に、ただ一人高柳君は蹠踉そうろうとして敵地

に乗り込んで来る。この海のごとく和氣みなぎの漲りたる園遊会——

新夫婦の面おもてに湛たたえたる笑の波に酔うて、われ知らず幸福の同化を享うくる園遊会——行く年をしばらくは春に戻して、のどかな

る日影に、窮陰きゅういんの面まのあたりなるを忘るべき園遊会が高柳君に

とつて敵地である。

富と勢いざおいと得意と満足の跋扈ばつこする所は東西球きゆうを極きわめて高柳君には敵地である。高柳君はアーチの下に立つ新しき夫婦を十歩の遠きに見て、これがわが友であるとはたしかに思わなかった。多少の不都合を犠牲にしてまで、高柳君を待ち受けたる夫婦の眼に高柳君の姿がちらと映じた時、待ち受けたにもかかわらず、待ち受け甲斐がいのある御客とは夫婦共に思わなかった。友誼ゆうぎの三分ぶ一は服装が引き受ける者である。頭のなかで考えた友達と眼の前へ出て来た友達とはだいぶ違う。高柳君の服装はこの日の来客中でもつとも憐あわれなる服装である。愛は贅沢ぜいたくである。美なるもののほかには価値を認めぬ。女はなおさらに価値を認めぬ。夫婦が高柳君と顔を見合せた時、夫婦共「これは」と思った。高柳君が夫婦と顔を見合せた時、同じく「これは」と思った。

世の中は「これは」と思った時、引き返せぬものである。高柳君は蹠踉^{そうろう}として進んでくる。夫婦の胸にはつときざした「これは」は、すぐと愛の光りに姿をかくす。

「やあ、よく来てくれた。あまり遅いから、どうしたかと思つて心配していたところだった」偽^{いつわ}りもない事実である。ただ「これは」と思った事だけを略したまでである。

「早く来ようと思つたが、つい用があつて……」これも事実である。けれどもやはり「これは」が略されている。人間の交際にはいつでも「これは」が略される。略された「これは」が重なると、喧嘩^{けんか}なしの絶交となる。親しき夫婦、親しき朋友^{ほうゆう}が、腹のなかの「これは、これは」でなし崩^{くず}しに愛想^{あいそ}をつかし合つてゐる。

「これが妻^{さい}だ」と引き合わせる。一人坊^{ひとりぼ}つちに美しい妻君を引

き合わせるのは好意より出た罪惡である。愛の光りを浴びたものは、嬉^{うれ}しさがはびこつて、そんな事に頓着^{とんじやく}はない。

何にも云わぬ細君はただしとやかに頭を下げた。高柳君はぼんやりしている。

「さあ、あちらへ——僕もいつしよに行こう」と歩を運^めらす。十間ばかりあるくと、夫婦はすぐ胡麻塩^{ごましお}おやじにつらまつた。

「や、どうもみごとな御庭ですね。こう広くはあるまいと思つてたが——いえ始めてで。おとつさんから時々御招きはあつたが、いつでも折悪しく用事があつて——どうも、よく御手入れが届いて、実に結構ですね……」

と胡麻塩はのべつに述べたてて容易に動かない。ところへまた二三人がやつてくる。

「結構だ」「何坪ですか」「私も年来この辺^{へん}を心掛けておりま

すが」などと新夫婦を取り捲まいてしまふ。高柳君は無然むぜんとして中心をはずれて立っている。

すると向うから、襷たすき掛けの女が駈けて来て、いきなり塩瀬しおぜの五つ紋いつもんをつらまえた。

「さあ、いらつしやい」

「いらつしやいたつて、もうほかで御馳走ごちそうになつちまつたよ」

「ずるいわ、あなたは、他ひとにこれほど馳かけずり廻らせて」

「旨うまいものも、ない癖に」

「あるわよ、あなた。まあいいからいらつしやいてえのに」と

ぐいぐい引つ張る。塩瀬しおぜは羽織が大事だから引かれながら行く、

途端とたんに高柳君に突き当った。塩瀬はちよつと驚ろいて振り向い

たまでは、粗忽そこつをして恐れ入つたと云う面相めんそうをしていたが、高

柳君の顔から服装を見るや否や、急に表情を変えた。

「やあ、こりや」と上からさげすむように云つて、しかも立つて見ている。

「いらつしやいよ。いいからいらつしやいよ。構わないでも、いいからいらつしやいよ」と女は高柳君を後目しりめにかけたなり塩瀬を引つ張つて行く。

高柳君はぽつぽつ歩き出した。若夫婦は遙はるかあなたに遮さへぎられていつしよにはなれぬ。芝生しばふの真中に長い天幕テントを張る。中を覗のぞいて見たら、暗い所に大きな菊の鉢はちがならべてある。今頃こんな菊がまだあるかと思う。白い長い花卉が中心から四方へ数百片延び尽して、延び尽した端はじからまた随意に反そり返りつつ、あらん限りの狂態を演じているのがある。背筋せすじの通った黄ひらな片が中へ中へと抱き合つて、真中に大切なものを守護するごとく、こんもりと丸くなつたのもある。松の鉢も見える。玻璃盤はりばんに堆うずた

かく林檎りんごを盛ったのが、白い卓布たくふの上に鮮あざやかに映る。林檎の頬が、暗きうちにも光っている。蜜柑を盛った大皿もある。傍そばでけられらと笑う声がある。驚ろいて振り向くと、しるくはつとを被かぶった二人の若い男が、二人共相好そうごうを崩くずしている。

「妙だよ。実に」と一人が云う。

「珍だね。全く田舎者いなかものなんだよ」と一人が云う。

高柳君はじつと二人を見た。一人は胸開むねあきの狭い。模様のある
チヨツキ
胴衣を着て、右手の親指を胴衣のぽつけつとへ突き込んだまま肘ひじ
を張っている。一人は細い杖つえに言訳いいわけほどに身をもたせて、護謨ゴム
びき靴の右の爪先つまさきを、豎たてに地に突いて、左足一本で細長いから
だの中心を支たもてている。

「まるで給仕人ウエーターだ」と一本足が云う。

高柳君は自分の事を云うのかと思った。すると色胴衣が

「本当にさ。園遊会に燕尾服えんびふくを着てくるなんて——洋行しないだつてそのくらいな事はわかりそうなものだ」と相鎚あいづちを打っている。向うを見るとなるほど燕尾服がいる。しかも二人かたまつて、何か話をしている。同類相集まると云う訳だろう。高柳君はようやくあれを笑つてゐるのだなと気がついた。しかしなぜ燕尾服が園遊会に適しないかはとうてい想像がつかなかった。

芝生の行き当りに葭簀よしず掛けの踊舞台おどりぶたいがあつて、何かしきりにやつてゐる。正面は紅白の幕で庇ひさしをかこつて、奥には赤い毛氈もうせんを敷いた長い台がある。その上に三味線を抱えた女が三人、抱えないのが二人並んでゐる。弾ひくものと唄うたうものと分業にしたのである。舞台の真中に金紙きんがみの烏帽子えぼしを被かぶつて、真白に顔を塗りたてた女が、棹さおのようなものを持つたり、落したり、舞扇まいおうぎを開いたり、つばめたり、長い赤い袖そでを翳かざしたり、翳さなかった

り、何でもしきりに身振しなをしている。半紙に墨黒々と朝妻船と
かいて貼はり出してあるから、おおかた朝妻船と云うものだろう
と高柳君はしばらく後ろうしの方から小さくなつて眺ながめていた。
舞台を左へ切れると、御影みかげの橋がある。橋の向むこうの築山つきやまの傍手わきて
には松が沢山ある。松の間から暖簾のれんのようなものがちらちら見
える。中で女がききと笑っている。橋を渡りかけた高柳君はま
た引き返した。楽隊が一度に満庭の空氣を動かして起る。
そろそろと天幕テントの所まで帰つて来る。今度は中を覗のぞくのをや
めにした。中は大勢でがやがやしている。入口へ回つて見ると
人で埋うずまつて皿の音がしきりにする。若夫婦はどこにいるか見え
ぬ。

しばらく様子を窺うかがっていると突然万歳と云う声がした。楽隊
の音は消されてしまう。石橋の向うで万歳と云う返事がある。

これは迷子まいごの万歳である。高柳君はのそりと疇違かんちがいをした客のよ
うに天幕のうちに這入はいった。

皿だけ高く差し上げて人と人の間を抜けて来たものがある。

「さあ、御上おあがんなさい。まだあるんだが人が込んでて容易に手が届かない」と云う。高柳君は自分にくれるにとしては目の見当が少し違うと思つたら、後ろうしろの方で「ありがとう」と云う涼しい声がした。十七八の桃色縮緬ももいろちりめんの紋付をきた令嬢が皿をもらつたまま立っている。

傍にいた紳士が、天幕の隅すみから一脚の椅子いすを持って来て、

「さあこの上へ御乗せなさい」と令嬢の前に据すえた。高柳君は一間ばかり左へ進む。天幕の柱に倚よりかかつて洋服と和服が煙草たばこをふかしている。

「葉巻はやめたのかい」

「うん、頭にわるいそうだから——しかしあれを呑みつけると、何だね、紙巻はとうてい呑めないね。どんな好い奴でも駄目だ」
「そりゃ、価段ねだんだけだから——一本三十銭と三銭とは比較にならないからな」

「君は何を呑むのだい」

「これの一つやって見たまえ」と洋服が鰐皮わにがわの煙草入から太い紙巻を出す。

「なるほどエジプシアンか。これは百本五六円するだろう」

「安い割にはうまく呑めるよ」

「そうか——僕も紙巻でも始めようか。これなら日に二十本ずつにしても二十円ぐらいであがるからね」

二十円は高柳君の全収入である。この紳士は高柳君の全収入を煙けむにするつもりである。

高柳君はまた左へ四尺ほど進んだ。二三人話をしている。

「この間ね、野添のぞえが例の人造肥料会社を起すので……」と頭の禿はげた鼻の低い金齒を入れた男が云う。

「うん。ありや当つたね。旨うまくやつたよ」と真四角な色の黒い、煙草入の金具のような顔が云う。

「君も賛成者のうちに名が見えたじやないか」と胡麻塩頭ごましおあたまの最前さいぜん中野君を途中で強奪ごうだつしたおやじが云う。

「それさ」と今度は禿げの番である。「野添が、どうです少し持ってくれませんかと云うから、さようさ、わたしは今回はまあよしでしょうと断わつたのさ。ところが、まあ、そう云わずと、せめて五百株でも、実はもう貴所あなたの名前にしてあるんだからと云うのさ、面倒だからいい加減あいさつに挨拶をして置いたら先生すぐ九州へ立つて行つた。それから二週間ほとして社へ出ると

書記が野添さんの株が大変^{あが}上りました。五十円株が六十五円になりました。合計三万二千五百円になりましたと云うのさ」

「そりや豪勢だ、実は僕も少し持とうと思つてたんだが」と四角が云うと

「ありや實際意外だつた。あんなに、とんとん拍子^{びょうし}にあがろうとは思わなかつた」と胡麻塩^{ごましお}がしきりに胡麻塩頭^かを搔く。

「もう少し踏み込んで沢山僕の名にして置けばよかつた」と禿^{はげ}は三万二千五百円以外に残念がつている。

高柳君は恐る恐る三人の傍^{そば}を通り抜けた。若夫婦に逢^あつて挨拶して早く帰りたいと思つて、見廻わすと一番奥の方に二人は黒いフロックと五色の袖^{そで}に取り巻かれて、なかなか寄りつけそうもない。食卓はようやく人数が減つた。しかし残っている食品はほとんどない。

「近頃は出掛けるかね」と云う声がする。仙台平をずるずる地びたへ引きずって白足袋しろたびに鼠緒ねずおの雪駄せったをかすかに出した三十恰好がっこうの男だ。

「昨日須崎すさきの種田たねだけ家の別荘へ招待されて鴨猟かもりをやった」と五分刈ごぶがりの浅黒いのが答えた。

「鴨にはまだ早いだろう」

「もういいね。十羽ばかり取ったがね。僕が十羽、大谷おおたにが七羽、加瀬かせと山内やまのうちが八羽ずつ」

「じゃ君が一番か」

「いいや、斎藤は十五羽だ」

「へえ」と仙台平は感心している。

同期の卒業生は多いなかに、たった五六人しか見えん。しかもあまり親しくないものばかりである。高柳君は挨拶だけして

別段話もしなかったが、今となつて見ると何だか恋しい心持ちがする。どこぞにおりはせぬかと見廻したが影も見えぬ。ことによると帰つたかも知れぬ。自分も帰ろう。

主客しゅかくは一である。主しゅを離れて客かくなく、客を離れて主はない。吾々が主客の別を立てて物我ぶつがの境きようを判然ぶんぜんと分劃ぶんかくするのは生存上の便宜べんぎである。形を離れて色なく、色を離れて形なき強しいて個別するの便宜、着想を離れて技巧なく技巧を離れて着想なきをしばらく両体となすの便宜と同様である。一たびこの差別を立りつしたる時吾人ごじんは一の迷路に入る。ただ生存は人生の目的なるが故に、生存に便宜なるこの迷路は入る事いよいよ深くして出ずる事いよいよかたきを感じず。独ひとり生存の欲を一刻たりとも擺脫はいだつしたるときにこの迷まよひは破る事が出来る。高柳君はこの欲を刹那せつなも除去し得ざる男である。したがって主客を方寸に一致せしむ

る事のできがたき男である。主は主、客は客としてどこまでも膠着^{こうちやく}するが故に、一たび優勢なる客に逢うとき、八方より無形の太刀^{たち}を揮^{ふる}つて、打ちのめさるるがごとき心地がする。高柳君はこの園遊会において孤軍重圍のうちに陥つたのである。

蹠^{そうろう}跟としてアーチを潜^{くぐ}つた高柳君はまた蹠^{そうろう}跟としてアーチを出^{いで}ざるを得ぬ。遠くから振り返つて見ると青い杉の環^わの奥の方に天幕^{テント}が小さく映つて、幕のなかから、奇麗^{きれい}な着物がかたまつてあらわれて来た。あのなかに若い夫婦も交つてるのであろう。

夫婦の方では高柳をさがしている。

「時に高柳はどうしたろう。御前^{おまえ}あれから逢^あつたかい」

「いいえ。あなたは」

「おれは逢わない」

「もう御歸りになつたんでしょうか」

「そうさ、——しかし帰るなら、ちつとは帰る前に傍そばへ来て話でもしそうなものだ」

「なぜ皆さんのいらつしやる所へ出ていらつしやらないのでしよう」

「損だね、ああ云う人は。あれで一人じややつぱり不愉快なんだ。不愉快なら出てくればいいのになおなお引き込んでしまう。気の毒な男だ」

「せつかく愉快にしてあげようと思って、御招きするのにな」

「今日は格別色がわるかったようだ」

「きつと御病氣ですよ」

「やつぱり一人坊ひとりぼちだから、色が悪いのだよ」

高柳君は往来をあるきながら、ぞつと悪寒おかんを催もよおした。

道也^{どうや}先生長い顔を長くして煤竹^{すすだけ}で囲った丸火桶^{まるひおけ}を擁^{よう}している。
外^{こがらし}を木枯^{こがらし}が吹いて行く。

「あなた」と次の間^まから妻君が出てくる。紬^{つむぎ}の羽織の襟^{えり}が折れていない。

「何だ」とこつちを向く。机の前^{しゅうじつこがらし}におりながら、終日木枯^ふに吹き曝^{さら}されたかのごとくに見える。

「本は売れたのですか」

「まだ売れないよ」

「もう一カ月も立てば百や貳百の金は這^{はい}入る都合だとおつしやつたじゃありませんか」

「うん言つた。言つたには相違ないが、売れない」

「困るじゃござんせんか」

「困るよ。御前おまえよりおれの方が困る。困るから今考えてるんだ」

「だって、あんなに骨を折って、三百枚も出来てるものを——」

「三百枚どころか四百三十五頁ある」

「それで、どうして売れないんでしょう」

「やつぱり不景気なんだろうよ」

「だらうよじゃ困りますわ。どうか出来ないでしうか」

「南溟堂なんめいどうへ持って行つた時には、有名な人の御序文があればと

云うから、それから足立あだちなら大学教授だから、よかろうと思つ

て、足立にたのんだのさ。本も借金と同じ事で保証人がないと

駄目だぜ」

「借金は借りるんだから保証人もいるでしうが——」と妻君頭のなかへ人指ひとさしゆびを入れてぐいぐい搔かく。束髪そくはつが揺れる。道

也はその頭を見ている。

「近頃の本は借金同様だ。信用のないものは連帯責任でないと出版が出来ない」

「本当につまらないわね。あんなに夜遅くまでかかつて」

「そんな事は本屋の知らん事だ」

「本屋は知らないでしょうさ。しかしあなたは御存じでしょう」

「ハハハハ当人は知ってるよ。御前も知ってるだろう」

「知ってるから云うのでさあね」

「言ってくれても信用がないんだから仕方がない」

「それでどうなさるの」

「だから足立の所へ持つて行つたんだよ」

「足立さんが書いてやるとおっしゃって」

「うん、書くような事を云うから置いて来たら、またあとから

書けないって断わつて来た」

「なぜでしょう」

「なぜだか知らない。厭いやなのだろう」

「それであなただけはそのままにして御置きになるんですか」

「うん、書かんのを無理に頼む必要はないさ」

「でもそれじゃ、うちの方が困りますわ。この間御兄おあにいさんに判を押して借りて頂いた御金もう期限が切れるんですから」

「おれもその方を埋うめるつもりでいたんだが——売れないから仕方がない」

「馬鹿馬鹿しいのね。何のために骨を折つたんだか、分りやしない」

道也先生は火桶ひおけのなかの炭団たどんを火箸ひばしの先で突つつきながら「御前から見れば馬鹿馬鹿しいのさ」と云った。妻君はだまつてし

まう。ひゆうひゆうと木枯^{こがらし}が吹く。玄関^{しやうじ}の障子の破れが紙鳶^{たこ}のうなりのように鳴る。

「あなた、いつまでこうしていらつしやるの」と細君^{じゆう}は術^{じゆつ}なげに聞いた。

「いつまでもとも考はない。食えればいつまでこうしていたつていいじゃないか」

「二言目^{ふたことめ}には食えれば食えればとおつしやるが、今こそ、どうにかこうにかして行きますけれども、このぶんで押して行けば今に食べられなくなりますよ」

「そんなに心配するのかい」

細君はむつとした様子である。

「だって、あなたも、あんまり無考^{むかんがえ}じゃござんせんか。楽に暮せる教師の口はみんな断^{ことわ}つておしまいなすつて、そうして何で

も筆で食うと頑固^{がんこ}を御張りになるんですもの」

「その通りだよ。筆で食うつもりなんだよ。御前もそのつもりにするがいい」

「食べるものが食べられれば私だってそのつもりになりますわ。私も女房ですもの、あなたの御好きでおやりになる事をとやかく云うような差し出口はききやあしません」

「それじゃ、それでいいじゃないか」

「だって食べられないんですもの」

「たべられるよ」

「随分ね、あなたも。現に教師をしていた方が楽で、今の方がよっぽど苦しいじゃありませんか。あなたはやっぱり教師の方が御上手なんですよ。書く方は性^{しやう}に合わないんですよ」

「よくそんな事がわかるな」

細君は俯向うつむいて、袂たもとから鼻紙を出してちいんと鼻をかんだ。

「私ばかりじゃ、ありませんわ。御兄おにいさんだって、そうおつしやるじゃありませんか」

「御前は兄の云う事をそう信用しているのか」

「信用したっていいじゃありませんか、御兄さんですもの、そうして、あんなに立派にしていraftしやるんですもの」

「そうか」と云ったなり道也先生は火鉢ひばちの灰を丁寧に搔かきならす。中から二寸釘くぎが灰だらけになって出る。道也先生は、曲つた真鍮しんちゆうの火箸ひばしで二寸釘をつまみながら、片手に障子をあけて、ほいと庭先へ抛ほうり出した。

庭には何にもない。芭蕉ばしやうがずたずたに切れて、茶色ながら立往生りたせいしやうをしている。地面は皮が剥むけて、蓆むしろを捲まきかけたように反そつくり返っている。道也先生は庭の面おもてを眺ながめながら

「だいぶ吹いてるな」と独語ひとりごとのように云った。

「もう一遍足立さんに願つて御覧になつたらどうでしょう」

「厭いやなものに頼んだつて仕方がないさ」

「あなたは、それだから困るのね。どうせ、あんな、豪い方えらかたになれば、すぐ、おいそれと書いて下さる事はないでしょうから……」

「あんな豪い方つて——足立がかい」

「そりや、あなたも豪いでしようさ——しかし向むかはともかくも
大学校の先生ですから頭を下げたつて損はないでしょう」

「そうか、それじゃおおせに従つて、もう一返頼いつぺんんで見ようよ。

——時に何時かな。や、大変だ、ちよつと社まで行つて、校正
をしてこなければならぬ。袴はかまを出してくれ」

道也先生は例のごとく茶の千筋せんすじの嘉平治を木枯かへいじにぺらつかす
べく一着して飄然ひょうぜんと出て行つた。居間の柱時計がぼんぼんと二

時を打つ。

思う事積んでは崩くずす炭火すみびかなと云う句があるが、細君は恐らく知るまい。細君は道也先生の丸火桶まるひおけの前へ来て、火桶の中を、丸く掻きならしている。丸い火桶だから丸く掻きならす。角な火桶なら角に掻きならすだろう。女は与えられたものを正しいものと考え、そのなかで差し当りのないように暮らすのを至善しぜんと心得ている。女は六角の火桶を与えられても、八角の火鉢を与えられても、六角にまた八角に灰を掻きならす。それより以上の見識は持たぬ。

立つてもおらぬ、坐つてもおらぬ、細君の腰は宙に浮いて、膝頭ひざがしらは火桶の縁ふちにつきつけられている。坐すわるには所を得ない、立つては考えられない。細君の姿勢は中途半把ちゆうとはんぱで、細君の心も中途半把である。

考えると嫁に來たのは間違っている。娘のうちの方が、いくら氣樂で面白かったか知れぬ。人の女房はこんなものと、誰か教えてくれたら、來ぬ前によすはずであつた。親でさえ、あれほどに親切を尽してくれたのだから、二世にせの契りちぎと掟おきてにさえ出ている夫は、二重にも三重にも可愛がつてくれるだろう、また可愛がつて下さるよと受合うちあわれて、住み馴れた家いえを今日限りと出た。今日限りと出た家うちへ二度とは歸られない。歸ろうと思つてもおとつさんもお母つかさんも亡くなつてしまつた。可愛がられる目的あてははずれて、可愛がつてくれる人はもうこの世にいない。細君は赤い炭団たどんの、灰の皮を剥むいて、火箸ひばしの先で突つつき始めた。炭火なら崩くずしても積む事が出来る。突つついた炭団は壊こわれたぎり、丸い元の姿には歸らぬ。細君はこの理を心得ているだろうか。しきりに突ついている。

今から考えて見ると嫁に來た時の覺悟が間違つてゐる。自分が嫁に來たのは自分のために來たのである。夫のためと云う考はすこしも持たなかつた。吾が身が幸福になりたいばかりに祝言しゅうげんの盃さかずきもした。父、母もそのつもりで高砂たかさごを聴いていたに違ない。思う事はみんなはずれた。この頃の模様を父、母に話したら定めし道也はけしからぬと怒おこるであらう。自分も腹の中では怒つてゐる。

道也は夫の世話をするのが女房の役だと済ましてゐるらしい。それはこつちで云いたい事である。女は弱いもの、年の足らぬもの、したがつて夫の世話を受くべきものである。夫を世話する以上に、夫から世話されるべきものである。だから夫に自分の云う通りになれと云う。夫はけつして聞き入れた事がない。家庭しょうがいの生涯はむしろ女房の生涯である。道也は夫の生涯と心得

ているらしい。それだから治おさまらない。世間の夫は皆道也のようなものかしらん。みんな道也のようだとすれば、この先結婚をする女はだんだん減るだろう。減らないところで見るとほかの旦那様は旦那様らしくしているに違ない。広い世界に自分一人がこんな思おもいをしているかと思がつくと生涯の不幸である。どうせ嫁に來たからには出る訳わけには行かぬ。しかし連れ添う夫がこんなでは、臨終まで本当の妻と云う心持ちが起らぬ。これはどうかせねばならぬ。どうにかして夫を自分の考え通りの夫にしないで生きている甲斐かいがない。——細君はこう思案しながら、火鉢をいじくつている。風が枯芭蕉かればしやうを吹き倒すほど鳴る。表に案内がある。寒そうな顔を玄関の障子から出すと、道也の兄が立っている。細君は「おや」と云った。

道也の兄は会社の役員である。その会社の社長は中野君のお

やじである。長い二重廻しを玄関へ脱いで座敷へ這入^{はい}ってくる。
「だいぶ吹きますね」と薄い更紗^{さらさ}の上へ坐つて抜け上がった額^{ひたい}を逆^{さか}に撫^なでる。

「御寒いのによく」

「ええ、今日は社の方が早く引けたものだから……」

「今御帰り掛けですか」

「いえ、いったんうちへ帰つてね。それから出直して来ました。

どうも洋服だと坐つてるのが窮屈^{こつこつ}で……」

兄は糸織の小袖^{こそで}に鉄御納戸^{てつおなんど}の博多^{はかた}の羽織を着ている。

「今日は——留守ですか」

「はあ、たった今しがた出ました。おっつけ帰りましょう。どうぞ御緩^{ごゆつ}くり」と例の火鉢を出す。

「もう御構^{おかまい}なさるな。——どうもなかなか寒い」と手を翳^{かざ}す。

「だんだん押し詰りましてさぞ御忙がしゆう、いらつしやいましょう」

「へ、ありがとう。毎年暮になると大頭痛、ハハハハ」と笑つた。世の中の人はおかしい時ばかり笑うものではない。

「でも御忙がしいのは結構で……」

「え、まあ、どうか、こうかやつてるんです。——時に道也はやはり不相変あいかわらずですか」

「ありがとう。この方はただ忙がしいばかりで……」

「結構でないかね。ハハハハ。どうも困つた男ですねえ、御政おまささん。あれほど訳わけがわからないとまでは思わなかつたが」

「どうも御心配ばかり懸かけまして、私もいろいろ申しますが、女の云う事だと思つてちつとも取り上げませんので、まことに困り切ります」

「そうでしょう、私の云う事だつて聞かないんだから。——わたしも傍そばにいるとつい気になるから、ついとやかく云いたくなつてね」

「ごもつともでございますとも。みんな当人のためにおつしやつて下さる事ですから……」

「田舎いなかにいりや、それまでですが、こつちにこうしていると、当人の氣にいつても、いらなくつても、やっぱり兄の義務でね。つい云いたくなるんです。——するとちつとも寄りつかない。全く変人だね。おとなしくして教師をしていりやそれまでの事を、どこへ行つても衝突して……」

「あれが全く心配で、私もあのためには、どんなに苦勞したか分りません」

「そうでしょうとも。わたしも、そりやよく御察し申している

んです」

「ありがとうございます。いろいろ御厄介ごやつかいにばかりなりまして」「東京へ来てからでも、こんなくだらん事をしないでも、どうにでも成るんでさあ。それをせつかく云つてやると、まるで取り合わない。取り合わないでもいいから、自分だけ立派にやつて行けばいい」

「それを私も申すのでござんすけれども」

「いざとなると、やつぱりどうかしてくれと云うんでしよう」

「まことに御気の毒さまで……」

「いえ、あなたに何も云うつもりはない。当人がさ。まるで無鉄砲ですからね。大学を卒業して七八年にもなつて筆耕ひつこうの真似まねをしているものが、どこの国にいるものですか。あれの友達の足立なんて人は大学の先生になつて立派にしているじゃありません

せんか」

「自分だけはあれでなかなかえらいつもりでおりますから」

「ハハハハえらいつもりだつて。いくら一人でえらがったつて、人が相手にしなくつちやしようがない」

「近頃は少しどうかしているんじゃないかと思ひます」

「何とも云えませんね。——何でもしきりに金持やなにかを攻撃するそうじゃありませんか。馬鹿ですねえ。そんな事をしたつてどこが面白い。一文にやならず、人からは擯斥ひんせきされる。つまり自分の錆さびになるばかりでさあ」

「少しは人の云う事でも聞いてくれるといいんですけれども」

「しまいにや人にまで迷惑をかける。——実はね、きよう社で

もつて赤面しちまつたんですがね。課長が私わたしを呼んで聞けば君

の弟だそうだが、あの白井道也とか云う男は無暗むやみに不穩な言論

をして富豪などを攻撃する。よくない事だ。ちつと君から注意したらよからうって、さんざん叱られたんです」

「まあどうも。どうしてそんな事が知れましたんでしよう」

「そりや、会社なんてものは、それぞれ探偵が届きますからね」
「へえ」

「なに道也なんぞが、何をかいたって、あんな地位のないものに世間が取り合う氣遣きづかいはないが、課長からそう云われて見ると、放ほうつて置けませんからね」

「ごもつともで」

「それで実は今日は相談に来たんですがね」

「生憎あいにく出まして」

「なに当人はいない方がかえっていい。あなたと相談さえすればいい。——で、わたしも今途中でだんだん考えて来たんだが、

どうしたものでしょう」

「あなたから、とくと異見いけんでもしていただいて、また教師にでも奉職したら、どんなものでございましょう」

「そうなければいいですとも。あなたも仕合せしあわせだし、わたしも安心だ。——しかし異見いけんでおいそれと、云う通りになる男じゃありませんよ」

「そうでござんすね。あの様子じゃ、とても駄目だめでございましょうか」

「わたしの鑑定じゃ、とうてい駄目だ。——それでここに一つの策があるんだが、どうでしょう当人の方から雑誌や新聞をやめて、教師になりたいと云う気を起させるようにするのは」

「そうなれば私は実にありがたいのですが、どうしたら、そううま旨い具合に参りましょう」

「あのこの間中^{あいだじゅう}当人がしきりに書いていた本はどうなりまして」

「まだそのままになっております」

「まだ売れないですか」

「売れるどころじゃございません。どの本屋もみんな断わりますそうで」

「そう。それが売れなけりやかえって結構だ」

「え？」

「売れない方がいいんですよ。——で、せんだってわたしが周旋した百円の期限はもうじきでしょう」

「たしかこの月の十五日だと思えます」

「今日が十一日だから。十二、十三、十四、十五、ともう四日^{よっか}ですね」

「ええ」

「あの方を手厳てきびしく催促させるのです。——実はあなただから、今打ち明けて御話するが、あれは、わたしが印を押している体たいにはなっているが本当はわたしが融通したのです。——そうしないと当人が安心していけないから。——それであの方を今云う通り責める——何かほかに工面くめんの出来る所がありますか」

「いいえ、ちつともございません」

「じゃ大丈夫、その方でだんだん責めて行く。——いえ、わたしは黙って見ている。証文の上の貸手が催促に来るのです。あなたも済すましていなくっちゃいけません。——何を云つても冷淡に済すまましていなくっちゃいけません。けっしてこちらから、一言も云わないのです。——それで当人いくら頑固がんこだって苦しいから、また、わたしの方へ頭を下げて来る。いえ来なけりやなら

ないです。その、頭を下げて来た時に、取って抑おさえるのです。
いいですか。そうたよつて来るなら、おれの云う事を聞くが
いい。聞かなければおれは構わん。と云いやあ、向むこでも否いやとは云
われんです。そこでわたしが、御政おまささんだつて、あんなに苦労
してやつている。雑誌なんかで法螺ほらばかり吹き立てていたつて
始まらない、これから性根しょうねを入れかえて、もつと着実な世間に
害のないような職業をやれ、教師になる気なら心当りを奔走ほんそう
てやろう、と持もち懸かけるのですね。——そうすればきつと我々
の思わく通りになると思うが、どうでしょう」

「そうなれば私はどんなに安心が出来るか知れません」

「やつて見ましょうか」

「何分宜なにぶんよろしく願います」

「じゃ、それはきまつたと。そこでもう一つあるんですがね。

今日社の帰りがけに、神田を通つたら清輝館せいきかんの前に、大きな広告があつて、わたしは吃驚びっくりさせられましたよ」

「何の広告でござんす」

「演説の広告なんです。——演説の広告がいいが道也が演説をやるんですぜ」

「へえ、ちつとも存じませんでした」

「それで題が大きいから面白い、現代の青年に告ぐと云うんです。まあ何の事やら、あんなものの云う事を聞きにくる青年もなさそうじゃありませんか。しかし剣呑けんおんですよ。やけになつて何を云うか分らないから。わたしも課長から忠告された矢先だから、すぐ社へ電話をかけて置いたから、まあ好いいですが、何なら、やらせたくないものですね」

「何の演説をやるつもりでござんしょう。そんな事をやるとま

た人様^{ひとさま}に御迷惑がかりましようね」

「どうせまた過激な事でも云うのですよ。無事に済めばいいが、つまらない事を云おうものなら取って返しがつかないからね。——どうしてもやめさせなくっちゃ、いけないね」

「どうしたらやめるでござんしょう」

「これもよせつたつて、頑固^{がんこ}だから、よす氣遣^{きづかい}はない。やつぱり欺^{だま}すより仕方がないでしょう」

「どうして欺したらいいでしょう」

「そうさ。あした時刻にわたしが急用で逢^あいたいからつて使をよこして見ましようか」

「そうでござんすね。それで、あなたの方へ参るようだと宜^{よろ}しゅうございますが……」

「聞かないかも知れませんか。聞かなければそれまでさ」

初冬はつふゆの日はもう暗くなりかけた。道也先生は風のなかを帰つてくる。

十一

今日もまた風が吹く。汁気しるけのあるものをことごとく乾鮭からさけにするつもりで吹く。

「御兄おあにいさんの所から御使です」と細君が封書を出す。道也は坐つたまま、体たいをそらして受け取つた。

「待つてゐるかい」

「ええ」

道也は封を切つて手紙を読み下す。やがて、終りから巻き返して、再び状袋のなかへ収めた。何にも云わない。

「何か急用でもござんすか」

道也は「うん」と云いながら、墨を磨^すつて、何かさらさらと返事を認^{したた}めている。

「何の御用ですか」

「ええ？　ちよつと待つた。書いてしまうから」

返事はわずか五六行である。宛名^{あてな}をかいて、「これを」と出す。細君は下女を呼んで渡してやる。自分は動かない。

「何の御用なんですか」

「何の用かわからない。ただ、用があるから、すぐ来てくれとかいてある」

「いらつしやるでしょう」

「おれは行かれない。なんならお前行つて見てくれ」

「私が？　私は駄目ですわ」

「なぜ」

「だって女ですもの」

「女でも行かないよりいいだろう」

「だって。あなたに來いと書いてあるんでしょ」

「おれは行かないもの」

「どうして？」

「これから出掛けなくっちゃならん」

「雑誌の方なら、一日ぐらい御休みになつてもいいでしょ」

「編輯へんしゅうならいいが、今日は演説をやらなくっちゃならん」

「演説を？ あなたがですか？」

「そうよ、おれがやるのさ。そんなに驚ろく事はなからう」

「こんなに風が吹くのに、よしになさればいいのに」

「ハハハハ風が吹いてやめるような演説なら始めからやりやし

ない」

「ですけれども滅多めったな事はなさらない方がよござんすよ」

「滅多な事とは。何がさ」

「いいえね。あんまり演説なんかなさらない方が、あなたの得とくだと云うんです」

「なに得な事があるものか」

「あとが困るかも知れないと申すのです」

「妙な事を云うね御前は。——演説をしちゃいけないと誰か云つたのかね」

「誰がそんな事を云うものですか。——云いやしません、御兄おあにいさんからこうやって、急用だつて、御使が来ているんですから行つて上げなくつては義理がわるいじゃありませんか」

「それじゃ演説をやめなくつちやならない」

「急に差支さしつかえが出来たつて断わつたらいいでしょう」

「今さらそんな不義理が出来るものか」

「では御兄さんの方へは不義理をなすつても、いいとおつしやるんですか」

「いいとは云わない。しかし演説会の方は前からの約束で——それに今日の演説はただの演説ではない。人を救うための演説だよ」

「人を救うつて、誰を救うのです」

「社のもので、この間の電車事件を煽動せんどうしたと云う嫌疑けんぎで引つ張られたものがある。——ところがその家族が非常な惨状おちいに陥つて見るに忍びないから、演説会をしてその収入をそちらへ廻してやる計画なんだよ」

「そんな人の家族を救うのは結構な事に相違ないでしょうが、

社会主義だなんて間違えられるとあとが困りますから……」

「間違えたって構わないさ。国家主義も社会主義もあるものか、ただ正しい道がいいのさ」

「だって、もしあなたが、その人のようになったとして御覧なさい。私はやつぱり、その人の奥さん同様な、ひどい目に逢わなけりやならないでしょう。人を御救いなさるのも結構ですが、ちつとは私の事も考えて、やって下さらなくっちゃ、あんまりですわ」

道也先生はしばらく沈吟ちんぎんしていたが、やがて、机の前を立ちながら「そんな事はないよ。そんな馬鹿な事はないよ。徳川政府の時代じゃあるまいし」と云った。

例の袴はかまを突っかけると支度したくは一分たたぬうちに出来上った。玄関へ出る。外はいまだに強く吹いている。道也先生の姿は風

の中に消えた。

清輝館せいきかんの演説会はこの風の中に開かれる。

講演者は四名、聴衆は三百名足らずである。書生が多い。その中に文学士高柳周作がいる。彼はこの風の中を襟巻えりまきに顔を包んで咳せきをしながらやって来た。十銭の入場料を払って、二階に上あがった時は、広い会場はまばらに席をあましてむしろ寂寞せきばくの感があつた。彼は南側のなるべく暖かそうな所に席をとつた。演説はすでに始まつている。

「……文士保護は独立しがたき文士の言う事である。保護とは貴族的時代に云うべき言葉で、個人平等の世にこれを云々するうんぬんのは恥辱きよくの極である。退いて保護を受くるより進んで自己に適當なる租税を天下から払わしむべきである」と云つたと思つたら、引き込んだ。聴衆は喝采かつさいする。隣りに薩摩絣さつまがすりの羽織を着た

書生がいて話している。

「今のが、黒田東陽か」
くろだとうよう

「うん」

「妙な顔だな。もつと話せる顔かと思った」

「保護を受けたら、もう少し顔らしくなるだろう」

高柳君は二人を見た。二人も高柳君を見た。

「おい」

「何だ」

「いやに睨にらめるじゃねえか」

「おっかねえ」

「こんだ誰の番だ。——見ろ見ろ出て来た」

「いやに、ひよろ長いな。この風にどうして出て来たろう」

ひよろながい道也先生は綿服めんぷくのまま壇上にあらわれた。かれ

はこの風の中を金釘のごとく直立して来たのである。から風に吹き曝さらされたる彼は、からからの古瓢箪ふるびようたんのごとくに見える。聴衆は一度に手をたたく。手をたたくのは必ずしも喝采の意と解すべからざる場合がある。独り高柳君のみは肅然しゆくぜんとして襟えりを正した。

「自己は過去と未来の連鎖れんさである」

道也先生の冒頭は突如として来た。聴衆はちよつと不意撃ふいうちを食つた。こんな演説の始め方はない。

「過去を未来に送り込むものを旧派と云い、未来を過去より救うものを新派と云うのであります」

聴衆はいよいよ惑まどつた。三百の聴衆のうちには、道也先生をひやかす目的をもつて入場しているものがある。彼らに一寸すんの隙すきでも与えれば道也先生は壇上ちやうじやうに嘲殺ちやくされねばならぬ。角力すもうは

呼吸こきゅうである。呼吸を計らんでひやかせばかえつて自分が放り出ほうしゅされるばかりである。彼らは蛇のごとく鎌首かまくびを持ち上げて待構まちかまえている。道也先生の眼中には道の一字がある。

「自己のうちに過去なしと云うものは、われに父母ふぼなしと云うがごとく、自己のうちに未来なしと云うものは、われに子を生む能力なしという了一般である。わが立脚地はここにおいて明瞭めいりょうである。われは父母ふぼのために存在するか、われは子のために存在するか、あるいはわれそのものを樹立せんがために存在するか、吾人ごじん生存の意義はこの三者の一を離るる事が出来るのである」

聴衆は依然として、だまつている。あるいは煙けむに捲まかれたのかも知れない。高柳君はなるほどと聴いている。

「文芸復興はだい大なる意味において父母のために存在したる大時

期である。十八世紀末のゴシック復活もまた大なる意味において父母のために存在したる小時期である。同時にスコット一派の浪漫派を生まんがために存在した時期である。すなわち子孫のために存在したる時期である。自己を樹立せんがために存在したる時期の好例はエリザベス朝の文学である。個人について云えばイブセンである。メレジスである。ニイチエである。ブラウニングである。耶蘇教徒は基督ヤソキヨウト キリストのために存在している。基督は古えいにしの人である。だから耶蘇教徒は父のために存在している。儒者じゆしやは孔子こうしのために生きてゐる。孔子も昔えいにしの人である。だから儒者は父のために生きてゐる。……」

「もうわかつた」と叫ぶものがある。

「なかなかわかりません」と道也先生が云う。聴衆はどつと笑つた。

「^{あわせ} 衿は単衣のために存在するですか、綿入のために存在するですか。または衿自身のために存在するですか」と云つて、一応聴衆を見廻した。笑うにはあまり、奇警である。慎^{つつし}しむにはあまり飄^{ひょう}きんである。聴衆は迷うた。

「六^むずかしい問題じゃ、わたしにもわからん」と済ました顔で云つてしまう。聴衆はまた笑つた。

「それはわからんでも差^さ支^しない。しかし吾^{われわれ}々は何のために存在しているか？ これは知らなくてはならん。明治は四十年立つた。四十年は短かくはない。明治の事業はこれで一段落を告げた……」

「ノー、ノー」と云うものがある。

「どこかでノー、ノーと云う声がする。わたしはその人に賛成である。そう云う人があるだろうと思つて待つていたのである」

聴衆はまた笑った。

「いや本当に待っていたのである」

聴衆は三たび^{とき}鬨を揚げた。

^{わたし}

「私は四十年の歳月を短かくはないと申した。なるほど住んで見れば長い。しかし明治以外の人から見たらやはり長いだろうか。望遠鏡の眼鏡は一寸の直径である。しかし愛宕山^{あたごやま}から見ると品川の沖がこの一寸のなかに這入^{はい}ってしまう。明治の四十年を長いと云うものは明治のなかに齷齪^{あくせく}しているものの云う事である。後世から見ればずっと縮まってしまう。ずっと遠くから見ると一弾指^{いちだんし}の間に過ぎん。——一弾指の間に何が出来ると道也はテーブルの上をとんと敲^{たた}いた。聴衆はちよつと驚ろいた。「政治家は一大事業をしたつもりでいる。学者も一大事業をしたつもりでいる。実業家も軍人もみんな一大事業をしたつもり

でいる。したつもりでいるがそれは自分のつもりである。明治四十年の天地に首を突き込んでゐるから、したつもりになるのである。——一弾指の間に何が出来る」

今度は誰も笑わなかった。

「世の中の人云うている。明治も四十年になる、まだ沙翁さおうが出ない、まだゲーテが出ない。四十年を長いと思えばこそ、そんな愚痴ぐちが出る。一弾指の間に何が出る」

「もうでるぞ」と叫んだものがある。

「もうでるかも知れん。しかし今までに出ておらん事は確かである。——一言にして云えば」と句を切った。満場はしんとしている。

「明治四十年の日月じつげつは、明治開化の初期である。さらに語ごを換かえてこれを説明すれば今日の吾人ごじんは過去もを有たぬ開化のうちに

生息している。したがって吾人は過去を伝うべきために生れたのではない。——時は昼夜ちゅうやを捨てず流れる。過去のない時代はない。——諸君誤解してはなりません。吾人は無論過去を有している。しかしその過去は老耄ろうもうした過去か、幼稚な過去である。則すなはとるに足るべき過去は何にもない。明治の四十年は先例のない四十年である」

聴衆のうちにそうかなあと云う顔をしている者がある。

「先例のない社会に生れたものほど自由なものはない。余は諸君がこの先例のない社会に生れたのを深く賀するものである」

「ひや、ひや」と云う声しよしよが所々に起る。

「そう早合点はやがてんに賛成されては困る。先例のない社会に生れたものは、自から先例を作らねばならぬ。束縛のない自由を享うけるものは、すでに自由のために束縛されている。この自由をいか

に使いこなすかは諸君の権利であると同時に大なる責任である。諸君。偉大なる理想を有せざる人の自由は墮落であります」

言い切った道也先生は、両手を机の上に置いて満場を見廻した。雷が落ちたような気合である。

「個人について論じてもわかる。過去を顧みる人は半白の老人である。少壮の人に顧みるべき過去はないはずである。前途に大なる希望を抱くものは過去を顧みて恋々たる必要がないのである。——吾人が今日生きている時代は少壮の時代である。過去を顧みるほどに老い込んだ時代ではない。政治に伊藤侯や山県侯を顧みる時代ではない。実業に渋沢男や岩崎男を顧みる時代ではない。……」

「大気燄」と評したのは高柳君の隣りにいた薩摩拵である。高柳君はむつとした。

「文学に紅葉氏一葉氏を顧みる時代ではない。これらの人々は諸君の先例になるがために生きたのではない。諸君を生むために生きたのである。最前さいぜんの言葉を用いればこれらの人々は未来のために生きたのである。子のために存在したのである。しかして諸君は自己のために存在するのである。——およそ一時代にあつて初期の人は子のために生きる覚悟をせねばならぬ。中期の人は自己のために生きる決心が出来ねばならぬ。後期の人は父のために生きるあきらめをつけなければならぬ。明治は四十年立つた。まず初期と見て差支さしつかえなからう。すると現代の青年たる諸君は大に自己おおいを發展して中期をかたちづくらねばならぬ。後ろを顧うしみる必要なく、前を氣遣きづかう必要もなく、ただ自我を思おもひのままに發展し得る地位に立つ諸君は、人生の最大愉快を極きわむるものである」

満場は何となくどよめき渡つた。

「なぜ初期のものが先例にならん？

初期はもつとも不秩序の

時代である。偶然の跋扈ばつこする時代である。

僥倖ぎやうこういの勢を得る時代

である。

初期の時代において名を揚げあたるもの、家を起したる

もの、財を積みたるもの、事業をなしたるものは必ずしも自己

の力量に由よつて成功したとは云われぬ。自己の力量によらずし

て成功するは士のもつとも恥辱とするところである。中期のも

のはこの点において遙はるかに初期の人々よりも幸福である。事を

成すのが困難であるから幸福である。困難にもかかわらず僥倖

が少ないから幸福である。困難にもかかわらず力量しだいで思

うところへ行けるほどの余裕があり、発展の道があるから幸福

である。後期に至るとかたまってしまふ。ただ前代を祖述そじゆつする

よりほかに身動きがとれぬ。身動きがとれなくなつて、人間が

腐った時、また波瀾はらんが起る。起らねば化石するよりほかにしようがない。化石するのがいやだから、自みづから波瀾を起すのである。これを革命と云うのである。

「以上は明治の天下にあつて諸君の地位を説明したのである。かかる愉快な地位に立つ諸君はこの愉快に相当する理想を養わねばならん」

道也先生はここにおいて一転語いつてんごを下した。聴衆は別にひやかす気もなくなつたと見える。黙っている。

「理想は魂である。魂は形がないからわからない。ただ人の魂の、行為に発現するところを見て髣髴ほうふつするに過ぎん。惜しいかな現代の青年はこれを髣髴することが出来ん。これを過去に求めてもない、これを現代に求めてはなおさらない。諸君は家庭に在あつて父母を理想とする事が出来ますか」

あるものは不平な顔をした。しかしだまっている。

「学校に在つて教師を理想とする事が出来ますか」

「ノー、ノー」

「社会に在つて紳士を理想とする事が出来ますか」

「ノー、ノー」

「事実上諸君は理想をもつておらん。家に在つては父母を軽蔑けいべつし、学校に在つては教師を軽蔑し、社会に出でては紳士を軽蔑している。これらを軽蔑し得るのは見識である。しかしこれらを軽蔑し得るためには自己により大なる理想だいがなくてはならん。自己に何らの理想なくして他を軽蔑するのは墮落である。現代の青年は滔々とうとうとして日に墮落しつつある」

聴衆は少しく色めいた。「失敬な」とつぶやくものがある。道也先生は昂然こうぜんとして壇下を睥睨へいげいしている。

「英国風を鼓吹^{こすい}して憚^{はば}からぬものがある。気の毒な事である。己^{おの}れに理想のないのを明かに暴露^{ばくろ}している。日本の青年は滔々として墮落するにもかかわらず、いまだここまでは墮落せんと思う。すべての理想は自己の魂である。うちより出^{いで}ねばならぬ。奴隸の頭脳に雄大な理想の宿りようがない。西洋の理想に圧倒せられて眼がくらむ日本人はある程度において皆奴隸である。奴隸をもつて甘んずるのみならず、争つて奴隸たらんとするものに何らの理想が脳裏^{のうり}に醗酵^{はっこう}し得る道理があろう。

「諸君。理想は諸君の内部から湧^わき出なければならぬ。諸君の学問見識が諸君の血となり肉となりついに諸君の魂となつた時に諸君の理想は出来上るのである。付焼刃^{つけやきば}は何にもならない」

道也先生はひやかされるなら、ひやかして見ろと云わぬばかりに片手の拳骨^{げんこつ}をテーブルの上に乗せて、立っている。汚ない

黒木綿の羽織に、べんべらの袴はかまは最前さいぜんほどに目立たぬ。風の音がごうと鳴る。

「理想のあるものは歩くべき道を知っている。大なる理想のあるものは大なる道がある。迷子まいごとは違う。どうあつてもこの道があるかねばやまぬ。迷いたくても迷えんのである。魂がこちらこちらと教えるからである。

「諸君のうちには、どこまで歩くつもりだと聞くものがあるかも知れぬ。知れた事である。行ける所まで行くのが人生である。誰しも自分の寿命を知ってるものはない。自分に知れない寿命は他人にはなおさらわからない。医者在家業にする専門家でも人間の寿命を勘定する訳には行かぬ。自分が何歳まで生きるかは、生きたあとで始めて言うべき事である。八十歳まで生きたと云う事は八十歳まで生きた事実が証拠立ててくれねばならん。

たとい八十歳まで生きる自信があつて、その自信通りになる事が明瞭であるにしても、現に生きたと云う事実がない以上は誰も信ずるものはない。したがつて言うべきものでない。理想の黙示を受けて行くべき道を行くのもその通りである。自己がどれほどに自己の理想を現実にし得るかは自己自身にさえ計られん。過去がこうであるから、未来もこうであろうぞと臆測するのは、今まで生きていたから、これから生きるだろうと速断するようなものである。一種の山である。成功を目的にして人生の街頭に立つものはすべて山師である」

高柳君の隣りにいた薩摩緋は妙な顔をした。

「社会は修羅場である。文明の社会は血を見ぬ修羅場である。四十年前の志士は生死の間に出入して維新の大業を成就した。諸君の冒すべき危険は彼らの危険より恐ろしいかも知れぬ。血

を見ぬ修羅場は砲声剣光の修羅場よりも、より深刻に、より悲惨である。諸君は覚悟をせねばならぬ。勤王の志士以上の覚悟をせねばならぬ。斃^{たお}るる覚悟をせねばならぬ。太平の天地だと安心して、拱手^{きょうしゅ}して成功を冀^{こいねが}う輩^{はい}は、行くべき道に躓^{つまず}いて非業^{ひごう}に死したる失敗の児^こよりも、人間の価値は遥^{はる}かに乏しいのである。

「諸君は道を行かんがために、道を遮^{さへ}ぎるものを追わねばならん。彼らと戦うときに始めて、わが生涯^{しょうが}の内生命^{ないせいめい}に、勤王の諸士があえてしたる以上の煩悶^{はんもん}と辛惨^{しんさん}とを見出し得るのである。

——今日は風が吹く。昨日^{きのう}も風が吹いた。この頃の天候は不穏^{ふおん}である。しかし胸裏^{きょうり}の不穏はこんなものではない」

道也先生は、がたつく硝子窓^{がらすまど}を通して、往来の方を見た。折から一陣の風が、会积^{えしやく}なく往来の砂を捲^まき上げて、屋^やの棟^{むね}に突

き当つて、虚空^{こくう}を高く逃^{のが}れて行つた。

「諸君。諸君のどれほどに剛健なるかは、わたしには分らん。諸君自身にも知れぬ。ただ天下後世が証拠^{たいどう}だてるのみである。理想の大道^{たいどう}を行き尽して、途上^{たいじやう}に斃^{がてん}るる刹那^{せつな}に、わが過去を一瞥^{いちべつ}のうちに縮め得て始めて合点^{がてん}が行くのである。諸君は諸君の事業そのものに由^よつて伝えられねばならぬ。単に諸君の名に由つて伝えられんとするは軽薄である」

高柳君は何となくきまりがわるかつた。道也の輝やく眼が自分^{こそ}の方に注いでいるように思^{おも}われる。

「理想は人によつて違ふ。吾々は学問をする。学問をするものの理想は何であろう」

聴衆^{もくねん}は默然として応ずるものがない。

「学問をするものの理想は何であろうとも——金でない事だけ

はたしかである」

五六カ所に笑声が起る。道也先生の裕福ゆうふくならぬ事はその服装を見たものの心から取り除のけられぬ事実である。道也先生は羽織のゆきを左右の手に引つ張りながら、まず徐ろおもむにわが右の袖そでを見た。次に眼を転じてまた徐ろにわが左の袖を見た。黒木綿くろもめんの織目のなかに砂がいつぱいたまっている。

「随分きたない」と落ちつき払って云った。

笑声しょうせいが満場に起る。これはひやかしの笑声ではない。道也先生はひやかしの笑声を好意の笑声で揉もみ潰つぶしたのである。

「せんだって学問を専門にする人が来て、私も妻わたしをもううて子が出来た。これから金を溜ためねばならぬ。是非共子供に立派な教育をさせるだけは今のうちに貯蓄して置かねばならぬ。しかしどうしたら貯蓄が出来るでしょうかと聞いた。

「どうしたら学問で金がとれるだろうと云う質問ほど馬鹿氣た事はない。学問は学者になるものである。金になるものではない。学問をして金をとる工夫くふうを考えるのは北極へ行つて虎狩をするようなものである」

満場はまたちよつとどよめいた。

「一般の世人は労力と金の關係について大なる誤謬ごびゅうを有している。彼らは相應の学問をすれば相應の金がとれる見込のあるものだと思ふ。そんな条理は成立する訳がない。学問は金に遠ざかる器械である。金がほしければ金を目的にする実業家とか商賈人になるがいい。学者と町人とはまるで別途の人間であつて、学者が金を予期して学問をするのは、町人が学問を目的にして丁稚でっちに住み込むようなものである」

「そうかなあ」と突飛とつびな声を出す奴やつがいる。聴衆はどつと笑つ

た。道也先生は平然として笑^{わらい}のしずまるのを待っている。

「だから学問のことは学者に聞かなければならん。金が欲しければ町人の所へ持つて行くよりほかに致し方はない」

「金が欲しい」とまぜかえす奴が出る。誰だかわからない。道也先生は「欲しいでしょう」と云ったぎり進行する。

「学問すなわち物の理がわかると云う事と生活の自由すなわち金があると云う事とは独立して関係のないのみならず、かえつて反対のものである。学者であればこそ金がないのである。金を取るから学者にはなれないのである。学者は金がない代りに物の理がわかるので、町人は理窟^{りくつ}がわからないから、その代りに金を儲^{もう}ける」

何か云うだろうと思つて道也先生は二十秒ほど絶句して待っている。誰も何も云わない。

「それを心得んで金のある所には理窟きよくもあると考へているのは愚ぐの極である。しかも世間一般はそう誤認ごにんしている。あの人は金持ちで世間が尊敬しているからして理窟もわかつているに違ちがない、カルチュアーもあるにきまつていると——こう考へる。ところがその実はカルチュアーを受ける暇がなければこそ金をもうける時間が出来たのである。自然は公平なもので一人の男おとこに金ももうけさせる、同時にカルチュアーも授けると云うほどひいきに金持ちは己惚うぬぼれて……」

「ひや、ひや」「焼くな」「しつ、しつ」「だいぶ賑にぎやかになる。

「自分達は社会の上流に位りくつして一般から尊敬されているからして、世の中に自分ほど理窟に通じたものはない。学者びんぜんだろうが、何だろうがおれに頭をさげねばならんと思うのは憫然びんぜんのしだい

で、彼らがこんな考を起す事自身がカルチュアーのないと云う事実を証明している」

高柳君の眼は輝やいた。血が双頬そうきょうに上のぼってくる。

「訳わけのわからぬ彼らが己惚うぬぼれはとうてい濟度さいどすべからざる事とするも、天下社会から、彼らの己惚をもつともだとは認するに至つては愛想あいその尽きた不見識と云わねばならぬ。よく云う事だが、あの男もあのくらいな社会上の地位にあつて相應の財産も所有している事だから万更そんな訳のわからない事もなからう。豈計あにはからんやある場合には、そんな社会上の地位を得て相當の財産を有しておればこそ訳がわからないのである」

高柳君は胸の苦しみを忘れて、ひやひやと手を打った。隣の薩摩さつまがすり絋ちようろうてきはえへんと嘲弄せきばらい的な咳払をする。

「社会上の地位は何できまると云えば——いろいろある。第一

カルチュアーできまる場合もある。第二門閥もんぱつできまる場合もある。第三には芸能できまる場合もある。最後に金できまる場合もある。しかしこれはもつとも多い。かようにいろいろの標準があるのを混同して、金で相場がきまった男を学問で相場がきまった男と相互に通用し得るように考えている。ほとんど盲目めくら同然である」

エヘン、エヘンと云う声が散らばつて五六カ所に起る。高柳君は口を結んで、鼻から呼吸いきをはずませている。

「金で相場のきまった男は金以外に融通は利きかぬはずである。

金はある意味において貴重かも知れぬ。彼らはこの貴重なものようを擁ようしているから世の尊敬を受ける。よろしい。そこまでは誰も異存はない。しかし金以外の領分において彼らは幅はばを利かし得る人間ではない、金以外の標準をもつて社会上の地位を得る

人の仲間入は出来ない。もしそれが出来ると云えば学者も金持ちの領分へ乗り込んで金銭本位の区域内で威張つても好い訳になる。彼らはそうはさせぬ。しかし自分だけは自分の領分内におとなしくしている事を忘れて他の領分までのさばり出ようとする。それが物のわからない、好い証拠である」

高柳君は腰を半分浮かして拍手をした。人間は真似が好である。高柳君に誘い出されて、ぱちぱちの声が四方に起る。冷笑党は勢の不可なるを知つて黙した。

「金は労力の報酬である。だから労力を余計にすれば金は余計にとれる。ここまでは世間も公平である。（否これすらも不公平な事がある。相場師などは労力なしに金を攫んでいる）しかし一歩進めて考えて見るが好い。高等な労力に高等な報酬が伴うであろうか——諸君どう思います——返事がなければ説明し

なければならん。報酬なるものは眼前の利害にもつとも影響の多い事情だけできめられるのである。だから今の世でも教師の報酬はこあきんど小商人の報酬よりも少ないのである。眼前以上の遠い所高い所に労力を費やすものは、いかに将来のためにならうとも、国家のためにならうとも、人類のためにならうとも報酬はいよいよ減ずるのである。だによつて労力のこうげ高下では報酬の多寡はきまらない。金銭の分配は支配されておらん。したがって金のあるものが高尚な労力をしたとは限らない。換言すれば金があるから人間が高尚だとは云えない。金をめやす目安にして人物の価値をきめる訳には行かない」

とうとう滔々として述べて来た道也はちよつとここで切つて、満場の形勢を觀望した。活版に押した演説は生命がない。道也は相手しだいで、どうとも変わるつもりである。満場は思つたより静

かである。

「それを金があるからと云うてむやみにえらがるのは間違っている。学者と喧嘩けんかする資格があると思つてゐるのも間違つてゐる。気品のある人々に頭を下げさせるつもりでゐるのも間違つてゐる。——少しは考えても見るがいい。いくら金があつても病氣の時は医者に降参しなければなるまい。金貨を煎せんじて飲む訳には行かない……」

あまり熱心な滑稽こっけいなので、思わず嘖き出したものが三四人ある。道也先生は気がついた。

「そうでしょう——金貨を煎せんじたつて下痢げりはとまらないでしょう。——だから御医者に頭を下げる。その代り御医者は——金に頭を下げる」

道也先生はにやにやと笑つた。聴衆もおとなしく笑う。

「それで好いのです。金に頭を下げて結構です——しかし金持はいけない。医者に頭を下げる事を知つてながら、趣味とか、嗜好とか、氣品とか人品とか云う事に関して、學問のある、高尚な理窟のわかつた人に頭を下げることを知らん。のみならずかえつて金の力で、それらの頭をさげさせようとする。——盲目蛇に怖じずとはよく云つたものですねえ」

と急に會話調になつたのは曲折があつた。

「學問のある人、訳のわかつた人は金持が金の力で世間に利益を与うると同様の意味において、學問をもつて、わけの分つたところをもつて社会に幸福を与えるのである。だからして立場こそ違え、彼らはとうてい冒し得べからざる地位に確たる尻を据えているのである。」

「學者がもし金錢問題にかかれば、自己の本領を棄てて他の

縄張内なわばりうちに這入はいるのだから、金持ちに頭を下げるが順当であろう。同時に金以上の趣味とか文学とか人生とか社会とか云う問題に關しては金持ちの方が学者に恐れ入つて来なければならん。今、学者と金持の間に葛藤かつとうが起るとする。単に金銭問題ならば学者は初手しよてから無能力である。しかしそれが人生問題であり、道德問題であり、社会問題である以上は彼ら金持は最初から口を開く権能けんのうのないものと覺悟をして絶対的に学者の前に服従しなければならん。岩崎は別荘を立て連つねる事において天下の学者を圧倒しているかも知れんが、社会、人生の問題に關しては小児と一般である。十万坪の別荘を市の東西南北に建てたから天下の学者を凹へこましたと思うのは凌雲閣りょううんかくを作つたから仙人せんじんが恐れ入つたろうと考えるようなものだ……」

聴衆は道也の勢いきおいと最後の一句の奇警きけいなのに氣を奪われて黙つ

ている。独り高柳君がたまらなかつたと見えて大きな声を出して喝采かつさいした。

「商人が金を儲けるために金を使うのは専門上の事で誰も容喙ようかいが出来ぬ。しかし商買上に使わないで人事上にその力を利用するときは、訳のわかつた人に聞かねばならぬ。そうしなければ社会の悪を自ら醸造みずかじようぞうして平氣でいる事がある。今の金持の金のある一部分は常にこの目的に向つて使用されている。それと云うのも彼ら自身が金の主しゅであるだけで、他の徳、芸の主でないからである。学者を尊敬する事を知らんからである。いくら教えても人の云う事が理解出来んからである。災わざわいは必ず己おのれに帰る。彼らは是非ぜひとも共学者文学者の云う事に耳を傾けねばならぬ時期がくる。耳を傾けねば社会上の地位が保たもてぬ時期がくる」

聴衆は一度にどつと鬨ときを揚げた。高柳君は肺病にもかかわら

ずもつとも大なる鬨おおいを揚げた。生れてから始めてこんな痛快な感じを得た。襟巻えりまきに半分顔を包んでから風のなかをここまで来た甲斐かいはあると思う。

道也先生は予言者のごとく凜りんとして壇上に立っている。吹きまくる木枯こがらしは屋おくを撼うごかして去る。

十二

「ちつとは、好い方かね」と枕元へ坐る。

六畳の座敷は、畳がほけて、とんと打ったら夜でも埃ほこりが見えそうだ。宮島産の丸盆くすりびんに薬瓶けんおんきと驗温器けんおんきがいつしよに乗っている。

高柳君は演説を聞いて帰ってから、とうとう喀血かつけつしてしまった。今日はだいいいい」と床の上に起き返って後から搔卷かいまきを背せの

半分までかけている。

中野君は^{おおしまつむぎ たもと}大島紬の袂から^{ロシアがわ まぎたばこいれ}魯西亜皮の巻蓐入を出しかけたが、

「うん、煙草^{たばこ}を飲んじや、わるかったね」とまた袂のなかへ落す。

「なに構わない。どうせ煙草ぐらいで癒^{なお}りやしないんだから」と^{ふぜん}無然としている。

「そうでないよ。^{はじめ かんじん}初が肝心だ。今のうち養生しないといけない。昨日^{きのう}医者へ行つて聞いて見たが、なに心配するほどの事もない。

来たかい医者は」

「今朝来た。暖^{あつた}かにしていると云つた」

「うん。暖かにしているがいい。この室^{へや}は少し寒いねえ」と中野君は^{わび げ}佻し氣に^{あたり}四方を見廻した。

「あの障子^{しょうじ}なんか、宿の下女にでも張らしたらよかろう。風が

這^{はい}入^{はい}つて寒いだろう」

「障子だけ張^はつたつて……」

「転地でもしたらどうだい」

「医者もそう云^いうんだが」

「それじゃ、行くがいい。今朝そう云^いつたのかね」

「うん」

「それから君は何と答えた」

「何と答えるつたつて、別に答えようもないから……」

「行けばいいじゃないか」

「行けばいいだろうが、ただはいかれない」

高柳君は元氣のない顔をして、自分の膝頭^{ひざがしら}へ眼を落した。

瓦斯^{ガス}双子^{ふたご}の端^{はじ}から鼠色^{ねずみいろ}のフラネルが二寸ばかり食^はみ出^だしている。寸法も取らず別々に仕立てたものだろう。

「それは心配する事はない。僕がどうかする」

高柳君は潤うるおいのない眼を膝から移して、中野君の幸福な顔を見た。この顔しだいで返答はきまる。

「僕がどうかするよ。何なんだつて、そんな眼をして見るんだ」

高柳君は自分の心が自分の両眼りょうがんから、外を覗のぞいていたのだなと急に気がついた。

「君に金を借りるのか」

「借りないでもいいさ……」

「貰うのか」

「どうでもいいさ。そんな事を気に掛ける必要はない」

「借りるのはいやだ」

「じゃ借りなくつてもいいさ」

「しかし貰う訳には行かない」

「六^むずかしい男だね。何だつてそんなにやかましくいうのだい。学校にいる時分は、よく君の方から金を借せの、西洋料理を奢^{おご}れのとせびつたじゃないか」

「学校にいた時分は病氣なんぞありやしなかったよ」

「平生^{ふだん}ですら、そうなら病氣の時はなおさらだ。病氣の時に友

達が世話をするのは、誰から云つたつておかしくはないはずだ」

「そりや世話をする方から云えばそうだろう」

「じゃ君は何か僕に対して不平な事でもあるのかい」

「不平はないさありがたいと思つてるくらいだ」

「それじゃ心快^{こころよ}く僕の云う事を聞いてくれてもよかろう。自分で不愉快の眼鏡を掛けて世の中を見て、見られる僕らまでを不愉快にする必要はないじゃないか」

高柳君はしばらく返事をしない。なるほど自分は世の中を不

愉快にするために生きてるのかも知れない。どこへ出ても好かれた事がない。どうせ死ぬのだから、なまじい人の情を恩なさけに着的のはかえつて心苦しい。世の中を不愉快にするくらいな人間ならば、中野一人を愉快にしてやつたつて五十歩百歩だ。世の中を不愉快にするくらいな人間なら、また一日も早く死ぬ方がましである。

「君の親切を無むにしては気の毒だが僕は転地なんか、したくないんだから勘弁かんべんしてくれ」

「またそんなわからずやを云う。こう云う病気は初期が大切だよ。時期を失しつすると取り返しがつかないぜ」

「もう、とうに取り返しがつかないんだ」と山の上から飛び下りたような事を云う。

「それが病気だよ。病気のせいでそう悲観するんだ」

「悲観するつて希望のないものは悲観するのは当り前だ。君は必要がないから悲観しないのだ」

「困った男だなあ」としばらく匙さじを投げて、すいと起たつて障子をあける。例の梧桐ごとうが坊主ぼうずの枝を真直まっすぐに空に向つて曝さらしている。

「淋さびしい庭だなあ。桐きりが裸で立っている」

「この間まで葉が着いてたんだが、早いものだ。裸の桐に月がさすのを見た事があるかい。凄すこい景色けしきだ」

「そうだろう。——しかし寒いのに夜る起きるのはよくないぜ。

僕は冬の月は嫌きらいだ。月は夏がいい。夏のいい月夜に屋根舟に乗つて、隅田川から綾瀬あやせの方へ漕こがして行つて銀扇ぎんせんを水に流して遊んだら面白いだろう」

「気楽云つてらあ。銀扇を流すたどうするんだい」

「銀泥ぎんでいを置いた扇を何本も舟へ乗せて、月に向つて投げるのさ。

きらきらして奇麗きれいだろう」

「君の発明かい」

「昔むかしの通人つうじんはそんな風流をして遊んだそうだ」

「贅ぜい沢たくな奴らだ」

「君の机の上に原稿があるね。やつぱり地理学教授法か」

「地理学教授法はやめたさ。病気になつて、あんなつまらぬのがやれるものか」

「じゃ何だい」

「久しく書きかけて、それなりにして置いたものだ」

「あの小説か。君の一代の傑作か。いよいよ完成するつもりなのかい」

「病気になると、なおやりたくなる。今まではひまになつたらと思つていたが、もうそれまで待つちやいられない。死ぬ前に

是非書き上げないと気が済まない」

「死ぬ前は過激な言葉だ。書くのは賛成だが、あまり凝^こるとかえって身体^{からだ}がわるくなる」

「わるくなつても書けりやいいが、書けないから残念でたまらない。昨夜^{ゆうべ}は続きを三十枚かいた夢を見た」

「よつぽど書きたいのだと見えるね」

「書きたいさ。それでも書かなくっちゃ何のために生れて来たのかわからない。それが書けないときまつた以上は穀潰^{ごくつぶ}し同然ださ。だから君の厄介^{やっかい}にまでなつて、転地するがものはないんだ」

「それで転地するのがいやなのか」

「まあ、そうさ」

「そうか、それじゃ分つた。うん、そう云うつもりなのか」と

中野君はしばらく考えていたが、やがて

「それじゃ、君は無意味に人の世話になるのが厭いやなんだろうか、そこをを有意味にしようじゃないか」と云う。

「どうするんだ」

「君の目下もっかの目的は、かねて腹案のある述作を完成しようと云うのだろう。だからそれを条件にして僕が転地の費用を担当しようじゃないか。逗ず子でも鎌倉かまくらでも、熱海あたみでも君の好な所すきへ往いつて、呑氣のんきに養生する。ただ人の金を使つて呑氣に養生するだけでは心が済まない。だから療養かたがた氣が向いた時に続きをかくさ。そうして身体からだがよくなつて、作さくが出来上つたら歸つてくる。僕は費用を担当した代り君に一大傑作を世間へ出して貰う。どうだい。それなら僕の主意も立ち、君の望のぞみも叶かなう。一挙兩得じゃないか」

高柳君は膝頭ひざがしらを見詰めて考えていた。

「僕が君の所へ、僕の作を持って行けば、僕の君に対する責任は済む訳なんだね」

「そうさ。同時に君が天下に対する責任いちぶの一分が済むようになるのさ」

「じゃ、金を貰おう。貰いつ放しに死んでしまうかも知れないが——いいや、まあ、死ぬまで書いて見よう——死ぬまで書いて書けない事もなからう」

「死ぬまでかいちや大変だ。暖かい相州辺そうしゅうへんへ行つて氣らくを樂らくにして、時々一頁二頁ずつ書く——僕の条件に期限はないんだぜ、君」

「うん、よしきつと書いて持つて行く。君の金を使つて茫然ぼうぜんとしていちゃ済まない」

「そんな済むの済まないのと考えてちやいけない」

「うん、よし分つた。ともかくも転地しよう。明日あしたから行こう」

「だいぶ早いな。早い方がいいだろう。いくら早くつても構わない。用意はちゃんと出来てるんだから」と懷中から七子ななこの三折みつおれの紙入を出して、中から一束の紙幣しへいをつかみ出す。

「ここに百円ある。あとはまた送る。これだけあつたら当分はいいだろう」

「そんなにいるものか」

「なにこれだけ持って行くがいい。実はこれは妻さいの発議ほつぎだよ。妻の好意だと思つて持つて行つてくれたまえ」

「それじゃ、百円だけ持つて行くか」

「持つて行くがいいとも。せつかく包んで来たんだから」

「じゃ、置いて行つてくれたまえ」

「そこでと、じゃ明日^{あす}立つね。場所か？ 場所はどこでもいいさ。君の気の向いた所がよからう。向^{むこう}へ着いてからちよつと手紙を出してくれればいいよ。——護送するほどの大病人でもないから僕は停車場へも行かないよ。——ほかに用はなかったかな。——なに少し急ぐんだ。実は今日は妻を連れて親類へ行く約束があるんで、待つてゐるから、僕は失敬しなくっちゃならない」

「そうか、もう帰るか。それじゃ奥さんによろしく」

中野君は欣然^{きんぜん}として帰つて行く。高柳君は立つて、着物を着換えた。

百円の金は聞いた事がある。が見たのはこれが始めてである。使うのはもちろんの事始めてである。かねてから自分を代表するほどの作物^{さくぶつ}を何か書いて見たいと思つていた。生活難^{あいま}の合間

合間に一頁二頁と筆を執つた事はあるが、興が催すと、すぐやめねばならぬほど、饑は寒は容赦なくわれを追うてくる。この容子では当分仕事らしい仕事は出来そうもない。ただ地理学教授法を訳して露命を繋いでいるようでは馬車馬が秣を食つて終日馳けあるくと変りはなさそうだ。おれにはおれがある。このおれを出さないでぶらぶらと死んでしまうのはもつたいたない。のみならず親の手前世間の手前面目ない。人から土偶のようにうとまれるのも、このおれを出す機会がなくて、鈍根にさえ立派に出来る翻訳の下働きなどで日を暮らしているからである。どうしても無念だ。石に噛みついてともと思う矢先に道也の演説を聞いて床についた。医者は大胆にも結核の初期だと云う。いよいよ結核なら、とても助からない。命のあるうちにとまた旧稿に向つて見たが、縋る縄は遅く、逃げる泥棒は早い。何一つ見

やげも置かないで、消えて行くかと思うと、熱さえ余計に出る。これ一つ纏めれば死んでも言訳は立つ。立つ言訳を作るには手当もしなければならん。今の百円は他日の万金よりも貴い。百円を懐にして室のなかを二度三度廻る。気分も爽かに胸も涼しい。たちまち思い切ったように帽を取って師走の市に飛び出した。黄昏の神楽坂を上ると、もう五時に近い。気の早い店では、はや瓦斯を点じている。

毘沙門の提灯は年内に張りかえぬつもりか、色が褪めて暗いなかで揺れている。門前の屋台で職人が手拭を半纏にとつて、しきりに寿司を握っている。露店の三馬は光るほどに色が寒い。黒足袋を往来へ並べて、頬被りに懐手をしたのがある。あれでも足袋は売れるかしらん。今川焼は一銭に三つで婆さんの自製にかかる。六銭五厘の万年筆は安過ぎると思う。

世は様々だ、今ここを通っているおれは、翌あすの朝になると、もう五六十里先へ飛んで行く。とは寿司屋すしやの職人も今川焼の婆さんも夢にも知るまい。それから、この百円を使い切ると金の代りに金より貴いあるものを懷いだにしてまた東京へ帰つて来る。とも誰も思うものはあるまい。世は様々である。

道也先生に逢あつて、実はこれこれだと云つたら先生はそうかと微笑するだろう。あす立ちますと云つたらあるいは驚ろくだろう。一世一代の作を仕上げてかえるつもりだと云つたらさぞ喜ぶであろう。——空想は空想の子である。もつとも繁殖力に富むものを脳裏のうりに植えつけた高柳君は、病の身にある事を忘れて、いつの間にか先生の門口かどぐちに立つた。

誰か来客のようであるが、せっかく来たのをとわざと遠慮を抜いて「頼む」と声をかけて見た。「どなた」と奥から云うのは

先生自身である。

「私です。高柳……」

「はあ、御這入り」と云つたなり、出てくる景色もない。

高柳君は玄関から客間へ通る。推察の通り先客がいた。市樂の羽織に、くすんだ縞ものを着て、帯の紋博多だけがいちじるしく眼立つ。額の狭い頬骨の高い、鈍栗眼である。高柳君は先生に挨拶を済ました、あとで鈍栗に黙礼をした。

「どうしました。だいぶ遅く来ましたね。何か用でも……」

「いいえ、ちよつと——実は御暇乞に上がりました」

「御暇乞？ 田舎の中学へでも赴任するんですか」

間の襖をあけて、細君が茶を持って出る。高柳君と御辞儀の交換をして居間へ退く。

「いえ、少し転地しようかと思ひまして」

「それじゃ身体からだでも悪いんですね」

「大した事もなかりうと思ひますが、だんだん勧める人もありますから」

「うん。わるけりや、行くがいいですとも。いつ？ あした？
そうですか。それじゃまあ緩ゆるくり話したまえ。——今ちよつと
用談を済ましてしまふから」と道也先生は鈍栗の方へ向いた。

「それで、どうも御氣の毒だが——今申す通りの事情だから、少
し待つてくれませんか」

「それは待つて上げたいのです。しかし私の方の都合もありま
して」

「だから利子を上げればいいでしょう。利子だけ取つて元金は
春まで猶ゆう予よしてくれませんか」

「利子は今まででも滞とどりなくちようだいしておりますから、利

子さえ取れれば好い金なら、いつまでも御用立てて置きたいのですが……」

「そうはいかんでしょうか」

「せっかくの御頼おたのみだから、出来れば、そうしたいのですが……」

「いけませんか」

「どうもまことに御気の毒で……」

「どうしても、いかんですか」

「どうあつても百円こしらだけ拵こしらえていただかなくっちゃならんので」

「今夜中にですか」

「ええ、まあ、そうですね。昨日きのうが期限でしたね」

「期限の切れたのは知ってます。それを忘れるような僕じゃない。だからいろいろ奔走して見たんだが、どうも出来ないから、わざわざ君の所へ使をあげたのです」

「ええ、御手紙はたしかに拝見しました。何か御著述があるそうで、それを本屋の方へ御売渡しになるまで延期の御申込でした」

「さよう」

「ところがですて、この金の性質がですて——ただ利子を生ませる目的でないものですから——実は年末には是非入用だがと念を押して御兄さんおあにいに伺ったくらいなのです。ところが御兄さんが、いやそりや大丈夫、ほかのものなら知らないが、弟に限ってけっして、そんな不都合はない。受合う。とおっしゃるものですから、それで私も安心して御用立て申したので——今になつて御違約ではなはだ迷惑します」

道也先生は默然もくねんとしている。鈍栗どんぐりは煙草たばこをすばすば呑のむ。

「先生」と高柳君が突然横合から口を出した。

「ええ」と道也先生は、こつちを向く。別段赤面した様子も見えない。赤面するくらいなら用談中と云つて面会を謝絶するはずである。

「御話し中はなはだ失礼ですが。ちよつと伺つても、ようございましょうか」

「ええ、いいです。何ですか」

「先生は今御著作をなさつたと承うけたまりましたが、失礼ですが、その原稿を見せていただく訳には行きますまいか」

「見るなら御覧、待つてゐるうち、読むのですか」

高柳君は黙っている。道也先生は立つて、床の間に積みかさねた書籍の間から、厚さ三寸ほどの原稿を取り出して、青年に渡しながら

「見て御覧」という。表紙には人格論と楷書かいしよでかいてある。

「ありがとう」と両手に受けた青年は、しばしこの人格論の三字をしけじけと眺^{なが}めていたが、やがて眼を挙^あげて鈍栗の方を見た。

「君、この原稿を百円に買つて上げませんか」

「エヘヘヘ。私は本屋じゃありません」

「じゃ買わないですね」

「エヘヘへ御冗談^{ごじようだん}を」

「先生」

「何ですか」

「この原稿を百円で私に譲つて下さい」

「その原稿?……」

「安過ぎるでしょう。何万円だつて安過ぎるのは知っています。

しかし私は先生の弟子だから百円に負けて譲つて下さい」

道也先生は茫然^{ぼうぜん}として青年の顔を見守っている。

「是非譲つて下さい。——金はあるんです。——ちゃんとここに持っています。——百円ちゃんとあります」

高柳君は懷ふところから受取つたままの金包を取り出して、二人の間に置いた。

「君、そんな金を僕が君から……」と道也先生は押し返そうとする。

「いいえ、いいんです。好いいから取つて下さい。——いや間違つたんです。是非この原稿を譲つて下さい。——先生私はあなたの、弟子です。——越後の高田で先生をいじめて追い出した弟子の一人です。——だから譲つて下さい」

愕然がくぜんたる道也先生を残して、高柳君は暗き夜の中に紛れ去つた。彼は自己を代表すべき作物さくぶつを転地先よりもたらし帰る代りに、より偉大なる人格論を懷ふところにして、これをわが友中野君に致いたした。

し、中野君とその細君の好意に酬^{むく}いんとするのである。

底本：「夏目漱石全集 3」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和 62）年 12 月 1 日第 1 刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版夏目漱石全集」筑摩書房

1971（昭和 46）年 4 月～1972（昭和 47）年 1 月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号 5-86）を、大振りにつくっています。

入力：柴田卓治

校正：伊藤時也

1999 年 2 月 24 日公開

2004 年 2 月 27 日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。